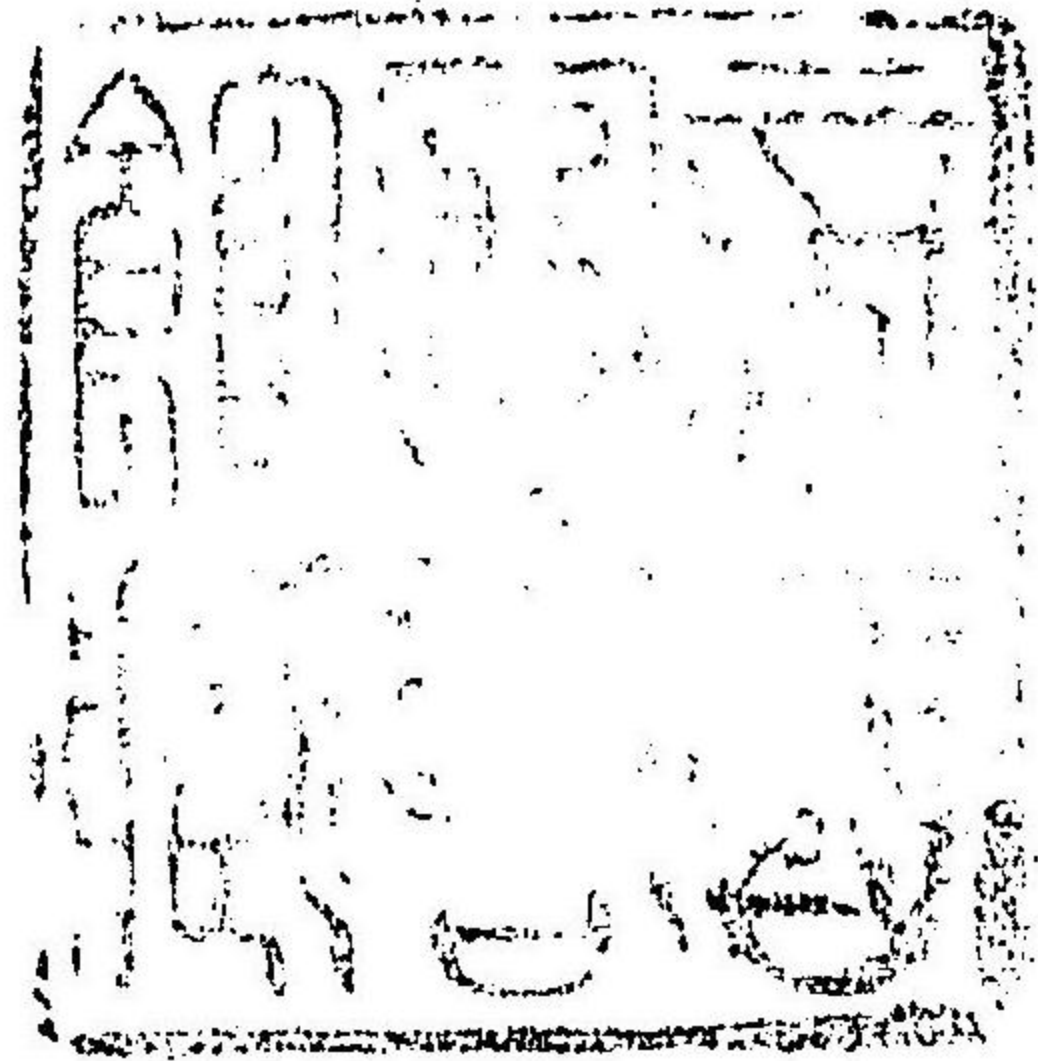


4
21

あ
か
さ

廣津柳浪著



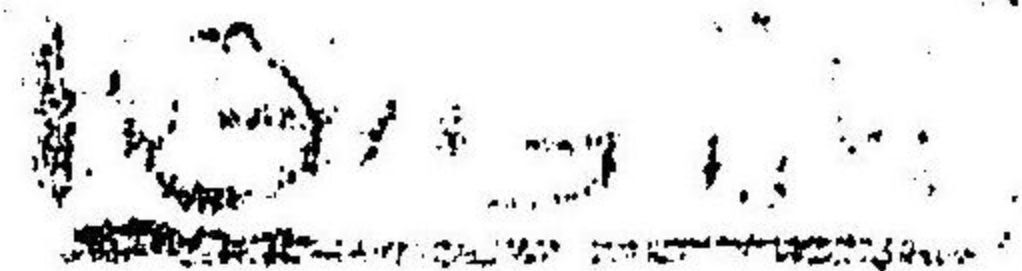


古

字

如

草





Handwritten signature or mark, possibly a seal, located in the lower right corner of the illustration.

あやめ草

廣津 柳浪

東京は京橋區築地三丁目、屋根付の總檜木門、破風付の玄關前には雌松の一抱もあるべきを植ゑ華族の住居かと見紛はばかもの構は、これぞ世に聞こえたる紳商八十島大助が本宅である。

玄關に列びて左手に、千本格子一間半の窓があり、中硝子の四枚の腰障子からは、來客を一目に認め得らるゝ結構。此室には執事兼玄關番の老人松田喜兵衛が、つねに老眼鏡を光らして居る。

今日は珍らしくも大助が在宅なので、早くも三四人の來客が押掛け、門内には自用らしい俵が二輛門外にも帳場俵が一輛待つて居る。

松田老人は玄關に來客の下駄を揃へ置き、我室と極めて居る一室に歸つて來て、窓の下の机の前に坐つて、ほつと息を吐いた。

晩酌に一合位は飲む口と見え、六十歳近い胡麻鹽頭に似合はず、顔の光澤も佳く、肉付も豊で、眼付の愛らしい老人である。

机の上の來客控帳を擴げて、禿筆を噛みながら、「先刻も入來なすつたのが、土岐さんに片桐さん……此はもう記けてあるから、大塚さんを記ければ可いとして……大塚義三郎殿……斯うして

録 目 露 蕭 子 浪 柳

五枚姿繪

一人娘

段々

自暴自棄

いとし兒

亂菊物語

異り種

姫様お辰

女馬士



置けば先づ可いのだ。」と、控帳を片寄せ、「何事が發つたのか知らんて。片桐さんは自盡黨の代議士だけれど、旦那が厭がり切つてお居てなさるのだ。土岐さんが連れてお入てなすつたのさへ不思議だのに、旦那も待兼ねても居らっしゃつた様な鹽梅で、直ぐに通せと仰有つたが、何も不思議でならない。」と、小首を捻つて、「大塚さんにしても左様だ。彼奴は相場師だからと、旦那が是迄餘り面會なさらなかつたのに、今日は別室に待たせて置けと仰有つたし、何も不思議だ。お、すっかり忘れて居た。大塚さんへは未だ御火鉢を出さなかつた。それにお茶も。」

老人は女中溜とも云ふ可き、八疊の茶の間を入口から差覗いて、

「もし、何方か……お大さんでもお辨さんでも八疊のお客さまへお茶を上げて貰ひませうか。序にお火鉢もですよ。」

茶の間の中からは二三人の女中の聲で、「はいはい、唯今。」

「今朝は又お返つてお寒う御在ますな。」

老人は女中達へ斯う世辭を云つて置いて我室へ歸ると、茶の間には女中等の笑ひ聲が高まつた。

「あ、世話の焼けた事だ。」と、老人は自用の茶を入れて一口喫んだが、不圖机の上を見返つて、

「いや、又此處にも一ツ忘れた事が、と、來客控帳に重ねてあつた雜用帳を開いて、「障子紙三本三十六錢……それに……。」

「松田さん、今日は大分お寒い様ですね。」

「はい、左様で。まア何卒此方へ。」

「御邪魔ではありませんか。」

斯う云ひながら入つて來たのは、年輩廿三四歳の若者である。下豊の顔の色白さが中にほんのり紅味を帯び、眼も清しく、口元にも締りがあり、眉のさりとしたる、品格さへも何處となく立上がつて見えたが、何故か氣が引立ない様子で、松田老人に對して坐るさへ、力なげてあつた。着物は羽織も綿入も同じ秩父銘仙で、帯は無地の紺博多である。

「いや、御布團が御在ませんな。」と、松田老人は若者に對する會釋も丁寧で、自分が二枚重ねて居た座布團の一枚を進めながら、「失禮ですけれども、鳥渡是でも。」

「いえ、私なら能うですよ。今日は寒い様ですから、まア貴方敷いてお居てなす。」

「まア其様事を仰有らなす。」

松田老人は引立ない若者の顔を熱く見て、覺えず涙含んだ。

(一)

松田老人の室に入つて來た若者は、八杉三之助と呼ばれて、當家の主人八十島大助が先妻お須賀の親八杉甚藏が兄八杉三郎兵衛の兒である。十三歳の時父母に死別れ、男女兄弟五人迄あつたが、何れも孩兒の中に死し、末子の三之助のみ取殘されて、憐れむ可き孤兒と成つたと云ふ事だ。父の三郎兵衛は巨萬の富を積み、東京の豪商の内にも重んぜられて居たのに、死後其財産は悉く弟の八杉甚藏が横領して了つたと云ふ噂で、其孤兒の三之助は却つて八十島方に寄食と成つて居るのであつた。

尤も三之助が父母に死別した頃には、従姉のお須賀が尙ほ八十島大助の妻に成つて居た時で、道を云へば甚蔵が引取つて世話す可きであるのを、お須賀より大助へ頼みて、自分の弟として養ひ、大助も亦我子の如く愛して居た。小學中學の課程を履み、去來高等學校へ入學の試験を受けんとした時、測らずも病に侵され、一頓挫を來たしたさへあるのに、端なくもお須賀が大助に離別される事に成つたのである。其際に三之助も八十島家を辭さうとしたが、お須賀が私かに諭して止まらしめ、大助も亦三之助を逐ふ意がなかつたので、其儘八十島家に止まり、お須賀の娘お綾と互に身の不幸を語合ひ、お須賀と大助との仲解けて、復びお須賀の、歸來ん日を待つて居たが、其も空頼となり、大助が後妻には昔は柳橋に左袂を取り、久しく外妾として圍はれて居てお龍と云ふ女が乗込む事となつて了た。加之、大助が他の妾に生ませたと聞こえたお友と云ふ娘が、お綾の妹として入つて來たのであつた。此様有様であるから、三之助に對する待遇が、お須賀の時と一様には行かぬ。けれども、大助が三之助を愛する事は、尠しも昔に變らぬので、三之助は其好意に背いて八十島家を去る事は成し得なかつた。縱成し得たとしても、叔父甚蔵が方より外に身を寄す可き家が無い、それが可厭だから寧ろ何家へなり奉公をしてと、幾度か思定めた事もあつたが、何時も大助の爲に却けられた。病の爲とは云ひながら、肝腎の學業は廢し、足腰を寛かに伸ばす可き家としては無いので、中夜既往將來を念ふ毎に、氣が狂はしうなる事さへあるけれども、大助の厚意に戻つてはならぬと、八十島銀行の行員として、面白からぬ月日を送つて居るのであつた。

松田老人はつねに三之助が境遇を氣の毒に思つて居るので、彼が今詰らなさらうな顔を爲し、悄然と

して其處に坐つて居るのを見ると、氣の毒さに覺えず涙合された。

『八杉さん、今日は銀行の方は御休でしたな。』

『左様です。今日は一日自分の体に成りました。何か御手傳を爲る様な事はありませぬかね。あるなら遠慮なく云つて下さい。』

『へえ、いえ、別に御願申す事も御在ませぬ。』松田老人は三之助の顔の色の悪いのを見て、『些と御散歩でも爲すつては如何ですか。梅は些し後れたかも知れませんが、向島あたりでも……尤も尙たお寒ふ御在ませうな。』

三之助は氣が進まない様子で、『寒い程でもありますまひが……小父さんが御多忙しうですから今日は終日家外へ出まいと思ふのです。いつ何時小父さんの御用があるかも知れませぬから、まア何處へも参りますまいよ。』

『成程。』と、老人は首肯いたが、臆て聲を私めて、

『八杉さん、お奥に片桐さんが御入でございますが、また何か政黨屋と……旦那は政黨にはもう懲々したと云つて居らっしゃつたのに、また何ですか知らんて、何か御關係が出来た様な譯でせうかな。何か御聞込みなすつた事はありませぬかな。』

『いえ、別に。』とは云つたが、三之助の顔は忽ち愛の雲に閉されて了つた。

『何か御聞込は。』と、老人は又繰返して、『それに相場師の大塚さん迄、』

『えッ、大塚さん。』と三之助は覺えず眼を睜つて、『彼人も來て居るんですか。左様ですか。』

三之助が深き溜息を吐いた時、老人は障子の硝子越に早くも何物かを認めて、
 『やッ、阿友さまが御歸りだ。』
 三之助も門の方を見返ると、大助が乙娘の阿友が學校通の服装その儘、海老茶の袴にお召の書生羽織、侍女のお定を連れて歸つて來た。

(三)

大助が乙娘阿友は今年十七歳であるが、姉のお綾に比べて、其容色は似たり寄ツたり、何も美人として世間の賞物に成つて居る。姉が梅ならば妹は櫻花とは、其形から心までを評し盡したので、妹は母お龍の氣に入りと云ふのが、侍女出入の者共へ一方ならず重を成して、阿友方が五人ならお綾方は二人と云ふ有様であるのだ。

松田老人は早くもお友を出迎へて、

『お友さま、今日は大層學校が早い様で御座ますな。』

『おほ、』と、お友は可笑さうに笑つて、『松田さん今日は日曜なのよ。』

『あッ、成程。左様で御在ましたな。あは、』と、老人は態と高笑を爲し、『早くお奥へ行らッしや

いまし。お寒う御在ましたらう。』

お友が上るのを機に、お定はお友の靴を持つて勝手口へ入つて了つた。

お友は奥へ行かうとして、松田の室を差覗くと、三之助が居たので覺えず顔を赧うして、『三さん、

唯今。』

『お歸宅でしたか。』と、三之助は僅かに斯う云つて會釋したばかりである。

お友は何故か熟と三之助の横顔を見て、其儘奥へ行つて了つた。

松田老人は三之助へ對ひ、『お友さまは相變らず御機嫌で御在ますな。は、は、お綾さまは又別段で御

居てなさいます。』と、聲を低うし、『併し、御可愛相な事で。八杉さん、貴所より他に御相談なさらうと

云ふお方は無し……貴所も御氣の毒で御在ますが、お綾さまは御婦人の事ではあり、それに高聲は申

されませんが、御新造さまが彼通で居らッしやるので……八杉さん、貴方お方に成つてお上げなさい

まし。』

三之助は淋しげに笑つて、『私は此通の意氣地なだから、中々阿綾さんの相談相手には成れません。

それに何ですよ、私等が惣ツかに口を出すと、却つて叔母さんの憎味が増す様でも……は、は、お綾

さんの事どころでは無いですよ、自分の事でさ……』と眼が潤んだのを隠す爲めか、横を向いて咳

拂を爲た。

『御尤で御在ます。貴方にしても前の御新造様が居らッしやる時の様な譯には參りません。それは私

もお察し申して居りますとも。貴方は八杉さまの……』

『松田さんもう、昔の事などは、』と、八杉は遮つて、『昔の事を云はれると、私も變な心持に成つて來

るし、恨まないでも濟む人を怨みたくも成るのですから、もう云はなして下さ。』

『御尤で御在ますとも。それに、』

老人の癖として、又語り續け様とした時、女中のお大の聲で、「松田さん、お客さまが御歸り遊ばします。」

『はア。』

松田老人が高く答へる間も無く、土岐と片桐とは女中のお大とお辨とに送られて玄關へ出て来た。

土岐頼夫と云ふは四十年輩の、見受けた處正に一個の好丈夫である。身材も高く、肉も豊で、幕内

力士ほどの體格を具へ、顔もゆつたりとして眼にも口にも愛嬌溢るばかり。けれども、其眼に一種

厭ふ可き働があるとは三之助が私に認めて、他へこそ云はぬが、恩人八十島が爲めに危ぶんで居た處

である。

片桐房元は自憲黨の代議士で、年齢は三十七八、瘦身の身材の低い、頬鬚を長く伸ばして態と縮卷

らした、眼のさよろつく男である。

土岐も片桐と共に式臺に下り様としたが、何と思つたか立止つて、

『片桐さん、君は直ぐに事務所にお行で、せうな。』

『左様。』

『それでは一步お先に……何せ其處でも別申す譯だから、此で御免を被りませう。』

片桐は鳥渡小首を捻たが、苦笑をしながら、「松矢大臣の方へは、今夜にも行つて下さるすな。」

『承知して居ります。』

『失敬。』とばかりで、片桐は玄關前にて俥に乗り、急いで去つて了つた。

土岐は何か考へて居たが、松田老人を見返り、「松田さん、八杉さんの御息は御居てかね。』
『はい、御居て、御在りますよ。八杉さん、八杉さん。』と、松田老人は自分の室へ駆込んだ。

(四)

八杉三之助は土岐が自分に會ひたいと云ふのは、何の爲であらうか。何も用のありさうな事はない
がと思ひながら、差當つて辭退もならず、松田老人に誘はれながら玄關へ出て来た。

土岐は三之助を見るより、外眦に皺が見える迄に笑を含んで、「や、久瀧でしたな。』

『はア、三之助は丁寧に叩頭を爲た。』

『松田さん、此處で立談も出来ないですが……。』

『あッ、左様で御在りますな。何卒此方へ。』

松田老人は土岐と三之助とを、應接の室に案内した。此處は室の真中に紫檀の卓があり、椅子も同

く紫檀、鏡に玉を箝め、其上に幽禪縮緬の座布團を括付けたのが、四方を圍んで四脚置かれてある。

土岐は先づ椅子に掛けて、「八杉さん、其處に掛けて下さア。』

『はア、三之助は尙ほ椅子に掛けない。』

『其では困るすな。貴所の御親父には、私は非常に御世話に成つて居ます。さア、何卒お掛け下さ

る様に。』

三之助は僅かに椅子に掛けた。

『御目に掛る度に、大きくお成りですな。』と、土岐は判て押した様な世辭を列べ、『私の宅へも些と遊にお入來を願ひたいもので。』

『はい、何れ伺ひます。』

『何卒ね。實は種々御相談がおりますので。』

土岐が斯う云つて、三之助の顔を呢と見た時、松田老人が大塚を奥へ案内するのか、何卒彼方へと、應接所の外に人を伴ふ聲が聞こえた。

『また御來客がある様ですな。』と、土岐は耳を澄したが、直ぐに三之助に對ひ、『八杉さん、御相談と申すのは外でもありませんがね、實は此處の大將——八十鳥さんからの御懇話もあるもので……外でも無すが、君の身の上に就いてだが……。』

『私の身の上は就いて……。』と、三之助は餘りの意外さに血の上る様な心持がした。

『大將の話には、今の様に銀行員に見習見た様な事をさせて置くのも——何時までも左様して置いては、當人も面白くあるまじからと云ふのでな。』と、土岐は三之助の顔色に眼を注げながら、『お前の方に何か使道はあるまじかと、斯う云はれたので——尤も今日ではない、先日話の序に其事が出たてすがなア。』と、語を切つて三之助を見詰めた。

三之助は些しく顔を斜になし、『は。』

『就いては私の方に心當があるのだが、君の意向を聞いた上でないと不可ので……何うてせうかな。』

『しろく有難う御座ます、併し、』と、三之助は語を切つて土岐の顔を見て、『小父さんが是非左様爲る様にと仰有る譯なら、』

『いや、左様ではなしたので。是非との御相談では無いのですがな。』

三之助は此時不圖思當つた事があるので、土岐の語の終るを待たず、『叔母さんからも御相談が、』

『えッ、叔母さんからは。』と、土岐は心得ぬ顔を爲ながら、鳥渡險しい眼をした。

『當家の叔母の事ですが。』

『あッ、左様か。今の御新造の事ですか。』と、土岐は態と下墨む様に苦笑しながら、『貴所には眞の叔母さんと云ふ譯でも無いのですな。』

『いえ、叔父の家内ですから。』

『左様さ。左様云へば其様ものだが……いや、御新造からは何ともお話が無いので。』

『左様ですか。』と、三之助は深く考へて居たが、聽て一入語を丁寧にして、『切角御親切に仰有つて下さいますか、それはお断り申します。』

『いやだとも云ひなされるかね。』と、土岐は垂頭いた三之助を熟く視て、『強てとは云はないが、今日の様に碌々として居ては、君ほどの學識を有ちながら、惜しいですな。』

三之助は覺えず苦笑して、『いや、忍入ります。併し、御断り申します。』

『其ては止むを得ません。』と、土岐は不興氣に立上つて、『併し、君は八杉三郎兵衛さんの子と云ふ事を。』

「はい。其を忘れる程の三之助でもありません。」と、三之助の語調はきつぱりして居た。
 「それで可い。」
 土岐は嘲る様な語調で斯う云つて、應接所を出た。
 三之助は土岐を送り出すとすると、中庭の椽側の障子を細目に開けたものがある。三之助は其と知りながら、土岐を送つて玄關へ出て行つた。

(五)

三之助が土岐を玄關に送出した時には、松田老人は奥に用てもあつたのか、例の室に見えなかつた。
 「何も失禮を致しました。」
 三之助は土岐の俣の後から斯う聲を掛け、門を出て去つたのを見果て、太き溜息を吐いたが、續いて冷笑を漏すと共に、四邊を見廻し、人なきを見て再び應接所に入つた。
 應接所には前に障子を細目に開けた主かあらぬか、椅子に依つて三之助を待つて居た者があつた。
 年は十八九ばかりで、秩父銘仙の羽織に、同物の着物。髪を島田に結び、切も掛けず簪も挿さず、細面の淋しくはあるが、目元なり口元なりに、美しさも愛らしさも見え、所謂見れば見るほど見勝る方、三之助が入つて来た時莞爾笑を漏して、懐かしさうに見上げた。
 「三さん、能く断つて了ひなすつたわね。」
 三之助は首肯しながら、「お綾さん、貴女聞いて居たんだね。」

「えい左様なのよ。土岐さんが三さまを應接所へつて、お大が教へてお呉れたから、悪いとは思つたけどもね、何だか氣に成るから、私と偷聽して居たのよ。」
 「左様でしたか。」
 「能く断つて下すつたわね。私はね、三さん。」
 「鳥渡も待ちなさい、怪しく思はれると不可いから。」と、三之助は一方の唐紙を二枚とも開擴げて来て、「お綾さんと私と話して居ると、お友さんも左様だが、第一叔母さんの機嫌が悪いから。」と、椅子に掛けて莞爾して、「土岐さんから親切に相談があつたんですが、まア断つた方がと、断つて了ひました。」
 「全くですは。」と、お綾は小聲に成つて、「土岐さんが先刻の様な事を云ひなされるのもね、全く阿母さんの指金なんだもの。」
 「左様でせうか。」と、三之助は微笑を含んで、「私も左様かも知れないと思つたから……結局邪魔を拂はうと云ふんですね。」
 「左様よー」と、お綾は三之助を見る眼に涙を含みて、「三さん、私と貴方とは何の因果なんてせうね。始終心配ばかり爲て居て、一時間だつて安心して居られないんだもの。本統に辛う御座んすわね。」
 「けれども、辛棒が第一ですよ。私が貴女の御親父さんの——叔父さんのお世話に成つて、斯して居るのにはね、種々他に事情もあるんだが、貴女の事が氣に掛るものだから、此家を辭る氣にはなれない。貴女の御母親さんは私とは従姉弟だが、私とは年も違ふし、御世話には成つたんだし、以前から叔母

さんくと呼んで居たのだから、私は貴方を、失敬な事を云ふ様だけれども、妹の様に思つて居るんです。

『それは私だつて左様よ、三さんを兄さんだと思つてますわ。』

三之助はお綾の語を押へて、『まあお聞きなさい。今の叔母さんがお友さんばかりを可愛がって、お綾さんの事だと云ふと、實に餘り酷いと思ふ事ばかりだから……叔父さんの前では、其様でも無いから、叔父さんは氣が付きなされないし——私は幾度云つて遣うと思つたか知れない。けれども其爲に風波が發る様でも、叔父さんは彼通外へ氣を遣つて御居てなざるし、御氣の毒だと思つては、思返して居るんですよ。泣いちゃ不可い。貴女が泣顔を爲てお居での處を——加之に私と差向ひだし——叔母さんやお友さんに見られては不可い。お辨に見られても、直ぐに云付けられて、又何様事に成るかも知れない。お綾さん、泣いちゃ不可い。泣くんなら、私は彼方へ行つて了ふから。』

『あ、ッ三さん。』と、お綾は強ひて泣くさひとするけれども、止め得ぬ涙聲で、『三さんが私の爲に、其様に心配して下さいるんだから、私やお氣の毒で……』と、後はもう云ひ得なくなつた。

(六)

三之助もお綾の語を聞いて居る中に、覺えず涙含んだのを、咳拂に紛らして『なアにね、貴女や私がか心配する様に、叔母さんが意地が悪いと云ふんぢや無いかも知れないから、餘り氣にお掛けてない方が可いんですよ。私も全く意氣地が無いね、お綾さんに此様事を云ひながら、自分がつい涙を溢す

なんて。は、は。もう止ませう。本統に人に見られても悪い。まあ何とかなつて行くてせうさ。』

『三さん堪忍して頂戴よ。』と、お綾は涙の痕の消えよとばかり、手巾で能う顔を拭きながら、

『貴所ね、彼後阿母さん處を訪ねて下さつて。』

『いえ、未だ訪ねませんでした。もう十日ばかり御無沙汰を爲て居るから、訪ねたいと思つて居るんですが、』と三之助は氣の毒さうに頭を掻いて、『今日午後——叔父さんの御用もありませんから——叔母さん處を訪ねて見ませう。』

『左様。』と、お綾は嬉しく思ひながらも、『今日で無くつても可いんですから。それに手紙を上げたいんですからね、御氣の毒ですけれども……』

三之助は眉を擡めて『手紙を……もう書いてあるんですか。』

『いえ、行つて下さるんなら、後刻迄に書いて置きますよ。』

『それがね……危険だなア。』と、三之助は覺えず腕組を爲た。

『えッ、危険ですッて。』と、お綾も眉を寄せて三之助を見上げた。

『お友さんや、お辨に見られてもすると……見られない迄も、書損の反故でも拾はれて御覽なさい、それこそ大變ですぜ。』

『左様ね。ぢやア、三さんにお傳言を頼みませうか。其方が可いか知ら。』と、お綾は懐かしの實の母へ、せめて文字にてなりとも語を交したい願だから、三之助の注意を道理とは思ひながらも、尙ほ思切かねて居た。

三之助も綾の意中を察すると、強ひても止め兼ねるので、『是非手紙を上げたいと思ひなさるなら、持つて行つても可いが……大丈夫でせうな、決して反故なんぞを。』

『え、其は大丈夫だけでも。』と、綾は考へて居たが、『左様ね、何かして見られてもすると、本統に大變だから、手紙は止に爲ませうよ。』

『左様お爲なさい。私が聞いても差支の無い事なら、御傳言に爲様ぢやありませんか。私の口から叔母さんの御耳へ入れるだけだから、注意さへすれば他に漏れる恐もありませんから、私へお話しなさい。』

『ぢやア、左様願ふ事に。』と、綾は考へて居たが、『なにね、別にこれッて云ふ事も無いけれども……阿母さんが何様にして居てだか、能うく見て来て下さいよ。私は未だ行つた事が無いから知らないけれども、裏店見たいな小ぼけな家に、一人て御居てなさるさうですから、不自由な事はかしたらうと思ふんですよ。三さん、貴所かち能く聞いて下さつてね、萬一お金の入用事があるとか、何か入る物がある様だツたら、私へ告して下さいな。私が何様事を爲しても、阿母さんに不自由をさせたくありませんから、能く伺つて来て下さいよ。ね、能う御在んすか。』

三之助は頻りに首肯いて『承知しました。尤も此迄にしても、私も應分の御貢を致したいと思つて叔母さんへ御話爲た事もあつたんですが、叔母さんは彼道の御氣性ですから、お前さんなんぞに心配を掛ける位なら、私は生家へ歸つて居るけれども、何しても受けて下さらないです。併し、貴女の御傳言は能く申しませう。』

『何卒ねえ。私も一度行つて、阿母さんに逢つて見たいんですけれども。』

お綾は又急に悲しくなつて、袖に顔を當た時、奥からお友の聲が近付くのである。お綾は覺えず立上つて、廊下へ身を避けた。

(七)

『姉さんが見えなくつてよ。姉さん、姉さん。』

お友は姉のお綾を探しながら、松田老人の室を差覗いて『姉さんは来なくつて。』

『いえ、お綾さまは御入來になりません。』

『左様。何處なんだらう。姉さん、姉さん。』と、お友は玄關へ來ると、開擴げた唐紙の間から應接所に三之助の姿が見える。

『三さん、お一人。』と、お友は應接所を差覗いて、『姉さんを知らなくつて。』

『お綾さんですか。』と、三之助はお綾が此處に居た事を隠す積であつたが、不圖お綾が忘れて置いた手巾が椅子の傍に落ちて居たのを見付けたので、心に驚きながらも、『お綾さんは唯今迄此處にお居てゐたが、』

『えッ、姉さんが唯今まで、』と、お友は嫉妬に堪へない様で、つかつかと三之助に近附き、『三さんと姉さんと話して居て。』と、嘲ける様な眼付で昵と三之助を見た。

『話して居たと云つて、別に此と云ふ談話も爲なかつたんですが、』と、三之助は話頭を他に轉さうと

思ふので、『試験は何日から始まるんですか。』

『試験なんか何でも可いわ。何せ能くは出来ないんだから。』とお友は其様事は何でも可いと云ふ風だ。

『算術は如何ですかね。貴女がお暇の時に、一時間位なら見て上げて可いんですが。』

『いゝえ、もう能くつてよ。何せ私は出来ないんだから。』とお友は態と横を向いた途端に、測らずもお綾の手巾を認めて、『おや、姉さんの手巾が。』と、手に取上げて廣げて見た。

桃色の絹手巾の端に、こぼれ松葉を我手に縫つたらしいのであるが、處々に墨を殘して、指頭で觸れると、水に濡ほされて居た。

『おやッ、濡れて、よ。』とお友は三之助の顔を意味ありさうに見て、『姉さんは泣いてお居てだッたのね。』

『えッ、泣いて——お綾さんがですか。』

『え、左様よ。御覧なさい、此様に濡れてるんだもの。』とお友は不愉快らしく手巾を見て居たが、聽て三之助を見返ると共に笑を含んで、『お楽しみだわね。』

三之助は身柱寒い様に覺えて、『お友さん、樂とは何の事ですか。』

『おほほ。』とお友は可笑さうに且つ嘲ける様に笑つて、『姉さんと何を話して居て。』

『談話と云つて。』と、三之助は顔に怒氣を含んで、『お友さん、貴女は何か、私とお綾さんと何か都合な談話でも爲て居たと云ふんですか。』

『三さん、發怒ッて。』とお友は三之助の間には答えず、却つて問返した。

『いや、怒るも怒らないも無いんですが……お綾さんと此處で話して居たッて、別に不思議は無からうと思ふんです。貴女と斯して話して居ると丁度同一ぢやありませんか。それなのに、お楽しみだなど、お云ひなさると、私とお綾さんと不都合な關係でもある様に聞こえて、非常に迷惑です。お綾さんの手巾が濡れてるか濡れて居ないか、私の知つた事では無いんですからね。』

お友は三之助の語調が漸次高くなると共に、如何したのであるか、顔に悲しげな色を浮べて、『三さん、私が悪かつたからね、勘忍して頂戴よ。』

『なに、貴女が謝罪するには及びませむ。私はお友さんにしてもお綾さんにしても、同じ従兄妹だと思つて、些しも區別は爲て居ない積です。』

『私が悪かつたからね。』とお友は三之助の怒を和め様としながら、尙ほ彼手巾を打返し見て、『何して此様に濡れてるんだらう。後で姉さんに返さうや。』と袖に入れて了つた。

折から侍女のお大が大塚が辭去る由を松田へ報じた。三之助は之を機にお友を殘して、松田の室へ行つて了つた。

(八)

八十島が後妻のお龍と云ふは、年輩卅五六、以前柳橋の花と唄はれ、全盛を極めた餘波は、今尙ほ年を五六若く見せる程で、細面の凛とした眼付——お家騒動面だと或者が評した事があると云ふのも、

其眼の凄く透清しいのに依るので、鼻の格向、口元の締、姿のすらりとした、肉の付鹽梅まで、殆んど非を打つ點が無いほどである。

此二三日頭痛がするとかて、髪を櫛巻になし、額頭に頭痛膏を張り、大島の龜甲製の書生羽織を着、長火鉢の傍にて新聞紙の三面記事を読んで居ると、お辨も定等の侍女は所在なげに其傍に侍して居た。

お龍は新聞紙にも飽いたと云ふ體で投出して、煙草を一二服喫んだ後で、『まだ誰かお客があるんか』
So』

お辨と云ふお龍が氣に入りの侍女『へい、まだ御一人居らっしゃいます。』
『左様かい。お話があるんだのに、早く辭去つて呉れ、ば可いね。お綾さんは今朝から一度も、此處にも入でぢやない様だね。』

『左様で御在りますよ。』
お辨が斯う答ふる傍からお定が、『先刻鳥渡入らっしゃった様でしたけども、御新造さまがお新聞紙を読んで居らっしゃいましたから、又彼方へ行らっしゃった様でした。』

『左様かい。私が新聞紙を読んで居たから……新聞紙が欲しかつたんだらうよ。又可厭顔を見せられるのも氣が利かないから、其を持つて行つて遣つてお呉れ。大きに遅なりましたって云ふんだよ。』
お定は新聞紙を持ってお綾の室へと立つて行つた。

『お友さんは何お爲だい。』
『お友さまですか。唯今迄此室に居らっしゃいましたッけ。鳥渡見て参りませう。』

立上らうとするお辨を押へて、『なに、呼んで来なくつても可いんだよ、別に用は無いんだから。』
『左様で御在りますか。』と、お辨は又坐つたが、お龍の様子に些も眼を放さず、『御頭痛は些は御寛く居らっしゃいますか。』

『左様さね。』と、お龍は天井を仰視るほど仰向いて、眼を睡りながら頭を振つて見て、『まだぐらぐらするんだよ。』
『不可せんねえ。お薬でも召上りましな。』

『つい、おつくうだものだから……。』と、指頭で額頭を押へながら、『お辨や……。』と、目顔で傍に進ませて、『お前あもう、彼後木挽町の様子を聞きさちやないか』
So』

『へい、別段に……。』と、お辨は斯う云ひながら、一人膝を進めて小聲に成り、『此頃ではお綾さまから手紙もお上げなさらぬ様で御在りますよ。』
『全くかね。』と、お龍は尙ほ疑はしげに、『三さんと同謀に成つて居るんだから、如何して手紙の往復を爲て居るか知れやしない。お前が餘程氣を付けて居てお呉れでなくつちやア、不可いよ。』

『左様で御在りますとも。ですからね、私は夜中だつても碌々眠らない位にして、氣を付けて居るんで御在りますよ。』
お龍は首肯して、『左様かい。其位にして居てお呉れだ……。』

室の外に足音が爲たので、お龍が語を斷ると、お大が煙草盆を持つて入つて来た。
『お大や、もうお客さまは御歸りだつたかい。』

『はい、御歸んなさいました。』と、お大は煙草盆を其處に置いて、『お辨さん、鳥渡お掃除をして、藏ツて下さいますよ。』と、又奥へ行かうとした。

『お大、私が行くから、お前は此室に居るが可いよ。』

お龍はお大が平生氣に喰はぬので、鳥渡口を利くにも語に刺を持ち、而も睨付ける様にして、奥へ行ツて了つた。

(九)

八十島大助は年五十に近く、容貌魁偉とも評すべく、鼻高く眼太く、眼光炯々として、侵す可からざる威殿がある。

茶萬筋の糸織の小袖に、本場八丈の書生羽織を着、八角の桐洞の大手爐を前に控へて、何故か深く思案に暮れて居る。大助が風托頭を爲て居るのを、お龍でさへ未だ曾て見た事が無い位であるのに、今日は何したのであるか、あり／＼見ゆる迄其顔色が悪い。

お龍は椽側傳に座敷へ来て、鳥渡敷居に片手を支き、『入つても能御在ますか。』

大助は煩擾さうに顔を上げて、『何か用かい。急ぐ事でないなら、明日の事に爲て貰はう。』

『急ぐと云ふのもありませんが、鳥渡で可んですから。』と、お龍はもう手爐の向に坐を占めた。

大助は尙何か考へて居る様で、『用と云ふのは。』

『外でもありませんがね。』と、お龍は手爐の中を用もなきに覗き見ながら、『土岐さんから御話があつた筈ですがね。』

『土岐から。』と、大助は思得ない様で、『土岐とは先刻も話を爲たが、別段お前の方に關係を有つて居る様な話は無かつた。』

『左様ですか。可笑う御座んすわねえ。』と、お龍は何故か溜息を吐いた。

大助は早くもお龍の溜息を見咎めて、『何したのか、溜息なぞ吐いて。』

『なアにね、溜息を吐いたと云ふのでは無いんですがね。』と、大助の顔を熟く見て迷惑さうに、『三さんの事に付いて、土岐さんから話がありましたからね、所天に御相談なすつて下さいます。昨日頼んで置いたんですよ。』

『なに昨日。』と、大助は不思議さうに、『お前は昨日土岐に逢つたのかい——乃公の留守にても、土岐が来たのかい。』

『あッ、左様でした、昨日では無かつたんですよ。おほ。』と、お龍は心中周章な様であつたが、巧みに笑に紛らし、『左様く、一昨日でしたッけね、所天が宅に御在てなすつた時——ほら夕方でしたね、土岐さんが御入てなすつたのは。』

『左様だつたな。』と、小首を捻りながら、『それは先ア何でも可いが、三之助の事に就いて、土岐がお前に何か話したのか。』

『え、左様なんです。土岐さんは全く親切に云つて下さるんですから、』

『何をかね。』

た筈ですがね。』

『土岐から。』と、大助は思得ない様で、『土岐とは先刻も話を爲たが、別段お前の方に關係を有つて居る様な話は無かつた。』

『左様ですか。可笑う御座んすわねえ。』と、お龍は何故か溜息を吐いた。

大助は早くもお龍の溜息を見咎めて、『何したのか、溜息なぞ吐いて。』

『なアにね、溜息を吐いたと云ふのでは無いんですがね。』と、大助の顔を熟く見て迷惑さうに、『三さんの事に付いて、土岐さんから話がありましたからね、所天に御相談なすつて下さいます。昨日頼んで置いたんですよ。』

『なに昨日。』と、大助は不思議さうに、『お前は昨日土岐に逢つたのかい——乃公の留守にても、土岐が来たのかい。』

『あッ、左様でした、昨日では無かつたんですよ。おほ。』と、お龍は心中周章な様であつたが、巧みに笑に紛らし、『左様く、一昨日でしたッけね、所天が宅に御在てなすつた時——ほら夕方でしたね、土岐さんが御入てなすつたのは。』

『左様だつたな。』と、小首を捻りながら、『それは先ア何でも可いが、三之助の事に就いて、土岐がお前に何か話したのか。』

『え、左様なんです。土岐さんは全く親切に云つて下さるんですから、』

『何をかね。』

『三之助さんも八杉さんの御子息なのに、今の様にして何時迄置いたつても、』
 『土岐が其様事をお前に云つたのか。』と、大助は大分機嫌を損じた様で、『其から何と云つた。』
 『所天、お怒んなすツちやア困りますよ。土岐さんは全く親切からなんてすよ。』と、お龍は大助が機嫌を損じたので、場合が悪いと思ひながらも、『三さんに適當な口があるが、何うてせうかと云つて下さいましたからね、私に御話し下さるよりか、所天に御相談なすつて下さいって云つて置いたんですから……。』

『左様か。よし、解つた。三之助は乃公に所思があつて、如彼して置くのだ。土岐が今度来た時、お前から確と断つて了ひなさい。』と、大助は斯う云つて、お龍に對合つて居るのも煩擾げに見えた。

『断るんですか。』と、お龍は不平に勝へないらし。』

『うむ、断れば可いのだ。私は今他に考へて居る事があるから。』

『ですけども、土岐さんが切角御親切に。』

『土岐が親切に云ふのだから……それで何しろと云ふのか。』と、大助は大の眼を開いて屹度お龍を睨んで、『乃公が断れと云つたら、其通にすれば可いのだ。』

『あ、左様ですか。』と、お龍は立上りながら、『三之助さんはお須賀さんの身内ですからね……悪い事を申して、御氣の毒さまでしたわね。』

『待てッ。何を云ふのか。』

大助は立去らうとするお龍を、語調鋭く呼止めた。

お龍は大助に呼止められたけれども、尚ほ剛情に立去らうとした。

『こらッ、待たんかッ。』と、大助は激怒した様で、『何故待たんのか。』

お龍は不承不承に元の座に復へつて、

『何か御用なんですか。』

『うむ、用がある。お前は今何と云つたか、もう一度繰返して見い。』

お龍は返辭をせぬ。

『何故黙つて居るのか。』と、大助は屹度お龍を見て、『お須賀の身内だからと云ふ事を、お前は矢張云はなければならぬのか。』

『だッて、左様ですもの。』

『それを今更云ふには及ばぬ筈だ。其事に就いては、是迄幾度も云つて聞かせてある。既に一度などは——真逆に忘れはしまし——お前を別離さうと迄成つた事もあるではないか。其時にも云つて聞かせて置いた——三之助の親父には容易ならぬ恩を受けて居るから、身に替へても世話を爲なければならぬと、彼程云聞かせて置いてある。それなのに動もすると、外へ出したがる様な事を、』

お龍は態とか知らぬが、泣聲に成つて、『私が何時其様事を——三さんを外へ遣りたがる様な事を、』

『いや、左様とは云はんでも、左様云ふのと同じ事だ。』

「能御座んす、それなら其て。」と、お龍は顔に袖を當て態とらしく身を傾はせながら、「何せ三さんや、お綾さんに追出されて了ふんだらう。」

「こらッ、何を云ふのか。餘な事を云ふ。」

「だッて、其に違ないんですもの。」と、お龍が屹度大助を見た眼には、涙が見えぬても無かつた。

「三さんとお綾さんと同謀に成つて、お須賀さんと手紙の往復を爲て居るんですからね。どうせ私は追出されるんぞ。」

「なに、お須賀と手紙の往復を爲て居る。」と、大助は稍躊躇ひながら、「それは實際かな。」

「虚構だと思ひなされるなら、お綾さんなり三さんなりへ聞いて御覽なされるが可い。」

「其ほどに云ふのなら、實際かも知れぬが、お綾がお須賀へ送つた手紙を、お前が見てもしたのか。」

「私は其様酷い事なんかしませんよ。人の手紙を見たりなんか爲やアしませんよ。見様と思やア、何時でも見られたんだけど、其様罪な事を爲ては可哀想だともッて、故意大目に見て置く位にしてるんですよ。」

「お前に其程の好意があるならば、何故私へ穩かに話を爲て呉れぬのだ。お須賀へ手紙を送る様な事をするのは、お綾が重々悪い。又三之助が手紙の取次を爲て居る様なら、此とても重々不埒だ。何とでも小言の云ひ様がある。今後其様な事をさせない程の究命の證方もあるてはないか。」

お龍は是迄には言出したもの、お綾がお須賀へ贈つた手紙の證據を握つて居ると云ふのでないから、大助の様子が和らいだのを機に、此儘に爲て了つた方が、自分の爲にもと思つたので、態と氣の毒

さうな語調で、

「所天が其様に云つて下さるんなら、私だッて此様事を云ひたくは無いですから、所天も何にも云はないで置いて下さる方が能う御座んす。それはね、お須賀さんと手紙の往復なんぞ爲てお居てだと聞きますとね、快い心地も爲ませんからね、つい今の様な事を云つたんですけども、今度までは所天が御存知でない事に爲て下さいましな。」

「併し、此儘に爲て置くと云ふ譯にも。」

「私が困りますからさ。今度までは御存知でない積にね、後生ですから。」

大助は首肯して、「お前が左様云ふなら、お前に委せて置かう。併し、三之助の事に就ては土岐に確と謝絶つて呉れる様に、よいかな。」

「土岐さんには氣の毒ですけれど……。」

松田執事がひよつくり其處へ出て来て、次の室の敷居際に兩手を支いて、「御傳の御仕度が出来まして御座す。」

「よし、よし。」

大助は直に俵を急がせて出て了つた。

(十一)

お綾は三之助が今日午後、木挽町三丁目の裏屋に實の母お須賀を訪ねて呉れる筈なので、せめては

手紙でなりとも懐愛しの意中を知らしめたいと、我室と定められた二階の隅の四疊半に籠つて、室外へ心を配りながら、考へ／＼巻紙に筆を辿らして居た。

『いくら書いたつても、思ふ様に書けないは。』と、口の中で斯う云つて、今又書損なつた半切を引裂て丸めて袂に入れて、今度は何書いたものかと思案に暮れて居た。

『書きたい事が餘り多いものだから、どれから書かうかと思つて。』と、頻りに筆を紙りながら、『此方の事を書いて上げたら、餘計に心配をなさるだらうから、何にも書かない事に爲様よ。其方が可い、其方が可い。』

すら／＼と五六行書いた時、不圖足音が聞こえた。

『あらッ、誰か来てよ。』

斯う云ふのも口の中、周章で巻紙を机の抽匣に押込み、視箱にも蓋をなし、素知らぬ顔に居住居を直した時、静かに唐紙を開けた者がある。

お綾は見返る間も胸を離かしながら『あやッ、お大……お前なら可いけども……何が用があつて。』

『いゝえ、左様ではありませんけれども。』と、お大はお綾の前に坐つて、其顔を熟く眺めながら小聲になり、『何を書して居らしたつて。』

『えッ。』と、お綾は顔色を變へ、『何にも書いて居やしなくつてよ。』

お大は微笑を含みながら、『私にはお隠しなさらないでも能う御座ますは。』と、われと我唇を指しながら、『お墨が眞黒に着いて居ますよ。』

『えッ』と、お綾は吃驚して唇頭を拭かうと思つたけれども、懐中に紙はなし、袂も、机の抽匣も、開けも探りもならず、『手巾を何所へ置いたらう。』と、空して机の周囲を探るのであつた。

お大は軽く笑つて、『ほ、ほ。お綾さま、此で御拭き遊ばせ。』と、自分の手巾を出して遣つて、『まだ卸したばかりですから、穢い事はありませんよ。』

『いゝえ、何かあつてよ。』と、お綾は手篋の抽匣を開けにとて立つた途端に、袂から反故が溢れ落ちた。

お大は早くも反故を拾つて、『お綾さま、此が能う御座んすよ。』

お綾は振り返つて、其と見るより顔を紅の様になし、『まア何したら可いだらう。』

『大きな聲を遊ばしては不可せんよ。』と、お大は反故をお綾に渡して、『其でお拭き遊ばしてね、後は小さく裂いてお了ひなさるが能う御座ます。』

『難有うよ。』と、お綾はお大が教の儘にして居る。

お大はお綾の様子が可哀相で、覺えず涙含んだが、『もう知れやしませんよ。さうですよ、左様裂いてお了ひなさる方が能う御座ます。お綾さま、迂闊お手紙なんぞお書き遊ばさうものなら、大變な事に成りますよ。今ね、實は旦那様と御新造さまとお座敷で、自分が偷聽して知り得た主人夫婦の争論を語聞かせて、『左様なんですから、餘程氣をお付け遊ばさないと、飛ても無い事に成りますよ。』

『左様。難有う。能く教へてお呉れたたね。いづれ御禮をするよ。』

『お禮なんぞ爲て戴かないだつて、私が申上げた事を聞いて下さるだけで澤山御座ますよ。貴女の

御手巾も、お友さまが應接所に落ちて居たと仰有つてね、
 「キッ、お友さんが私の手巾を。」とお綾は面目なげに垂頭いた。
 「なアに、能う御在まさらね、私が私と取返して上げますよ。」
 『左様してお呉れかい。』
 折から階下から頻りにお大を呼ぶ聲が聞えた。

(十二)

お大は階下から呼ばれて、高く返辭をなし置き、「本統に御氣をお付け遊ばせよ。三之助様の外には、
 貴女の落度を探してる者はかしてすから……せわしない事ねえ。」と、急いで下りて行つて了つた。
 お綾はお大が下りて行つた後で、ほつと息を吐き、「本統にお大のお云ひの通だよ。三さんも手紙は
 書かない方が可い、反故を拾はれても大變だからとお云ひだつたのに……今のがお大だつたから可い
 けども……。」と、急がしく机の抽匣から書掛けの手紙を取出し、其も寸々に引裂いて——字形の辨ら
 ぬ迄細々と裂きに裂いて了つたので、僅かに顔の色も安らかに成つた。
 『本統に危なかつたは。もう……此に懲りて、滅多に手紙なんぞ書きはしないは。三さんが口上で能
 く云つて下さるだらうし……また後で能く頼んで置からう。』
 お綾は今引裂いた反故の捨場を探す爲と、三之助に尙ほ頼んで置きたさとして、徐かに段梯子を下り
 た。

お大より外に手紙を書いた事を知つて居る者は無いと思ひながら、梯子を下りた時、はたとお辨に
 出合つて、はつと思つたが、おれながら気が弱いと思返し、中の便所の方へ行かうとすると、茶の間
 でお龍が何か罵つて居る聲が聞こえた。
 『誰が叱られて居るか知ら、氣の毒だは。』曾の中に斯う思ひながら廊下へ出ると、丁度三之助が便所
 から出て来た。
 三之助もお綾を叱度見たが物を云はず、素知らぬ顔で行過ぎ様とするのを、お綾は端なく摺寄つて、
 『手紙は止してよ。宜敷くね。』
 三之助は僅かに首肯して行過ぎて了つた。
 誰も見た者もあるまいと思つたのはお綾の不覺で、お友が早くもちらと認めて、お綾が便所に入る
 後姿を、可怖しい顔を爲て睨んで居た。
 お綾は斯くとは知らぬので、便所を出て二階へ行かうと、茶の間の側の廊下を通掛ると、『姉さんぢ
 やなくつて。』と呼掛けたのはお友である。
 『え、左様よ。』と、お綾は立止まつた。
 『姉さん、好い物上げてよ、此處へ入ッしやう。』
 『左様ですか。好い物つて。』とお綾は詮方が無さに、茶の間に入ると、火鉢の傍にはお龍とお友が
 向合つて坐つて、お大とお辨が紫檀の蓑盆花臺等に澤拭巾を掛けて居た。
 お龍はお綾が入つて来たのを見るより、『お綾さん、久瀬だはね。』

お綾は何と云つたものと、疾には返辭が出て、お龍は重ね掛けて『宅にお在てだつたの。』

『え、何處へも参りは致しません。』

『私は又、何處かへ遊にてもお行てかと思つて居たよ。宅に在るのなら、一度位此室へお入ても可さうなものだね。』

『先刻鳥渡参つたんですけども。』と云ひ掛けたが、寧ろ詫びた方がと思つたのか、『これから氣を付けますから、何卒堪忍なすつて下さいまし。』

『おほほ、』と、お龍は態と高笑を爲し、『誰も謝罪れと云つて居やしませんよ。お綾さん、温順しうな顔を爲て居る癖に、今の様な事を云つては、妾をお困らせなんだね。』

お綾は思ひも付かぬお龍が語に、一入口が利けなくなつた。

お大はお綾に氣の毒さに、覺えず拭巾の手を止めてお龍の顔を見て居る。

お友は態と罪の無い調子で、『姉さんは何なのよ、三さんが好きだから、應接所に二時間も入つて……さうだはねえ姉さん。ほ、ほ、』と戯言にも聞こえる様に笑ふのである。

お綾は顔から火の出る様を思て、つと立つて茶の間を出やうとした。

(十三)

『お綾さん、鳥渡お待ち。』と、お龍は茶の間を出て行かうとするお綾を、早くも呼止めて、『私の方に

尙た用がありますよ。』

『どうですか。』と、お綾は詮方が無さに又坐つて、『阿母さん、何の御用で御在ます。』

『其様にお急でなくつても可いではないかね。ほ、ほ。』と、お龍は軽く笑つて、『お前さんの様に左様情が無くつても、本統に困りますよ。名ばかりでも親子に成つて居るんだもの——私の方では其積で居るけども——人情つてえものが無さやア、とても同住に居られるものには無いんだよ。お前さんの方で、親にしてお呉れて無くつては、私の方でも事が仕悪からうてはないかね。其處になるとお友さんは本統に感心さ、私の様な者でも、阿母さんくつて慕つてお呉れだから、私の方でも眞實の親子の情愛が出て、他所の人が見ても、お友さんだけは私の眞實の子だなんて云つて呉れる人があるんだよ。それなのに、お前さんばかしては、成だけ一處に居ない様に——と、私を外す様にして居てだから、自然と情愛も出なくなるんだよ。私には左様としさやア思へないんだもの。』

お綾はお龍の云ふ處を道理とばかりは思はないけれども、二人の間の折合に、其様節が無いでも無いから、自分が悪かつた様な氣もして、聲に潤を有ちながら、『私が悪う御在ました。今後氣を付けますから、何卒堪忍して下さいまし。』

お龍もお綾が斯う素直に出たので、流石に氣の毒とても思つたのか、莞爾笑を含んで、『お前さんが其様に素直に聞いてお呉れだと、私も實に嬉しいよ。さア、もつと此方へ寄つて、火鉢にお當りなさい。』

『はい、難有う御在ます。』と、お綾は火鉢の傍には寄つたが、もじくと沈着いて居られない様な氣がして居る。

拭巾の手を止めて居たお大も、ほつと思を吐いて急がしうに拭初じめた。
お龍お綾お友の三人は、少時無言で、お大とお辨とが花臺を拭く拭巾のきしむ音が聞こえるばかりであつた。

お友は思出した様に、『あゝ左様、私は姉さんへ上げる物があつてよ。』

『え、私に下さる物ッて。』と、お綾は心得ぬ味でお友の顔を見た。

お友は調戲う様な笑を含んで、『姉さん、中て、御覽なす。』

『え、中るんですッて。』と、お綾は鳥渡首を傾げたが、『私には分らなくッてよ。』

『おほほ、』と、お友は唯笑つて居る。

お龍は二女の顔を見比べながら、『お友さん、何なのかい。餘程面白うな物だね。』

『おほほ、』と、お友は又笑つて、『姉さん何か無くなつた物は無くッて。』

『えッ。』と、お綾は又小首を傾げたが、不圖思得たものがある。それと共に顔が眞紅に成つた。

『姉さん、分つて。』

『もしか、私の手巾では無くッて。』

『左様なの。私が應接所に行つたらね、三さんが姉さんの手巾を大事さうに持つて居てゐたから、貰つて置いて上げてよ。』と、お友は袂からお綾が應接所に置忘れた手巾を出して見せた。

『お綾さんの手巾を三さんがかす。』と、お龍はお綾の顔を屹度見て、『三さんに手巾を御遣りだつたのか。』

『いゝえ、其様事はありませんよ。』
『だつてお前さん、三さんがお前さんの手巾を大切さうに……』と、お龍はお友の顔を見ながら、『全く三さんが。』

『全くなのよ、阿母さん。それでね、ぐッしより濡れてたんですよ。私は涙ぢやないかと思つてよ。』

『えッ、涙でぐッしより濡れてたッて。』と、お龍の顔は見る／＼険しくなつた。

(十四)

お龍の顔が険しくなつたので、お綾は何なる事かと、羞かしさと怖ろしさとに夢心地である。今度はお大ばかりでなく、お辨も拭巾の手を止めて、成行如何にと見成つた。

『お綾さん、お前さんは三さんと何を話お爲なのかい。』と、お龍は語調鋭く、『手巾が濡れる迄お泣きなんだね。何が其様に悲しくッて、三さんなんぞ……何を話したッたか、さア其をお云ひなさい。さアお云ひ。何故黙つても居てなのかい。さアお云ひでないか。さア、さア、早く云ふが可いぢやなすか。』

お龍が疊掛けて迫り問ふても、お綾は何とも答へないで、垂頭いた眼には涙が溢れんばかりである。お友は態と氣の毒さうに、『阿母さん、私が悪かつたんだから、堪忍して下さいな。私が姉さんに内證で返せば可かつたんだのに。』と、お綾へ向つても、『姉さん、堪忍して頂戴よ。此様事には成らないと思つたから、つい申戯に、今の様な事を云つたんですからね、悪く思はないで堪忍して頂戴よ。』

『お友さん、お前さんが悪い事は些しもないんだよ。黙つてお居てなさい。』

『だつて、私がつい此處で手巾を出したから。』
『お前さんが手巾を出したのは、悪いのではありません。』と、お龍はお綾の方へ向は膝を進めて、『三さんと何を話して居てだつたか、さア其をお云ひなさい。』三さんに泣いて話した事ツてのは、私の事だらうね……いゝえ、左様ですとも。私の事を、三さんと二人で散々腹悪口を云つて、お須賀さんの事を思出して泣きたんだらう。いゝえ、左様ですとも。左様でなくつてお前、手巾がビッシヨリ濡れる程お泣きの事がありますかえ。私にも考案があるんだから、左様なら左様と判明云つてお呉れが可いよ。阿父さんがお歸宅なすつたら、御話を爲て、お須賀さんが歸つてお入りの様に爲て上げ様さ。其ならお前さんにも云分はあるまひから、いまに阿父さんが御歸んなさつたら。』

『阿母さん、其様事を。』と、お綾は胸も裂けんばかりの苦痛を忍びながら、『其様事なんぞを、私が三さんに……いゝえ、全くですもの。其様事なんぞ云ひは致しません。お友さんが手巾が濡れたとお云ひですけども、私は濡れて居たか居なかつたか、自分では些とも覺が無いんですよ。阿母さんのお氣に觸つたら、何様にでも謝罪りますから、何卒堪忍して下さいまし。』

『何だつても云ひなのかい。手巾が濡れて居たか濡れて居なかつたか知らない……ぢやア何だね、お友さんの云掛——お前さんを悪く思はせ様と思つて、お友さんが好加減な事を云つたんだと、斯うお云ひなんだね。』

『あら阿母さん、私は云掛なんぞを……。』

お友が辨解らしく口を出したのを、お龍は押へて、『お前さんは何にもお云ひてない、私が知つてゐるからね、何にも云はないで私に委せてお置き。お綾さん、さア何なんだよ。』

お大は耐へ切れなくなつて、『御新造さま、私が存知て居るんですがね、お綾さまは三さまと何にもお話を爲て居ッしやツたんぢやありません。あのう斯うなんて御在ます。私とお綾さまと應接所て——彼處は日當が能う御在んすから、お綾さまとお二人で話して居た處へ、三さんが居らッしやいましたから、お綾さまと私は此方へ參つたんで御在ますよ。全く左様なんて御在ますよ。』

『お大は本統に虚言家だわ。』

お友が斯う云ひながら、屹度睨んだのを、お大は態と素知らぬ顔を爲し『全く左様なんてですから、もし虚構だと思召すなら、三さまを御呼び申して参りますから、お聞遊ばすが能う御在ます。』

お大が立つて行かうとするのを、お龍は早くも呼留めた時、松田老人が玄關で『お歸りッ。』と、高く叫んだのが聞こえた。それツと云ふので、何れも亂れ立つて出迎へた。

(十五)

木挽町二丁目の或露路の中で、三軒立の最も奥の長屋に唯一人の婦ぐらし。年輩は四十に近く、若い時も左程の美人と云はるゝ程ではなかつたかも知れぬが、人品勝れて斯る裏屋住居をなす人柄とは見えぬのである。最初の中こそ近所でも不審の一つにして、あらゆる名さへ立てた者もあつたが、つい近所の築地に聞こえたる豪商、八十島大助が前の妻のお須賀、生家は浪花町八杉甚藏と云ふ事さへ知れ、

八十島を離別になつたのは、お龍と呼ぶ妾が乗込む爲めの奸計に中られた事、娘のお綾は其儘八十島に留まり、依然相續人たる事までも知れ渡つたので、相長屋の誰彼も見貶さずして、朝夕懇ろに訪れて呉れる者さへある様になつた。斯うして此に二年の星霜を送つて居るのは、何の待つ所があるのか、彼様子を見、彼意の中を察したら何様であらうかと、中には同情の涙を落す者もあると云ふ事である。

お須賀は八十島を離別された時は云ふ迄もなく其後も幾度となく、生家から歸り来る様にとの迎を受けなければ、今日までも剛情を張り通して、木挽町の裏屋に幽かに月日を送つて居るので、生家から月々の仕送を強て拒むても無いが、出来るだけの粗衣粗食に、色褪せ骨立ち、娘のお綾が見たなら、ありし世の母とは見違へるかも知れぬ程である。

お須賀は今朝生家から送つて呉れた鶏卵に乾海苔を、相長屋の誰彼に挿分を爲し、喜ばるゝのを喜んで、今しも上櫃を上らうとした時、「叔母さん御無沙汰を致しました。」と、聲を掛けながら入つて来たのは、八杉三之助である。

「おや、三さん御出でなさい。」と、お須賀は懐愛さに覺えず聲も高まり、「さア上つて下さい。此頃久瀨お見えなさらぬから、何お爲かと思つてね、心配も爲たり、待ちもしたりして居たのに、今日は能くまア来て下さつたね。」

三之助は火鉢の傍に坐つて、「此様に御無沙汰を致す等ではありませんでしたが、つい延引に成つて、誠に申譯がありません。」

「なにね、無沙汰を爲たの、申譯が無いのツて、其様事は何でも可いんですがね、と、お須賀は温茶

を注いで出しながら、「何様様子か聞きたいものだから……おほい。三さんこそ好い御迷惑なのね。」

「い、え、其様事はありません。お綾さんから宜敷ツて傳言がありました。」

「左様でしたかい。」と、お須賀はお綾の名を聞いたばかりでも、もう涙合れて、「それではお綾も、別に變つた事ありませんかえ。」

「はい、病氣らしい事ありませんから、御安心なさるが能う御座います。尤も、今日も手紙を上げたいツて、お綾さんは云てでしたが、實は私が止めたのでした。御存知の通ですから、何かしてお龍や、お友さんに見られてもすると、又大騒に成りますから、私から御傳言を致しませう、と無理に御止め申したんですからね、何卒悪からず思つて下さる。」

お須賀は頻りに首肯して、「三さん、能く止めて下さつてね。お綾が手紙でもよこしたいと思ふのも、私がお他所ながらも顔を見たいと思ふのも、其意中は同一ですがね、其爲に彼兒が難儀をお仕の様では、却つて可哀想だから、止めて下さつた方が、本統に好かつたんですよ。それで何ですか、他に變つた事もありますまいね。」

「へい、別に變つた事ありませんが……。」と三之助は覺えず歎息を吐いて、「併し、面白くない事はかりて、私でも變な氣が發りさうに成る事があるんですから、お綾さんの氣に成つたら何様だらうと、其を思つては私は思返して居るんです。お龍が酷く私を邪魔にして、追出しに掛つてるのは、能く解つて居るんですが、私が居なくなつたら、お綾さんが孤發意に成つて、嘸ぞ頼無からうと思ふから、何様事があつても出ないと決心して居るんですよ。」

「お須賀は襦袢の袖で涙を拭きながら、『三さん、誠に難有う。能くまア其様に、お綾の事を思つて下さるはねえ。本統に彼お龍故には……』」
「お神さん、八百屋ですが、今日は如何て御在ます。」
突然聲を掛けたのは、此邊を廻る八百屋であつた。

(十六)

「圖らずも八百屋に談話の腰を折られて、お須賀は人に聞かぬ事もやと、話頭を他に轉して、湯を沸かし茶を入替へなどして後、」

「三さん、お龍なんぞを怨んだ處で、今何爲様と云ふ事は出来ないのだし……唯私の氣掛なのはお綾の事ですからね、此上ともに面倒を見て下さつてね、阿父さんの機嫌を損じないだけに、お前さん庇護つて遣つて下さいよ。」

「え、能御座んすとも、私が出来るだけは、何様にでも力になります。それに彼お大——叔母さんのお居でなさる時から居る彼お大が、それは實に感心にお綾さんの世話を爲て居るんですから、お大とも内々相談しては、お綾さんの爲に善かれと計つて居るんですからね、何卒安心して居て下さい。それに、叔父さんは、他の事は左様も行きますまひが、お綾さんの事に成ると、お龍が何と云つたつて、お龍の云ふ事はかりを通してもなさらない様ですから、安心して御居下さいよ。」
「左様ですか。それでもまだ親子の情愛だけは……。」と、お須賀はほろりと涙を溢した。

三之助も溜息を吐いて、『叔母さん、私も叔父さんの御意中が、お龍の事に成ると、他の事と如何して如彼お違ひなさるかと思つてね、不思議でならないですよ。』

「それはね、浪花町でも左様云つて居るんですよ。なアに、商賣を爲た女は、何かに付けて面白可笑く機嫌を迎るものだから、それで氣に入つて居るんでせうさ。本統に如何して如彼氣にお成んなすつたかと思つてね、私は怨めしいとは思はないけれども、實に情なくつて、口惜いと思ふ事もあるのですよ。」

「御尤です。」と、三之助も慰め兼ねて垂頭して居る。

「三さん、此様事を何時迄云つて居たつても、何にも成らないから、もう止ませうね。」と、お須賀は態と淋しき笑を漏して、『折角三さんが御出でだつたのに、生憎お菓子一ツ無いのだから——何を奢つたら可いだらう。其處迄出れば、何様物でもあるから、颯が好きやア竹葉もつい近所だし。』

「いえ、叔母さん、私は今日は左様は爲て居られませんか。此次まで御預申しませう。」と、三之助は歸仕度を爲るのである。

「何處かへ御廻んなさるの。」

「い、え、今日は叔父さんがお繁忙しい様ですから、自然御用がありやアしまいかと思ひます。』」
「あ、三さん、私は聞いた事があるよ。」とお須賀は何か考出した様である。

「三ッ。」と、三之助は何事とも知らぬだけに一層驚いた様で、『お聞きなすつたつて、何様事を下さるか。』

『三さんの事ぢやないがね。今日浪花町から番頭の善助が来た時、八十島様にはお取込がお在んなさるさうで御在ますと云ったツけが、商賣の方に手達てもあつたんですか。』

『取込がありますッて。』と、三之助は何か思當る事でもあるのか、非常に驚いた様である。

『須賀も三之助の驚ろき方が劇しかつたので、何か能々の事がと思つた様で、八十島さんは非常の御失敗ださうで。會社の方も銀行の方も、御閉店なさりはしまひかと、方々て心配して居りますッて彼善助が云ったツけが、三さん、お前さんは心當はありませんかえ。』

『眞逆に其様事はありますまひが……』と、三之助は獨語の様に、『あの片桐さんが来たのを不思議だと思つて居たのに、大塚と云ふ相場師も来た様だし……叔母さん、其様噂があれば猶更です。些し氣に掛る事もありますから、今日は此でお暇を致します。様子か分れば、直ぐにお知らせ申します。』

『何卒左様して下さいよ。お綾の事も此上ともに頼みますよ。』
三之助はそこへ暇を告げ、急いで八十島へ歸つた。

(十七)

三之助が八十島に歸ると、大助は歸宅して居て、お大に様子を知ると、何云ふものか非常に不機嫌だと云ふのである。それと共に、お綾が應接所に置かれた手巾故に、一方ならず意責められた事を聞いて、何れにしても困つた事だと、歎息するより外はなかつた。

其中に夜に入つた。はや九時近い頃に成つたので、三之助はお大をして大助の様子を窺はしめると、

今は誰も傍に居ず、唯一人座敷に爲す事も無く考へて居られると聞いたので、廳で座敷へ行つて見た。大助は三之助が次の室迄来たのにも氣が付かなかつた様である。三之助は是にも大助が深い思案に沈んで居るのを覺り、徐かに座敷に入つた。

『叔父さん。』
大助は三之助を見返つて、『おッ、誰かと思つたら三之助か。何か用かな。』

『はい、お差向がありませんなら、鳥渡伺ひたい事が御在ます。』

『聞きたい事がある。左様か。』と、大助は手爐を些し前へ押出して、『此處へ来るが可い。』

三之助は大助の云ふ儘に膝を進めたが、何とも云はない考へて居るかの様に見受られた。大助は眉を寄せて、『三之助、お前は今、何か私に聞きたい様な事を云つたが。』

『NS。』とばかり、三之助は熱く大助の顔を見て居る。大助は覺えず笑出して、『は、は、は、。お前は何か爲て居やせんか。何故に私の顔を不思議さうに見て居るのだ。』

三之助は斯う云はれて氣付いて、覺えず垂頭しながら、『叔父さん、何か餘程御心配事がある様に聞きましたか。』

大助の顔色は看々變つて、『三之助、何と云ふのか。私に心配な事がある、其を聞いたと云ふのだな。』

『NS。』

大助は三之助にも聞こえる程の太い溜息を吐いた。

「叔父さん、會社の方も銀行の方も、御閉店なさらなければならぬ様な大失敗を、」

「これッ」と、大助は手を舉げて制して、『も少し静かに……大きき聲をしないで、話しは分る。』

「<S>」と、三之助は低聲に成つて、『叔父さん、實際其様事が……私は眞逆だとは思ひますけれども、萬一其様、』

「お前は何處で其様事を聞いて来た。」

「<S>」とばかりで、お須賀からとは云はれぬので黙つて了つた。

「三之助、何故黙て居る。何故云はぬのか。」と、大助は稍急込んで、『お前が何處で聞いたか。お前が聞いた其場所次第では、私の方でも大いに警戒せんければならぬのだ。これッ、何處で聞いたか。私に云へない事は無い筈だが……は、ア又手はお前の推量だな。』

「<S>」と、何致しまして私が、其様失禮な推量ななどを。」

「其ては聞いた處があるだらう。」

「<S>』

「没分曉ぬ淡ぢやないか。」と、大助は終に怒氣を含んで、『何故判明云はんのか。』

「<S>。鳥渡途中で、』

「なにッ、途中で……世間でもう其様事を。」と大助は色を失なつた。

三之助は大助の吃驚が劇しかったので、思つたよりも大事に成つて居たかと、此も顔の色を失つた。

大助は非常に失望の様子で、『途中で人が話合ふ様になつてば、もう到底防も……ふーむ。』

「叔父さん、叔父さん、途中で聞いたのではありません。」

「途中で聞いたので無いと。うむ、其ては。」

「實は叔母さんから。」

「えッ、お龍から。」と、又も大驚を吃したらしい。

「い、え、木挽町の叔母さんから——お須賀叔母さんから聞きました。」

「なに、お須賀、彼のお須賀から……。」と、大助は餘りの意外さに、眼を睜つて何んとも云得なかつた。

(十八)

三之助は大助の前に兩手を支いて、『叔父さん、實に濟みません。叔父さんに伺つて、其から叔母さんを訪ねれば可かつたんですが、つい無斷ッて行りまして、實に濟まない事を致しました。』

大助は徐かに首肯して、『乃公はお前がお須賀を訪ねたからと云つて、別に叱らうとは思はぬ。お須賀とお前とは従兄妹同志だから、私がお須賀を離別したからと云つて、お前とは親戚の縁が斷れる者ではない。親戚互に訪問するのは當然のことだから、些しも仔細はないのだ。唯公然にして呉れては、今の家内などへの關係もあるし、迷惑せんでも無いから、其邊を注意さへして呉れば、私は別に咎むる積は無<S>』

「<S>』、三之助は涙含んで『併し、叔父さんに無斷で行つたのは、實に濟みませんでした。』

『よし、よし。其は可しとして、お須賀が何して此方の事を知つて居たのか、何も不思議でならぬ。』
『叔母さんは浪花町の善助から聞きなすつたさうです。』
『善助から。ふうむ。』と、大助は考へながら、『八杉では或ひは聞いて居るかも知れぬが、八杉だけなら別に怖るゝ處も無いのだが……。』

『其ては何ですか、會社の方も銀行の方も。』

『馬鹿な事を云ふ、會社や銀行を閉めて濟む位なら、些しも心配する事は不用ぬが、左様爲たく無いと思ふから、先日から非常に心痛して居るのだ。』

『左様でしたか。其様事とは些しも知りませんから……。萬一知つて居た處で、叔父さんのお力に成れる様だと、些しは張合がありますけれども。』と、三之助は悄然として居る。

『いや、今後お前の力を借りる事も出来様から、其時は充分盡力して呉れるが可い。』

『御用に立ますなら、何様事でも厭ひませぬ。』

『うむ、何卒頼むよ。』と、大助は一入小聲に成つて、『お龍などが知ると、又煩擾いから、氣振にも見せない様にな。』

『へい、其は能う御在ますが、會社や銀行に障らない様に、叔父さんはもう御工風がお付きなすつたんで御在ますか。』

『さア其事だて。今頻りに苦心して居るのだがね……。土岐や片桐などでは、充分の力に成らぬから、農商務大臣の松矢さんに會ふ事にしてあるのだが……。』

『松矢さんにお會ひなされば、其始末が付く事に成るのですか。』

『いや、其も確と定められない。其だから種々心配して居るのだが、松矢さんに話込んで、官林の拜借を願ふか、立木の拂下を願ふか、何方か一つ許可になれば、さア何うにか形が付かうと云ふのだが、此から其魂膽に取掛らうと云ふのだ。それには政黨との關係もあり、片桐に其方の周旋を頼み、土岐は大臣と同郷の關係があつて懇意に爲て居ると云ふし、彼是の相談があるものだから、今夜も土岐は來て呉れる約束に成つて居るのだ。』

『左様ですか。何卒好鹽梅に運べば可う御在ますなア。土岐さんと云ふ方は……。』と、三之助は序てあるから、自分の身上に付き、果して大助から土岐に依頼してあるか否やを質して置かうと思つたのであつたが、機會が機會だから自分の事などは、又の時にと口を噤んだ。

『それにな、三之助、頃日に駒込の別荘で園遊會を催はす積だが……。いや、其に就いては何れ話した事もあるが、今夜は種々考へる事が多いから、お前は此で彼方へ行つて貰はうか。』

『へい。叔父さん、餘り御心配なさらない方が可う御在ます。それでは、彼方へ參ります。』
三之助が松田老人の室へ戻つて來た時、玄關に俵を乗込んだのは、彼の土岐頼夫であつた。

(十九)

大助は土岐を連れ入れて、一二雑談の後、話頭は松矢大臣の上に移つた。

『さや、種々御盡方で、大臣も御會合を御承諾下さつたさうで、先刻は能々御使で、御丁寧に難有

う。

大助が土岐に對して、平生に似合はず丁寧な語を使ふのも、一大事を前に控へて居るからであらう。土岐は以前官吏と成つた事があり、中途實業界に入つて、多少人に知らるゝ程に成つたのも、三之助が父の八杉三郎兵衛と八十島大助の引立に依るのであつた。

「いや、御挨拶では恐入りますな。實は何でしたよ、大臣も最初は非常に迷惑がられた様子でしたが、私が種々説込んだで終に承諾を得た様な次第で、存外骨が折れましたすな。は、は。」
大助は喜色を満面に溢らし、「それで如何でせうかな、會合の場所は、何所と云ふ事に御話し下さつたでせうか。」

「それがすな。大臣にも別して其點に注意して呉れる様にと申されたです。又新聞紙などに書かれても困るからと云ふのですから、八十島氏と熟議の上で、改めて申上げませうと、斯う云ふ事にして置きました。」

「大きに御尤で。新聞紙などに掲されては、大臣の御迷惑は申す迄も無い事ですが、私の方でも餘り香ばしからぬので……。」と、大助は思惱みながら、「はて何處に爲たものでせうかな。」

「私には一二考案があるですがな。」と、土岐は小聲に成つて、「コンミッシヨンに就いての相談もせにやならず。それには山林局長の高畑氏も、何れ同席されるてありませう。」

「成程。山林局長も……。」と大助は眉を顰めて、「高畑さんには、土岐さん、貴所が矢張御懇意の筈でしたな。」

「左様、彼男は同窓の學友ですが、私には二三歳も年下でせうかな。まだ無妻でしてな、随分判の早い方なので、は、は、は、。今の官吏は多く左様でアすが、高畑は無論異論はあるまじと思ふのですな。これは明朝、宅の方へ押掛る積にして居ります。」

「いや、其は何も恐れ入ります。」と、大助は掌を敲らして侍女を呼ぶと、お龍が出て來た。

「あやッ、土岐さんでしたか。能く入らっしゃいましたね。」と、お龍は土岐と意味ありげな眼を見合せ、さて大助に向つて、「何か御用でしたか。」

「麥酒か何か持つて來る様にな。」

「は、は。」

「いや、決して御心配下さらぬ様にな。」と、土岐が辭するのを、お龍は見返つて莞爾なし、「時には御寛話なすつたつて可いんでせう。ほ、ほ。土岐さんはウキスキの方がお好しいんでしたッけね。」

大助はお龍が退いた後、「土岐さん、今度の一件は、妻へも聞かせともないですから、何卒其御合に願ひたすのッ。」

「左様、御婦人などは詰らん心配をなさるものだ、其方が可いてがすよ。いや、私しから御耳に入れる様な事は、決して無いですから、御安心下さい。」

お龍はお辨に麥酒の瓶、自分はウキスキの瓶を持ち、お定に下物を運ばせて入つて來た。

「いや、これははや恐入りましたすな。」

土岐が額を撫でるのを見て、お龍は世辭笑を爲ながら、「土岐さんは私見たいなお婆さんのお酌では、

御酒が召上れますまひね。」

『いや、何致して。』

お龍は土岐に酌を爲て遣つて、大助へ對ひ、『所天は麥酒になさいますか。』

『私は失禮だが、鳥渡用を達して來たいから……。』と、大助は便所へでも行くのか坐を立つた。

お龍はお辨とお定に對ひ、『用があつたら呼ぶからね、彼方へ行つても居て。』

二人の女中が茶の間へ下つたのを聞澄して、お龍は土岐の顔を熟と見て、又四邊を見廻した。

(二十)

お龍は四邊を見廻した後、又ウヰスキの瓶を擧げて、『アお酌を致しませう。』と、聲高かに云つたが直ぐに小聲に成つて、『何様工合に運んだんですか。』

土岐も無論小聲で、『未だ西とも東とも見當も付かん位で。併し、悪いと云ふ方でも無いですから、まア知らない風でお居てが可いですがよ。』

『左様ですか。私や其積で居ますけどもね、何時迄も此様鹽梅だと、早晚氣取られる様な事がありやしないかと思つてね、それ。』

『其時は又其時の工風もあるですよ。』と、土岐はお龍に媚ぶるが如き笑を見せて、『大破裂に破裂りやア、貴女を私しの宅へ擔込む迄の話で、些も心配なさる事は無いですが。唯私しが心配するのは、其時に成つたら、貴女が二の足を踏みなさらうで。』

『ふん、巧い事を云ひなさるはねえ。』と、お龍は手を擧げて打ちたさうに爲たが、屹度睨みて、

『其語をお忘れなさらないが能う御座んすよ。土岐さんは本當にお口が巧いんだよ。』

『は、は。』と、覺えず高く笑はうとしたが、『へ、へ、へ。』と、貴女に比べたら、餘り巧い方でもありませんまひね。』

『貴郎の口は憎くいはねえ。』と、お龍が摺寄らうとした時、何か物音が爲たので、はッと離れた。風

か何かの音で、大助は尙だ便所を出ない様子である。

お龍は尙ほも聲を私めて、『此頃に寛々御目に掛つて、種々御相談を願ひたい事があつてよ。それに

彼三之助ね、何かに付けて邪魔に成るんだから、貴郎に願つただけでも、大助が彼男の事に成ると、

私の云ふ事を些も聞入れて呉れないんですよ。他に好工風はありませんかねえ。』

『左様さ、私しの方に引寄せたいと、今朝も鳥渡氣を引いて見たが、中々動きさうにも無いのでな。

けれども、何とか工風が無い事もありますまひ。少し氣を長くお待ちなすつては、如何ですか。今追

拂はないからと申して、非常な妨害に成る事もありますまひ。』

『ですけどもね、お綾とお須賀と手紙の往復をさせて居るのも、彼奴の仕業ですしね、何かに付けて

邪魔なんです。お辨に聞きませうとね、土岐さんと叔母さんの様子がなると、松田と話して居た事が

あると云ふんですから、何だか氣味が悪い様でもありませんね。』

『成ほど、それは打捨て置かれませんか。宜敷い、私しが能く考へて置きます。』

『何卒左様なすつて下さい。大助が出て來た様ですよ。』と、お龍は忽ち高聲に笑出して、『ほ、ほほ

26237
7

「土岐さん、何ですれえ。今ッから不飲いなんで、お酌が御氣に入らないんですか。」
「さ、もう充分です。」と、土岐は入って来た大助を見上げて、「御主人、大いに銘酌を致しました。」
「さ、尙だ何程も喫かんでせう。」と、大助は坐に着いて、「大きに失禮致しました。お龍、何か下物を……これは餘り殺風景では無いか。」

「は、唯今何か。」と、お龍は退した。

大助は麥酒の水壺を杯泉で濯いで、「少し冷たう御座んすかな。」と、土岐に與へて酌を成し遣り、「又手、松矢大臣と會見の一條ですがな。木挽町あたりの待合で、大臣に御差間がない事ならば。」

土岐は少時小首を傾げて居たが、「私の考案では……如何でせうか、秘密にする事は兎角露はれたがるものがすから、寧ろ園遊會でもお開きなさつては。」

大助は覺えず掌を鼓つて、「いや、其は至極ですな。此際ですから、却つて人の視聽を新にする方が、實は私にも其考案があつたので。」と、園遊會は至極妙でせう。」

「その間に、大臣と局長に會合の都合は、何にても成るでがすからな。」

「唯懸念致すのは、大臣が園遊會に御來會下さらうか、其處は如何なものてせうか。」

「其點なら御安心下さい。私しに手段があるてすから、萬事御委任を願ひてがすな。」

「何分君の御盡力を願ひます。」

大助と土岐とは園遊會の打合に、尙ほ時を移して居た。

(廿一)

園遊會を開く事を、八十島一家の者が知つた時に、お龍お友等が喜は一通でなかつた。私は何の店を出して、其時にはお辨に何をさせてなと、二人は其相談に餘念も無かつたが、お綾は如何にも迷惑さうで、當日の前日から私に病氣の積にして、私かにも大に叫びなぞして居た。

愈よ松矢大臣も來會の事に決し、日もいつ何日、駒込の別荘の櫻花も丁度見頃であらうから、其名は觀櫻會と稱する事にしてと、それ／＼招待状さへ發せられたのである。

大助は此觀櫻會を自分の死活問題と思つて居る位であるから、充分の設備を悉してと、外に向つては土岐、片桐、内に向つては妻お龍二人の娘三之助を始めとして、三人の侍女等へも其々命ずる處があり、尙ほ當日は新橋柳橋から大小の藝妓さへ聘する事になり、彼是準備に日も足ない様であつた。

愈よ明日が園遊會の當日と云ふ前夜に成つた。大助は尙ほ一同に心得さす可き事があると云ふので、お龍始め松田老人女中等まで座敷へ呼集めたが、唯お綾一人其席に見えなかつた。

大助は一同を見廻した後眉を蹙めて、「お龍、お綾が見えない様だが、如何したのかな。」

「お綾さんですか。」と、お龍は刺々しい語調で、「何したんですか、先刻から見えない様ですよ。」

「見えない様ですよでは困るではないか。」と、大助は不機嫌で、「お大、お前行つて呼んで來な。」

「はい。あのう何で御在ます。お綾さまは御病氣で居らっしゃいます。」

「なに、お綾は病氣か。」と、大助は額の皺を深うして、「病氣なら病氣と、何故早く云はんのか。お

龍、薬でも飲まして遣つたかな。」

『いえ。だつて、私はお綾さんが病氣だとは知らなかつたんですもの。』

お大は呆れた顔を爲し、『御新造様へも先刻申上げた善で御在ますよ。』

『えッ、何とも云ひかい。』と、お龍は驚いた様で、『好加減な事を云ひでない。何時私にも云ひだつた。』

『あらッ、御新造様は彼様事を。』と、お大は口惜しげにも龍を見上げて、『先刻御茶の間で申上げたら、放擲かして置けつて……。』

『放擲かして置けつて——誰がかい、私がかい、お綾さんの病氣を放擲かして置けつてかい。人間、聞の悪い事を云ひてないよ。それでなくつてさへ、私がお綾さんを邪魔にするとか、憎く居るとか、種々な事を云はれてるぢやないか。其と云ふのも、お前が其様事を云つては、人に吹聴するからだよ。いえ、左様だとも。お綾さんの病氣を放擲かして置けなくて、私が云ひも爲ない事を、旦那の前で能く云つてお呉れだね。あ、此は何だね、お綾さんに頼まれて、旦那の前で其様事を云つて、旦那に私を悪く思はせやうと云ふんだね。左様で無くつてお前、有りもしない事を有る様に——私に怨があらうぢやなし——云へる譯が無ぢやないか。』

『ア、何と云つたら能う御座んせう。御主人さまですから、何せ私の方が敗けますよ……。』

『お大、何も云ふには及ばぬ。一言云へば解る。』と、大助はお龍に對ひ、『病氣なら仕方が無いが、薬の手當をする様に頼むよ。』

『お綾さんの事なら、お大に命けて下さる方が能う御座んすよ。』

『お前は何を云ふのか。』と、大助は屹度お龍を睨めて、『相手は多寡が女中ではないか。お綾はお前の娘ではないか。詰らない事は云はぬ様にして貰はう。何にしてもお綾が病氣と云ふのでは……。』と、深く考へる様で、溜息を吐いた。

(三十一)

大助はお綾が病氣と云ふのでは、と甚く嘆息して居る體なので、お龍とお友とは痛く不快を感じて、互に顔を見合せた。

大助は舌打して、『明日お綾が居て呉れないでは、大いに不都合だが……。』

お龍は耐へず、『お綾さんが病氣だから、明日の園遊會は出来ないッて、お云ひなさるんですか。』

『さ、左様でも無いが……。』

お友も口惜さうに、『私では姉さんの代は出来なくつて。』

大助は莞爾して、『お前に出来ないと云ふ事は無いのだが……お前はな……怒るなよ……お綾ほど沈着いて居ないから、自然粗相でもあると非常な失敗をしなければ成らぬのでな。時もあらうのに、お綾の病氣には困つたな。』

お友は悲しさうな顔を爲して垂頭して了つた。

お龍は一入の不平、『お綾さんが居なさや、お友さんにも私にも勤まらないと云ひなさるんです

か。

『一概に左様とは云はないが、』と、大助は尙ほ躊躇ひながら、『實は松矢大臣の給仕をお綾にさせ様と思つたのだが……。』

『大臣さんの御給仕ですッて。』と、お龍は冷笑ひながら、『松矢さんのお給仕ぐらゐ、何でも無いぢやありませんか。』

『其もお前には出来ようさ。併し、八十島の家内が、唯大臣一人の給仕を爲ると云ふのも、妙し異様にも聞こえ様……。それにお前は萬事の指圖をしなければなるまひ。出す入らずで丁度お綾が可からうと思つたのだが、病氣だと云ふなら、誰彼と定めて置かないで、明日來た藝妓の中から選出す事に爲ても可い。』

お友はついと立つて、座敷を出て行かうとした。

『あゝ、お友、お友。』と、大助は呼止めて、『また外に用がある。』

『だッて、所天が餘り酷い事を云ひなさるからです。』と、お龍は大助を窘めて、『お友さん、いゝから居てなさい。其様眞似を爲るものではありませんよ。』

お友は元の座に復つたが、眼には一杯の涙を持つて居た。

大助は打笑ひながら、『お友、怒つては困るな。お前にも役目があるのだ。お前は山林局長の給仕を爲なければならぬ。高知善也と云ふ人で、四五年前に獨逸から歸朝した中々立派な方だ。何だ、お前は否かな。』

お友は覺えず笑を漏した。

お龍が傍から引取り、『お友さんはお爲ですとも、其位な事は何でもありやアしないは、ねえお友さん。』

『私は口惜いから何様事でも爲てよ。』と、お友はお龍ばかりに聞こえた位の小聲で云つた。

大助は笑ひながら、『お友は異存は無いのだな。それは先づ可し。其から三之助、今度はお前に頼みたいのだが、』

『は。』と、三之助は進み出た。

『お前に頼みと云ふのは、園遊會が済んだ後で、大臣と局長、それに土岐片桐などと云ふ人を加へて更に夜櫻の宴を開かうと思ふのだ。』

『は。』

『其に付いて、お前も知つて居る通、夜櫻を見るには簾を焚く、其簾の掛と云ふものを、お前に依頼したいと思ふのだ。』

『へ。』と云つたが、火焚の役と聞いては、餘り嬉しくも思はぬらし。

お龍は覺えず高く笑出して、『は。は。は。、これは可いね——芝居で云へば仕丁見たいな役ですはね。三さんは男振は好し、何様に能く似合せてせう。』

『詰らない事を云ひなさんな。』と、大助は三之助へ目配を爲ながら、『種々秘密な話を爲なければならぬから、其席の給仕はお綾、庭の方はお前に頼む積で……。』

「さ、承知致しました。」と、三之助は早くも大助の意中を悟つて、快く承諾した。大助も大いに満足の體で、「まづ此で好しと。お龍は云ふ迄も無く、總指圖役だから役不足がないとして、其他の者は昨日命けて置いた通にすれば可いのだ。それでは、一同彼處へ行つて休息する可し。」

一同どや／＼と座を立つて、後には大助とお龍の二人になつたが、お龍も應て茶の間へ退いた。

二十三

お龍が茶の間へ行つて間も無く、大助一人の處へお大が茶を注いで來た。

「お大、明日はお前も御苦勞だの。」

「い、え、私などはお役に立ちませんけども……。」と、大助を見上げた眼には涙を持つて居る。大助は早くもお大の涙を認めて、「お大、お前は種々苦勞を爲て呉れる様だな。」

「えッ。」と、お大ははら／＼と涙を溢した。

「併し、何にも云つて呉れるなよ。お前がお綾を可愛相だと思つて、種々心配して居る事は、乃公が能く知つて居る。お綾が急に病氣と云出したのも、其心持は大概察して居る。一旦の乃公の過失で、お綾にも心配させ、お前などにも苦勞をさせ、他にまだ怨んで居る者もあらう。それも乃公は知つて居る。けれども、今断然處分すると云ふ譯にも行かず、内實は大いに後悔して居る。何卒此上ともお綾の世話を頼んで置くぞ。」

「はい。旦那さまは其ほど能う御存知で居らっしゃるのに……。」

「其だから今も云つて居るては無いか。まあ何にも云はないで、もう些時辛棒して居て呉れ。其に就いてな。」と、大助は一入小聲に成つて、「明日は何かして、お綾に駒込へ行つて貰ひたいのだが……。」實は少し都合があつて、夜の席にはお綾にお前、それに三之助、此三人で給仕萬端の世話をして貰ひたいのだ。お龍にもお友にも、些と聞かせともない事があるのだがな、何だらうか、お前から能くお綾に話して呉れて、明日の朝病氣が治つたと云つて、園遊會に行つて呉れる様に計らつて呉れまいか。」

「はッ。」と、お大は考へながら、「それは出来ない事はありますまいけれども、園遊會で御意責められ遊ばす様な事がありますと、實に御可愛相で御在ます。お綾さまも其がお厭だから、御病氣に……。」

「左様だらう。お龍やお友が喜び勇んで居るのに引替へて、虛病を遣ふ迄に苦勞をして居るのを考へると、實に氣の毒でならぬ。あゝ、實に面目ない。」と、大助は頻りに歎息したが、「だがな、お大、お綾にはお前が始終従いて居て呉れ、れば……私も餘所ながら注意を爲様から、お綾が苦勞に思ふ程の事もあるまい。實は商賣上の事で、身代の破滅にも關する程の……。」お大、誰も聞いて居やしない。お大は顔色を變へながら、注意爲て四邊を見廻したが、茶の間の方に、お龍とお友等の聲は聞こえるが、人の影らしいものも見えなかつた。

「今委敷い事を云ふ必要もないが、兎に角私の爲めに一大事——大切な園遊會だから、お前からお綾へ話して呉れて、明日行つて貰ふ事にして呉れないか。」

「はい。私から能く申し上げませう。」と、お大は尚ほ云ひたげに爲て居る。

大助は小首を傾ながら、「お大、お前は尙だ他にも何か話がありさうだな。」
 『はい、申上げた事、澤山御座いますけれども、御主人さまへ餘り失禮な事も……。』
 『それだけ聞けば可い。其も解つて居る。もう少し我慢を爲て居て呉れ。他の者が何か思つても能くない。さう、彼方へ行くが可い。彼方へ行つたらお龍に來る様に云つて呉れ。』
 お大は主人の今夜の話し、多少力を得た様な心地、お龍に大助の旨を傳へて、急いで二階なるお綾の室へ行つて見た。

(二十四)

お大が二階のお綾の室に行つて見ると、机の上に洋燈が幽かに點いて居り、お綾は抱卷を額から掛けて居た。

お大は徐かに枕頭に進寄り、「お綾さま、お綾さま。」

お綾は抱卷の襟を搔遣つて、僅かに顔を出して、「お大かい。他には誰も居なくつて。」

『はい。私一人て御在ます。』

『さう。ぢやアね、洋燈を些し明るくして呉れな。』

『はい。』と、お大は洋燈の火を太めて、熱くとお綾の顔を見て、『またお泣き遊ばしたんですね。』

『だって、考へると悲しい事はかしたものだ。』と、又ほろ／＼と涙を溢すのである。

『もう其様にも泣き遊ばさないで能う御座んすよ。』と、莞爾した。

お大が『もう』と云つた語、それに莞爾した様子が、いつもより何處にか勢がある様だ。

『もうと云ひだつて、何時まで立つたつても、私の苦勞が無くなる事はありやしないもの。』と、涙を拭いて、『私は病氣だつて云つてお呉れたつたらうね。』

『申しましたとも。申しましたけれどもね、お綾さま、明日は御病氣が御治んなさるなまや、不可いんで御在ますよ。おほい。』

『お前は何を云つてお居てなの。何だか面白うね。』と、可厭な顔を爲て横を向ふとした。

『あらお綾さま。』と、お大は依然威勢よく、『だつてお治んなさるなまや不可いんで御在ますよ。おほい。』と、お大は聞き遊ばせよ。旦那さまが私へ唯今、斯う仰有つたんで御在ますよ。』

お綾は父からの話があると聞いたので、僅かに身を起して、『阿父さんのお話つて。』
 『旦那さまは能く察して居らつしやるんで御在ます。』と、お大は聞き遊ばせ……。』

お大は大助の談話を委しく聞かせて、『それですからね、如何してもお綾さまが快くお成り遊ばさなまや不可いんで御在ますよ。』

『お大、全くなのから。』と、お綾は半身を起した。

『此様事に虚構が云へる者ではありませんよ。ですからね、明日は、お綾さまも三さまも私も大役があるんですから、お綾さまに治つて戴かなまやアならないんで御在ます。』

『左様かい。』と、お綾は布團の上で起直つて、『阿父さんが本統に左様思つて、下さるかねえ。』と、今度は嬉し／＼の涙をほろ／＼と溢した。

『ですからね、是迄の様に、何も小さく成つて居らッしやる事はありませんよ。なアに、どしく威張つてお遣り遊ばすが能う御在ます。』

『ほ、ほ。』と、お綾は僅かに笑つて、『私には威張るなんて、其様事は出来ないは。』

『おほほ、。其は戯言ですけどもね、旦那様の仰有ッた事が御解り遊ばしたら、明日はお早くお起き遊ばすんで御在ますよ。』

お綾は首肯して、『お、屹度起きてよ。だがねお大、阿母さんが何とかお思ひなさりやしないかね。』
『能う御在ますアね、何とお思ひ遊ばしたアても。旦那さまは御新造さまやお友さまを、少しも信用して居らッしやらないのですよ。』

『左様か知ら。』

お綾が父の心を尙ほ疑はしく思へる處へ、階段を徐かに登つて来る足音が聞こえた。

(二十五)

段梯子を上つて来る足音に、お綾とお大はぎよつとしながら顔を見合せて、お綾は早くも額まで抱卷の襟を掛けて了つた。

足音は紙門の外でびたりッと止つて、室内の様子を窺ふらしかつたが、聽て三寸ばかり細目に開けて差覗くのである。

お大は斯くと見るより聲を掛けた。

『覗いてるのは何人？……用があるんなら入つて下さい。断もしないで覗いてるなんて……本當に誰だらう——怪しな人ぢやないか。何人ですか……。何故黙つてるんだらう。』

お大の方から室外は見えないが、彼方からは能く見えるらしく、尙ほ屹度覗いて居るのか、灯がきらりと其瞳子に映つた。

『氣味の悪い人だよ——黙つて居てさ。』とお大は腹立しげな眼に、ためつすがめつ見返して居たが、相手が餘り厭過ぎて居るので、お友が調戲つて居るのではないか。自分に等しい雇人ならば斯く迄厭つて居得る筈がない、と不圖思付いたので、態と微笑を含めて、『お友さまですか。屹度左様だよ。ねえ、お友さまでせう。おほ。』お綾さまの御見舞に入らしつたんですか。お友さま……お友さまですはねえ。』

『左様だよ、お綾さんの御見舞に來たんだよ。』と、するりと紙門を開けた。

お友と思の外、室内に入つて來たのはお龍であつた。

『おやッ、御新造さまッ。』と、お大も流石に極が悪く、『御新造さまとは思はないて……御勘辨遊ばして下さるさ。』

お龍は可笑さらな笑を漏して、『結局當らなかつたねえ。ほ、ほ。』と、お綾の枕頭へ歩寄つた。

『阿母さん、御免下さい。』

起上らうとするお綾を、お龍は手を擧げて制して、

『あらッ、お起でなくつても其儘臥て居ての方が可いよ……お起さでなくつても可いんだのに。』

お綾が起上がると、お大が背後から抱巻を掛けて遣りながら、「お風にお當り遊ばしては不可せんよ。」

「いゝえ、もう其様でも無いは。」と、抱巻を静かに撥除けて、「寢床の上で、御免なすつて下さいまし。」

「お起きてなくつても可かつたのに。」と、お綾の顔を熟くと視るのである。

お綾は當面に面に當つて居る燈火を眩しげに、徐かに顔を背向けながら、「もう快くなつたんですか……明日の朝は起きられさうで御在ますよ。」

「明日はお起きてすつて。」と、お龍は眉を緊め掛けたが、直ぐにそれを心配らしく見せ掛けて、「輕卒な事を爲てない方が可いよ。ねえ、お大、また悪くてもお成りだと不可いから。」

「左様で御在ますね。ですけれども、もう御熱氣も無きやア、御氣分も御快いさうで御在ますから、明日あたりは却つてお起き遊ばした方が、」

お龍は早くも遮つた、而も憎くさうにお大の顔を睨みながら、

「お大、お前は私の煙草箱と煙管を取つて来てお呉れ。それから、あのう……いゝえ、其だけで可いんだよ。」と、お大を階下へ遣らうとして、又呼止めて、「此處へはお辨に持せてよこしてお呉れ。お前は旦那の方を……御用がありてもすると不可いから、氣を付けて居てお呉れよ。」

もう此處へ来るには及ばぬと云ふ謎であるから、またお綾さまへ難題でも云掛るのではないかと、氣遣はれてならぬけれども、逆ふ譯には行かねば、覺束なげにお綾に顔を見合せて、お大は階下へ行つて了つた。

(二二六)

お大の足音が段梯子を下り切たのを聞き了つた時、お龍はお綾の顔を見て莞爾しながら、「お綾さん、お前さんは愈々明日はお起きなのかい。園遊會へも是非御行でたらうね。」

「は、成丈行りたいと思つて居ます。」

「それは左様だらうね。それも無理は無いのよ。」と、お龍は意味ありげにお綾を見た。

お綾はお龍の語に意味が籠つて居様とは思はぬから、垂頭いた儘黙つて居た。

「ほ、ほ、ほ。」と、お龍は何故か軽く笑つて、「お前さんは嘘ぞ明日が待遠だらうね。それも無理はなすよ、何しろ見合をしやうと云ふんだから。」

「えッ。」と、お綾は吃驚して顔を上げて、「見合つて、誰が見合を致すのですか。」

「ほ、ほ、ほ、お綾さんが旨く御遠慮だよ。おほ、おほ。」

「私が……私は何にも知らないんですの……。」と、お綾は合點が行きかねて、「阿母さんのお云ひなせる事は、私には些とも分らないんですよ。」

「ふ、旨く云つて居るだ。」と、お龍は態とお綾の顔をしげくと見て、「明日の園遊會はね、お綾さんの見合の爲に催すんぢやないか。それなのに、其様にしらばっくれてゐるんだから、おほ、お樂だはねえ。」

お綾は顔を眞紅にして了つて、「阿母さんが彼様事を云つて、調戲はうと思つて、おほ。」

『私が調戲ふんだって、戯言を云ひてなすよ。』と、お龍は至極真面目で、『ちやア、お綾さんは未だお知りでないんだね。』

『はい、私は何にも——何にも聞かないんですから……見合だなんて、其様事がある筈がありませんもの。』

『全くお知りでないのか。』と、お龍は呆れ果たず、『明日の園遊會にはね、全くお前さんの見合があるんだよ。』

お綾はお龍が自分を調戲ふ爲の作言と思つて居たのに、此程までに云ふのを見ると、多少形がないでもないらしいから、非常に吃驚して、もう顔色を變へて居る。

『山林局長の高畑さんと云ふ方がね、是非お綾さんを奥様に爲たいからって、議員の片桐さんに頼んで、阿父さんへ申込んで来たんだよ。だから、片桐さんが彼様に度々御入來なんだよ。』と、お龍がお綾の顔を見ると、今はもう眞青になつて居る。

お龍は語を續いて、『先方は山林局長ではあり、大臣の松矢さんが曳いてる人なんだから、彼人を婿に持つて居ると、何かに付けて都合が好いものだからね、阿父さんは大概承諾してお居ての様だよ。』

『阿母さん、そ、其、其は本統なんです。』と、お綾の聲は顫へて居る。

『私は本統だらうと思ふんです。』實はね、阿父さんからは未だ私へもお談がないんだよ。だけれども、私は確かな人から聞いたんだもの。』

『私へも些もお談をなさらなして、阿父さんへ餘り酷う御座んすは。』と、お綾は泣聲になつた。

『全くお前さんの云ひの通り。』と、お龍は相槌を打つて、『私へだつても、鳥渡位話して下さるのが、當然ではないかと思ふのさ。お綾さん、左様ではないかね。』と更に不平一杯の語調で、『私がお前さんやお友さんを自分が生んだんで無いものだから、此様時になると除物にされるんだよ。私だつて今度の事などは、實に口惜くつて爲様が無いけれども、じつと耐忍を爲て居るんだよ。』

『阿母さん、其が本當でしたら、私は何したら可いでせうか。』と、お綾は涙を流しながら、『阿母さん、見合をしながら濟む様にはなならないでせうかね。』

『左様だね。』と、お龍は當惑したらしく小首を傾げて居たが、應てお綾の顔を熟と見た。

お龍は迷惑げに少時考へて居たが、應てお綾の顔を熟く見て、

『お綾さん、お前さんが全く明日の見合を可厭だと思ひなら……お前さんの意志一つで、何にてもなる事ですよ。』

『え、私の心地一つてですか。』と、お綾は當惑しながら、『私には何すれば可いかわりませんもの。』

『なに、お前さん、何でもありやしないぢやないか。明日も病氣だと云つて、園遊會へ御行でいなさや、見合も何もあつたもんぢやないよ。お前さんが本當に可厭だと思ふんなら、左様御爲が可いぢやないか。』と、お龍は斯う云つて、何と返辭をするかと、瞬もせずにお綾を見て居る。

お綾は此時先刻のお大の語を思出した。お大が云つた處と、今お龍から聞く處とは無論相違して居

(二十七)

る。お大は是非園遊會へ行く様にと云つた。それには父の意を受けて居るらしかつた。今のお龍の語は……云ふまでもなくお大の語を信用しなければならぬ。お龍が此様事を云ふのは、何か腹に目論見があるのかも知れぬ。大方其様事であらうのに……一時にしても、自分は何して此様氣になつたのか——欺される迄氣を許したのであらうか。あゝ、萬事に氣を注いで居なければならぬのに、危ない事であつたと、漸と氣が付いたので、お龍へは返辭をせずに黙つて居た。

お龍はお綾の意中の變化を、早くも其色目で見取つたらしい。

『お綾さん、お前さんは何と爲すか。え、明日は矢張りきたいんだらう——内心行きたがッてる癖に……それなら左様と早くお云ひが可いぢやないか。虚涙などを溢してさ。人を馬鹿にするのも、大概に爲て貰ひませうね。お前さんは私の云つた事を虚構だと思つて居てなんだね……いえ左様ですとも——お前さんの顔に書いてあるぢやないか。人が親切に教へて遣つたのを、虚構なら虚構にして置くが可いのさ。』と、お龍は散々の不機嫌で、『だがね、今夜の事を覚えて居て。』

お龍はお綾を園遊會へ行かせまいとの策が、其効を奏せなかつたので、お綾を睨付けて置いて、疊を蹴立て、段梯子を下りる足音は、松田老人の膽玉を寒からしめたのであつた。

お綾はお龍の機嫌を損じたのが、また一方ならぬ苦勞である。平生でさへも、自分へ對しては萬事意地悪の人だから、明日は又何様難題を云掛けるかも知れぬ。何様粗相をさせらるゝかも知れぬ。それを思ふと、明日は依然病氣の積りて、圓子坂へ行かない方が可いかも知れぬ。左様しやう——左様した方が無事に済むのだから、どうも其方が可い様だ。それとも、お大に相談して見様か知ら。お大が

来て呉れば可いのに……私がいま下りて行くと云ふのも……下りて行つたら、直ぐにもう目を注がれて、また可厭な事の一つも聞かねばなるまいし……いや、下に行くのは止しに爲様。今怒つて下りて行かれたから、私の事を何様に吹聴して居られるかも知れない——聞けば可厭な心地を發さずには居られぬ、聞かなければ腹も立たずに済む。下へは行かずに寝る事にしよう、枕頭の灯を細めて、眸を横にしたけれども、又手中々眠れさうにも無い。

全然虚構とは思ふけれども、お龍に云はれた見合が、全く氣に掛らぬでもない。ある可き事では無いけれども、萬一左様であつたら何しやう。山林局長とか何だとか、えらい人かも知れぬ、立派な人かも知れぬけれども、私は其様人なんぞの……可厭事、聞いてさへぞつとするのだから、誰が其様人なんぞを……

お綾は此事を思ふに就けても、三之助の事が絶えず思はるゝ。斯と取止めて思つて居るのではないけれども、今夜は一入三之助の事が胸を離れないで、折々は太息さへ漏すのであつた。

(二十八)

お龍

夜は何時しか明けて翌朝になつた。お綾は夜中能く眠むらなかつたので、朝は早く起出て様と心に掛けて居ながら、つい睡忘れてお大に揺起されて、始めて眼を覺した。それは五時六時の間であつたが、お龍お友等は既に起出て、かしかましく何やら云交して居た。

『私ばかり此様に睡忘れて了つて、階下へ行くのも極が悪いは。』と、お綾は情平で居る。

『能御在ますはね、昨夜まで御病氣の事になつて居るんですもの。』と、お大はお綾の臥具を覗みながら小聲になり、『昨夜は彼時から御新造さまが何か仰有つたてせう。』

『あゝ。』と、首肯いて、背後を見返りながら、『今日の園遊會は私の爲の催しだとお云ひなすつてね……』と、昨夜のお龍の話——見合云々の事を話して聞かせて、『お大、其様事はありはしないはねえ。』
『ほ、ほ、。』と、お大は笑出して、『お綾さまは、餘り御正直だから、御新造さんが其様事を仰有つて、お綾さまを嫌がらせて、今日團子阪へ行ツしやらない様にしやうつてなすつたんですよ。左様でなくつて貴嬢、突然にも見合だなんて、其様事が御在ますものか。』

『私も左様だらうと思つてよ。』
『左様で御在ますとも——大丈夫其様事は有ませんからね、御安心なすつて居らツしやいませ。』
『それで漸と安心してよ。』と、お綾はほつと息を吐いた。

『三さまとお綾さまの御役が、今日中での大切な御役ださうて御在ますよ。』
お綾は眉を蹙せて、『私に出来れば可いけども……。』
『御出来遊ばさない事がありますものか。及ばずながら私が始終お傍を放れない様に致しますから、安心して居らツしやるが能う御在ます。』

『何卒ねえ、後生だから左様してお呉れよ。』
お大は首肯しながら、『ですけどもね、お氣を御注げ遊ばさなさまや不可せんよ。御新造さまは、お綾さまの御役を、お友さまにさせたがつて居らツしやるんですし……且那さまが是非お綾さまにと仰有

つたから、御新造さまも詮方が無く黙つて居らツしやいますかね……昨夜お綾さまを嫌がらせたりなにかなすつたのも、其事から御在いませうよ。』

『左様かねえ。』と、お綾は心配さうに考へて、『私今日は矢張病氣の積で、宅に居やうか知ら。』

『其様事を遊ばすと、且那さまが御困り遊ばしますよ。』

『だけでも、私や可怖い様だもの。』

『ですから、私がお附き申すんで御在ますよ。』

『だけでもね。』

『御氣が御弱くツちやア不可せんよ。貴嬢と三さまとお二人を、且那さまがお頼になすつて居らツしやるんですから、親御様の御爲だと思召して、今日一日は氣を大きく御持ち遊ばさなさまや不可せんよ。』
『それも左様ね。』と、尙ほ考へて居る。

『何もお考へなざる事はありませんよ、安心して居らツしやいませ。』

お大はお綾の氣を引立てさせて、漸と階下へ伴つた。

お友はもう着物を着替へて居て、お綾が起きて來たのを見るより、早くも姉さん〜と呼掛けて、

『早く着物を着替へなさいな。私もう着替へてよ。』

お綾も莞爾して、『帯が能く似合つてね。』

『左様、本當。』と、お友は嬉しうに、背後へ手を遣つて見なぞする。

お綾は其を見過して、手水を遣に行つて了つた。

お大

(二十九)

お綾が手水を遣に行くと、お大が早くも金盥に水を汲んで来て、小聲になり、

『お綾さまの御起なつた事を、旦那さまへ鳥渡申上げましたらね、大層喜び御在ましたよ。』

『左様。』と、お綾は嬉しげに、『阿父さんが喜んで下さつて。』

お大は首肯さし、『何か餘程御大切な事が御在んなさる様で御在ますよ。』

『左様かい、今日の園遊會に。』

『はい。お綾が行つて呉れるので、乃公も安心したと仰有つて、旦那さまがほつと息をお吐き遊ばしたんですもの。』

『何様事があるんだらう。』

お綾は眉を顰めてお大の顔を見た時、足早に其處に通掛つたのは、お龍お友が氣に入りの女中のお辨、何か盆に運せたものを運ぶのであつたか、二人を見るより足を止めて、嘲るが如き笑を浮めて、

『お綾さま、今日はお樂みて居らっしゃいますね。』

『お辨、何を云ふの。』

『だつて、團子阪で御見合を遊ばすんださうで御在ますもの。』

お綾は横を向いて了つた。

『お辨さん、何にも知りもしないで……早く彼方へお行で。』と、お大はお辨を睨付けた。

お辨はへんと鼻の先で、『憚りさまね。御氣の毒だがね、お大さんのお差圖には及ばないよ。生意氣を云はないで、些と自分の事でも氣を付けるが可いや。』

『何だつて、お辨さん。』

お大が氣勢立つたのを、お綾は早くも制へて、『お大、お止しよ。お辨、お前も早く用をお爲の方が可くつてよ。』

『はい。』と、お辨は如何にも下墨んだ語調で、つんと澄して、椽側を向へ行つて了つた。

お大は見送りながら、『憎いぢやありませんかね。』

『いひぢやないかね、彼様人だと思つてりや可いは。』と、お大を和めて置いて、お辨まで彼様事を云ふんだもの、高畑さんとかの事が、

『いゝえ、大丈夫で御在ますよ。高畑さんのお給仕はお友さまと決つてゐるんですもの、其様事は屹度

ありは致しませんから、安心して居らっしゃいませ……早くお顔をお洗ひ遊ばして、早く旦那さまの御傍へ行らっしゃるが能う御在いますよ。』

『左様。』

お綾が手水を遣ひ掛けたので、お大は茶の間の方へ行つて了つた。

お綾が漸く手拭にて顔を拭き掛けた時、突然に背後から聲を掛けた者がある——而も忍音で、お綾さんくと二聲呼掛けたのであつた。

『三さんですか。』と、お綾は早くも聲音に其人と覺つて、振返るよりも先づ四邊を見廻した。

三之助も四邊を見廻しながら、「昨日叔母さんに御目に掛りましたよ。お變んなすつた事もありませんから、安心お爲なすよ。」

『左様。有難う。』

『種々話がありますかね、今此處では人でも来ると不可いから、何れまた……』と、云掛けて、また四邊を見廻し、『團子販で話せたら、彼方で話しますがね……尤も些も心配する事でありません。』

お綾は首肯して、『團子販で話す事が出来る则可いけども……三さんはもう直ちに御出掛けなされるの。』

『其積です。今叔父さんに御目に掛つて、直さに行く積です。』と、三之助はお綾に別れ様として不圖思出したらしく莞爾して、覺えず聲高になりながら、『お綾さんは今日は團子販に嬉しい事があるんですッてね。』

『ミッ。』と、お綾は呆れて、而も口惜しむうちに、『三さん迄彼様事を。』

『だッて、大變に評判ですぜ。』

『能御座んす、膽斗其様事を云ひなす。』

『怒つちや不可いよ。ははは。』

三之助が笑つた時、何時來て居たのか、お友が背後から、

『三さんが嫉妬やして居てよ。ほ、ほ、ほ。』と、お友が可笑い。おほほほ。』

三之助も覺えず顔を赧くし、お友を見返つて莞爾しながら、大助の居室の方へ行つて了つた。

お綾も苦笑をしながら、お友と共に茶の間へ入つたのである。

(三三)

お龍は茶の間の火鉢の傍に坐りながらも、そはくせかくと何か云罵つて居たが、今しもお綾が入つて來たのを見るより、

『おや、お嬢さんが御起なつたよ。』

お綾は顔を眞紅にして『阿母さん、お早う御在ます。つい寝忘れて、どうも濟みませんでした。』

『なに、濟まない事があるものですか。寝て居やうと起きて居やうと、お前さんの勝手ぢやないかね。御病氣だと仰有るがと思ふと、御都合次第で直ちに御全快だ。ほ、誠に御調法なものさね。』

お綾は何と云ふ可き語もなく朝から斯うも辛い事をと、そッと彼方のお大に顔を見合せたが、直ぐに垂頭して了つた。

お龍は氣味が可いと云はぬばかりに、屹度お綾を見下して居たが、何か思得たらしく莞爾して、『あ、左様く。お綾さん、今日はお前さんの園遊會と云つても可いんださうだから、萬事お前さんが指圖をして呉れたらうね。』

『えッ。』と、お綾は覺えず顔を上げて、昵とお龍を見た。

『お綾さんが萬事爲ても呉れたから、私は荷が輕くッて、今日は何様に氣が樂だらう。お綾さん、宜敷く頼みますよ。』

お大は口を出さずに居られなくなつて『左様では御在ますまひ。昨夜旦那さまが仰有つたのは、御新造さまは總御指圖役、お綾さまは大臣さんの松矢様の御給仕をなさるんだつて、私は伺つて居たんですが……』

『お前は能く知つて居てだね。』と、お龍は長煙管の羅字も折れよと火鉢の縁を打いて、『お綾さんの事だと云ふと、むさになつて口を出したがるんだよ。』

『私は好んで何も申上げたいんではありませんけども……餘りお綾さまが御可愛相ですから……。』
『なんだつて、お綾さんが可愛相だ。』と、お龍は釣上げた外眦をびりりとさせて、『私がお綾さんを苛めると云ふんだね。』

『いゝえ、お苛めなさるとは申しませんが……。』と、お大は流石に云淀んだが、忽ち決する處のあるもの、如く、語調も屹度なつて、『餘り御無理はッかし仰有るから御在ます。』
『私が無理を云つて。』

『へい、左様で御在ますとも、御無理ではありませんか。お綾さまに萬事指圖を爲てお呉れなんて、お綾さまをお困せなさる思召としさや思へません、御苛め遊ばすとしさや思へません。お綾さまが御新造様へ御指圖が御出来遊ばすか、御出来遊ばさないか分切つてる事ではありませんか。それですのに、今の様な無理をお云ひなさるんですから、御苛め遊ばすと申したんで御在ますのさ、はい。』
『能くお云ひだ、主人へ能くも今の様な事を……今一度云つて御覽。』と、お龍の聲は甲走つて、煙管持つ手はぶる／＼と顫へて居る。

『云へと仰有るんなら、幾度でも申上げますとも。』と、お大は却々負けて居さうな氣勢もなく、尙ほ云募らうとするのを、先刻からはらく／＼危んで居たお綾は、僅かに語を挿す機會を得て、

『お大、何故お前は其様事を云ひなの、私が困つたふぢやないか。何卒止してお呉れ、後生だから。阿母さんへ御詫をしてお呉れ。お大、お大……私が此様に頼んで居るのに。』

お大はもう眼に一杯の涙を有つて、『はい。ですけども、私は餘りだと思ひますから。』
『何が餘りだ。』と、お龍は居丈高になつて、お大を見据えて、『今一度云つて見るが可い、其儘では濟まなから。』

『はい、お暇を御出し遊ばすなら、お出し遊ばしたつても……。』
『お大、叔母さんへ何を云ふのだ。』

三之助は茶の間へ入つて来て、態とお龍とお大との間に坐つた。

(三十一)

三之助はお龍とお大の間を隔て、坐りながら、『叔母さん、お大などを相手になすつたつて詰りませんや。お大、お前は彼方へ行くが可い。』

『三さん、放擲して置いてお呉んなさ。』と、お龍は三之助を邪魔だと云はないばかりに、お大を見得る様に眸を乗出して、『暇を呉れるつて能くお云ひだ。』

『はい、お綾さまがお可哀相ですから、今日まで辛棒したんですけども……。』

三之助は早くも大の語を遮つて、『詰らない事を云ふものではない。お前は叔母さんへ抗言をするなんて、實に失禮極るぢやないか。それとも、尙だ云ひたさや云ふが可い。さア乃公が相手にならう、さア云ふ事があるなら、云つて見な。』

お綾も傍から、『三さんが彼様に云つても居てだから、お前は彼方へ云つても呉れ。阿母さんへは後で私がお詫をするから……お前、私の云ふ事も聞いて呉れてないかい。』と、泣かぬばかりの語調である。

『はい。参ります。』と、お大は口惜げに袖を顔へ當て立上つた。

『いえ、彼方へ行く事はならないよ。』と、お龍が怒鳴付けるのを、三之助は早くも遮つて、

『叔母さん、多寡が女中の事ですから。』

『女中だから——女中の癖に彼様生意氣な口を……私や實に口惜いのだから。』

『叔母さん、女中なんぞが何を申たつても……理非の區別も知らない者を相手になすつたつて、詮方が無いぢやありませんか。』と、三之助は獨語の様に、『彼様女ぢやないと思つたんですが……彼様者を相手になすつては、大人氣なう御在りませう。』

『左様さ、私は何せ大人氣ないのさ。』

お大が其處に居ないので、今度は三之助へ喰つて掛つた。

『私まで御機嫌を損じたんですか。』と三之助は頭を掻く。

其様子を お龍は自分を弄ぶとも思つたのか、『三さん、お前さん迄が私を馬鹿にも爲なんだね。』

『えッ、飛んでも無い。』と、三之助は眼を睨つて、『其様事を云つて下さつちや困ります。』

『いえ、お前さんとお大と……三人共謀になつて、私を馬鹿にしやうと云ふんだから。』

『何を仰有るんです。』と、三之助は傍に先刻から珍しくも一言も出さずに居たお友を見返つて、

『お友さん、貴女からもお詫をして下さいな。私が叔母さんを……其様事なんぞが、お友さんも能く知つて居て下さう。飛んでもない事になつて……叔母さん、御氣に觸つたら、何卒御勘辨を願ひます。』と、又お友を見返つて、『お友さん、後生ですから、何とか御詫をして下さいな。』

お友はつんと澄して居たが、二度斯う頼れて、三之助に顔を見合せた時、何と思つたのか首肯しながら、『阿母さん、三さんは其様人ではありません。私も御願ですからね、機嫌を直して上げて頂戴な。』

『お前さんの知つた事ではありません。』

お龍に言下に却けられて了つたので、お友は極悪さうに、而も不平も交つたらしい顔を下垂けた。

『お友さん、お前さんが口をお出しの處ぢやありません。黙いて居て下さい。』と、重ねて着めて置

して、『三さん、お前さんも左様だがね、お大の姉め、お須賀さんの時から居るのを鼻に掛けやがつて……本統に憎いッちやないよ。』

お龍が如何にも聲高に口惜げに云つた時、椽側から差覗いたのは、思も掛けぬ大助であつたから、

一同吃驚して、お龍も流石に顔色が變つた。

『三之助は未だ行かなかつたのか。早く行くが可い。お龍、乃公も出掛けるとしやう、着物を出して

呉れる様に。」

大助は斯う云捨て、椽側を靜かに踏鳴しながら、居間の方へ歸つて行つた。一同ほつと息を吐いた。

(三十二)

八十島が團子阪の別荘に、觀櫻會を兼ねての園遊會に、招待狀を發したのは百幾十通であつたが、當日來會した者は、漸やう五十幾人と云ふのである。松田老人などは非常に氣を揉んで、此は何した事か、當家の園遊會だもの、縁を求めても來たがる人が多く、此庭に入りさらぬ程の盛會だらうと思つたのに、御招なすつた半分——漸と三ツ一足らずとは、何と云ふ不思議な事であらうと、主人への氣の毒さは云ふ迄もなく、自分も張合拔が爲た様で、三之助に出會ふごとに、眉を擡めては叫ぶのであつた。

『不思議と云へば不思議ですが、機會が悪かつたんですな。別は仔細はなしてせうよ。』

三之助の答辭が意外に平氣なのが、老人には又不平であるのだ。

『機會が悪いと申せば、其迄がすければ、苟にも御當家の御招に預つて、やれ病氣で御座るの、やれ先約が御座るの、差支が御座るのと斷の手紙を出された人達の氣が知れんてかすよ。病氣、これは止むを得ないと致して、先約だ、差支だなどと……中には御當家の御陰を被つて居る人達も多分にあるがすよ。まづ三ツと二十人近くもありませんか。恩も義理も知らん人達だと思ひまして、私はやもう胸糞が悪うてな、折角樂みに致したお催しが、些とも面白い事はありません。彼通ち

腹の大きい旦那さまですから、可厭顔一ツ御見せなさいませんですが、御意の中をお察し申ますと、いやはや御氣の毒様でがす。』

老人が頻りに口説立てるのも無理は無いが、今日來客の少いのは、叔父さんの御心持では、却つて僥倖だと思つて居てなさるかも知れない。松矢大臣ももう御入來になつて居るし、高畑さんさへ御入來になれば、今日の大切な客は揃ふのだ。此は屹度來會さる、筈の様に聞いて居るから、此人さへ來らるればと、三之助は老人の述懐を寧ろ可笑い程に思ふのであつた。

『松田さん、高畑局長は確かに御入來の筈に、御返書が來て居た様でしたな。』

『左様でがすよ、山林局長さんは是非も入來の筈で、先刻片桐さんが御入來の節も、御傳言がありましたのでがすよ。』

『それでは間違もありませんまじ。』

松田老人は忽ち眉を擡めて小聲になり、「八杉さん、貴方に伺つたら、或ひは御存じかも知れませんが……實はな、先日伺ひたいと思つたてがすが……」

松田老人が松矢大臣高畑局長の事に付いて、三之助へ問はうとした時、緋の襷に曙染の前垂掛、甲斐くしい打扮した半玉のお半と云ふのが、福草履の足を空さまに走つて來て、二人が接待員の印のリポンを胸に挿して居るのを見るより、

『松田さんて方は居らッしやらなくッて。』

『えッ、松田は私だ。』

『御案内があつてよ。局長さんとか、入らしたから、早く来て下さい。』

松田老人は片手には羽織の襟先、片手には袴の前を抱へて、何十年振の駆足せはしく、玄關の方へと走つて行つた。

半玉も笑ひながら老人の後から駈けて行くのを見送りながら、三之助は徐かに歩を移しながら

『松田さんが來客の勘いのを氣にして居るのも、又一方から考がへると無理もない。會社の方も銀行の方も閉店なさるかも知れないと云ふ様な噂を、世間の人が知つて了つて、それで此様に來客が勘いのなら……いや、左様かも知れない。もし左様であると大變だが……』

と云つた様な事を考へながら歩いて居ると、俄かに木蔭に人の笑ふ聲が聞こえた。はッと思つて窺ふと、其處はお友が洋酒の店、二三の來客ががやくと騒いで居るのであつた。

(三十三)

此別荘を一名櫻の園と呼ばせた名木の彼岸櫻、而も枝垂の糸長く、三本まで鼎をなして、今を盛と咲誇つた其樹蔭が、此庭内での一の場所である。其處に設けられたのが、お友の洋酒店で、新橋藝妓の市之丞、千代松に半玉の吉香の三人が給仕に立働らいて居た。

紫縮緬の座布団を列べた牀几には、八十島銀行の出納掛の大西正己、大東商會の支配人見習の串本忠太郎の二人が腰を掛けて、麥酒を一壘宛、下物は燻肉の小皿を前に控へて、はや眼邊をとろりと

させて居た。

お友は吉香に麥酒の壘を持たせて、牀几の傍に来て、

『大西さん、麥酒の御代は如何で御座います。』

『やッ、お友さん。』と、大西は些く形を改め、『麥酒のお代は至極結構ですが、併し恐入りましたな。』

『大西さんが御遠慮なさるんだよ。おほ。吉香さん、其を其所に上げてね、串本さんへも持つて來て上げて頂戴。』

『はア。』と、吉香は麥酒の壘を取りに行つた。

『私へもお代とは、御注意恐入りましたな。』と、串本は前禿の頭を後へ撫てながら、『お友さん御自身の御給仕では、串本大いに恐縮致しましたな。』

『ほほ。串本さんも彼様事を仰有るんだは。』と、吉香が持つて來た麥酒の壘を取上げて、『御酌を致しませう。』

『えッ、お酌をなすつて下さる。これは愈よ恐縮です。』と、串本は又頭をつるりと撫て、『いや、別して味が結構です。』

『大西さん、貴方は。』

『えッ、私へも……いや何も、これは。』と、大西は水壺を兩手で捧げて、吹溢る、麥酒の泡へ口を附けたが、噎せると共に鼻も鬚も胸も泡だらけにして、顔を突出し、手を廣げたまゝ、嘔ほども口を利き得ないのである。

土岐が牀几へ腰を卸すと、片桐は櫻の幹へ背を倚せて、梢の花を見上げた。

「片桐さんも御掛け遊ばして下さいますし。」と、お友が聲を掛ける。
「はア難有う。實に美事に咲いてるですな。」と、片桐はお友市之丞等をすらりと見て、「美人と名花を一眸に集めて、酒杯に葡萄の佳釀ありと云ふのだから、此所の御店が他に比して幾層の繁昌を見るのも、無理からぬ事です。なア、土岐さん。」

土岐は笑ひながら、「誰の望も其様ものかも知れんですがな。はははは。」
「はい、貴方、葡萄酒。」と、吉香は片桐に葡萄酒の杯を進めた。

「はははは。」とお前は氣が利いとなるな。」と、片桐は杯を取上げる。
市之丞は土岐へ麥酒を進めながら、「此頃は餘り酷う御座すよ、些とも呼んで下さらないのね。」

「いや、佳しきもんだから、久瀬何處へも出掛けな。」
「嘘を仰いよ。昨夜も彌生へ入らしてよ……御隠しなすつたって無益よ、ちやアんと種が上つてるんだもの。」

「いや、其様事は無い。昨夜は……さうく片桐さんと一處で。何處へも行きやせん。」
「ほほほ、旨く云つてらっしゃるは。片桐さんも彌生へ行らつてたはね。」

片桐は形ばかりの八字鬘を捻りながら、微笑を含み、「うむ、我輩は行つたよ。尤も連はあつたが、土岐君とはなかつた。」
「いへえ、土岐さんと御一處、梅ちゃんの花ちゃんが侍て居た事まで、ちやアんと種が上つてるんだ

もの。おほー。」

「いや、左様知ツとつちや叶はん。はははは。」
「ほら御覽なさいな。土岐さんは隠してらっしゃるだけ、罪が深いよ。早く白状してあしひなさいよ。」

お友が微笑を浮めながら、面白さうに此間答を聞いて居たのを、土岐は氣付くと共に笑掛けた。

「お友さん、藝者と云ふものは、饒舌なものですな。はははは。」
「でも、面白さうですと、おほー。」

「お嬢さん、土岐さんには面白い事があるんですよ。」と、市之丞は笑ふのである。
「馬鹿な。」と、土岐は態と叱る様にして、目配をした。

「市之丞、暴露いて遣れ。」と、片桐は傍から使喚ける。
「土岐さんの面白い事って、何様事が御在んすッて。」

「お友さん、請らん事をお聞きなされるすんぢやない。此連中は何を云ふか知れたものでないが、えいと、其よりかも……うむ、左様だ、お嬢さんは此店に御一處でないますか。」
「姉ですか。」と、お友は横を向いて、「大臣さんの方に、御給仕を爲てお居てませうよ。」

「あッ、左様でしたな、先刻御見掛け申したッけ。」
「土岐君、旨く誤魔化し了せたな。」

「本當ですはねえ。」

其處へ駆けて来たのは、女中のお辯である。
「お女さま、早く入らっしゃいます。局長さんが御入来になりましたよ。」
「左様。」と、お友は早や歩を移すのである。
「高畑が来たと見える、僕も行かんければ。」と片桐も足早に檜葉の植込の蔭へ入つて了つた。

(三十五)

お友片桐等が去る前に、大西申本等は狐鼠く〜と何時か姿を隠して了つたので、後には藝妓等の外に、土岐頼夫一人になつた。
店を四五間離れた大木の松の幹の蔭には、三之助が来掛つて、先刻から静かに佇立して居たけれど、今まで誰一人氣付いた者はなかつたらしい。
土岐は市之丞へ對ひ、「お前にも困るな、場所も相手も構はないで、詰らん事を饒舌ぢやないか。」
「だって、彼位な事を云つたつて可いぢやありませんか。」
「左様でないよ。いや、其様事は先づ可しとして……。」と、土岐は其處から見える限りを見渡し見廻りなどしながら、「大塚は見えなかつたかね。」
「大塚さんて……あの相場師の。」と、市之丞は土岐の首肯いたのを見て、「まだ御見えなさらない様です。」
「左様か」と、土岐は又四邊を見廻して、人待顔をして居る。

「吉ちゃんを見せに遣りませうか。吉ちゃん、お前ね、大塚さんを知つてお居てか。」

吉香は心得ぬ顔をする。

「いや、其には及ばん。」と、土岐は店に一人残つて居る千代松を見返り、「おい、千代松、お前も此處へ出て来ては何だ。」

「私は眞平。」と、千代松は笑ひながら横を向いた。

「おやッ、酷い愛想盡だな。」

「だッ、貴方の様に氣が多クツて、可怖い方の傍へは、何だか斯う。」と、肩を縮めて見せて、「私なんぞ見たいに内氣な者は、此處に居たつて領元が寒い様ですは。」

「全く土岐さんは悪黨なもの。」と、市之丞も相槌を打つて、「誰だつて貴方を可怖ながらないものは無。」

「お前まで其様事を云ふのか。」

「それは云つてよ。貴方は餘り酷いんだもの。新橋で、貴方に欺かされて酷い目に會はされたものばかりでも、膽斗あつてよ。千代ちゃんも其一人かも知れないは。おほ。」

「千代松なんぞに私が關係した事がありはせまいし……千代松、出て来んかよ。」

「眞平。」と、澄して居る。

「千代ちゃん、まア御出て。」

「さ〜。」

「千代松、覺えて居るが可いぞ。」
 「市ちゃんも氣をお付けよ。そりや旨いなだよ。」
 「私なんぞは疾に知つてるんだから、大丈夫なものぞ。」
 「よし、く。二人で種々な事を云つたな。」と、土岐は麥酒を一口喫んで、「吉香、お前酌をして呉れ。」
 「吉ちゃん、氣をお付けよ。」と、千代松が笑ひながら聲を掛けた。
 吉香は何かは知らぬけれども、麥酒の壺を取上げながら逡巡した。
 「ほ、ほ、ほ、吉ちゃん、能くお逃げだ。」

「おほほ、い、い。」

土岐一人を中に市之丞千代松が調戲つて居る處へ、大塚義三郎が彼植込の蔭から出て來た。

「土岐さん、此處に御居でましたかい。方々捜しやしたぜ。」

「あ、大塚君か。君よりも私の方が何程探したか知れやせんよ。此處でも随分待つて居た、なア市之丞。」

「知らないは。ほ、ほ。」

「これだ。大塚君、聞いて呉れ玉へ。何の遺恨があるのか、先刻から千代松と二人で、大いに私を苛められる風ですか。ねえ、大塚さん。」

「は、は、は、美人になら苛められても憎くありやせんな。」

「おほ、い、御様子の好い事を云つてらっしゃるよ。」
 「吉ちゃん、大塚さんへ麥酒を持って來てお上げ。御下物もよ。」
 「は、い。」と、吉香は店へ走つて行つた。
 松樹の蔭には、三之助が一層耳を澄して居た。

(三十六)

土岐は市之丞へ對ひ、「鳥渡用談が有んだから、お前等は彼方へ行つて居つて呉れ。」

「土岐さんと大塚さんとの御用談なら、おほ、い、何様事だか怪しいものね。」

「話らん事を云はんで、彼方へ行つて居らんか。」

「ぢやア、御用があつたら呼んで頂戴よ。吉ちゃんも出て。」

市之丞と吉香を店の方へ追遣つて置いて、土岐は大塚を傍近く牀几へ掛けさせた。

「此家の大將も大分悶いてる様だが、君の方の口は何様容子かね。」

大塚は頭を振つて、「流石の大將も運が傾き掛けちや駄目なもんでさア。如彼焦慮て來ちやア、到底

運の直リッこはありませんや。此度の炭礦株だつて、小一萬からの手紙を受けて居まさらア。」

「左様だらう。それだけ聞けば可いんだが……え、と、君には種々骨を折らせて居るから、何れ充分

お禮はするが、今後だつても、大將の駈引が知れたら、直ぐに知らせて貰ひたいもんだね。」

「それは能うがすがね、土岐さん。」と、大塚は小首を傾げながら、「お前さんは八十島さんが失敗な

さるのを、喜びでもなさる様に、私には思はれてならねえんだが……真逆其様事もありやすめえが、私には不思議でならねえんで。」

「いや、其様事が、何して君。」と、土岐の語調は平生と稍異つて、「其様事があつて可いものかね。私は君も知つて居らるゝ通、八十島さんには一方ならぬ世話になつて居るから、八十島さんの事だと云ふと、成功にしろ失敗にしろ、他人の事業とは思つて居らんのだ。それだから、君に依頼して、八十島さんの駈引を知りたいと思ふのだね。これは失敗ではあるまいか、見込違をして居られるのではあるまいかと、気が付く度毎に忠告して居る様な始末で……君も途方もない邪推をして呉れるではないか。いや、それも私が餘り思過ぎるからだ。過ぎたるは猶ほ及ばざるが如して、飛んだ邪推を招いたものさ。はい、あははい。」

大塚は尚ほ小首を傾げて居たが、聴て氣の毒さうに頭を掻きながら、「左様伺ひやすと、左様ありさうな事と思ひやすがね……。」

「君は商賈柄に似合ないで、中々堅固い人だから、大いに頼母しいのだ。」

「ふい、土岐さんに逢つちやア敵はない。全く人の噂に違はねえて……。」

「え、何だと云ふのかね。」

「なアにね、氣をお付けなさらねえちや、飛んでもねえ他人の批判を受けやすぜ。」

「なに、人の噂。」と、土岐は態と眉を寄せ、「人が何か私の事を。」

「そりやね、世間の口は煩擾えもんでね、お前さんの事だつて、悪く云ふ人が先づ七分で、善く云ふ奴は、左様さ、まあ二分通あるかなしだ。」

「ふうむ、善く云ふ人が二分……悪く云ふと云ふのは、何様事を云つて居るすかな。」と、土岐は態と何と云はうと氣にも掛けぬと云はねばかりの體を粧つた。

「左様さ。他の事は何でも能うござらア。唯困るなア、お前さんと八十島の御新造と……。」

「あゝ〜。」と、土岐も流石に周章た體で、「他の事と違ふ……人に聞かれても面白からぬ事を、少し低聲くつたつても話は聞こを様ぢやないか。」

「大きに左様だ。」と、大塚は莞爾して、「土岐さん、お前さんも氣をお付けなさるが能うがすぜ。世間に耳も口も無えと思つてちやア……。」

「解つた、後は聞かんでも宜敷。」

土岐が大塚の語を遮つた時、市之丞が店から、「あや、此家の御新造さんが……此處へ御出てなさる様だね。」

土岐も大塚も一齊見返つた。

(三十七)

お龍が此方を指して來るのを見るより、大塚は何と思つたのか、直ぐに牀几を離れて、

「土岐さん、私は又他を廻つて來やすから……ですがね、氣をお付けなさるが能うがすぜ。」

「え、何を。」と、土岐は態と解しかねた體を粧つた。

「解んなさらなやア其迄だが……私に關係した事でもねえのに、飛んだおせツかいてさアね。はい、はい。御免なせえ。」

大塚が立去る後姿を、土岐が覺えず溜息を吐きながら、険しい眼に見送る此方には、お龍がもう其處に來た。

「土岐さん、此處にお居てなすつたんですか。何様にお探し申したか知れませんかよ。」

土岐は振返つて丁寧に會釋を爲ながら、「左様ですか。それは済みませんでしたな。え、何か御用でせうかな。」

「貴方も本當に呑氣な事を云つてらッしやるはね、何か用かなんて。」と、お龍は牀几へ腰を卸して、「高畑さんも御入來なすつたんですし、貴方が御居てなさらなやア、お顔が揃はないぢやありませんか。」

「成程、左様でしたな。」

「成程左様でしたら……ほ、ほ、貴方今日は何か爲て居らッしやる様ね。」と、お龍は此時始めて店を見返ると、市之丞千代松吉香の三人が一齊會釋した。

「貴方も氣が多いのね。」と、お龍は小聲で、「市之丞が居るもんだから、此處に御興を据ゑてお了ひなすつたんでせう。」

「いや、飛んでもない事を。」と、土岐は徐かに牀几を離れて、「それでは參りますかな。」

「見付けられたもんだから……。」と、お龍も牀几を離れて、「御氣の毒でしたな、折角御樂の御邪魔を

しつ。

「まア何とても仰有るが能うがす。又御苦め申す時もありますからな。」と、土岐は歩を疾めか。

「お待ちなさいよ、土岐さん。」と、お龍は店の方を見返り莞爾して、「皆さん御苦勞です事ね。」

「い、え。」とばかりで、市之丞は他の二人と會釋をした。

「おつだね。」

市之丞はお龍と土岐の姿が彼方の植込に隠れた時斯う云つた。「千代ちゃん、彼の御新造なんだよ、

お前さんは何にもお聞きでないかい。」

「聞いて居てよ。土岐さんとの一件だらう。」

「左様。」

「だけでも、鳥渡意氣ぢやないかね。佳い容姿だはね。」

「全くだね。」

市之丞は誰も聞くものが無いと思ふので、遠慮なき高語聲は、三之助の耳へ筒抜けてある。

「御新造も何が不足だか知らないが、彼様土岐さんなんぞと馬鹿くしいぢやないか。」

「左様はかしも云へないやね。何處か好い處があるんだらう。」

「何處に佳い處があるものかね。随分酔興ぢやないか……おやッ、入らッしやい。」

松の木蔭を僅かに立出て三之助を見るより、市之丞は早くも聲を掛けた。

けれども、三之助は牀几へ近くてもなく、茫然と佇立して居る。

千代松は三之助が胸間に挿したリボンを認めて、『今日のお客様の中ぢやないのよ。』
『だけでも、好男子ぢやないかね。』と、市之丞は三之助を手招しながら、『貴方入らっしゃいよ。』と、
小聲になり、『本當に佳い様子だは。』

『市ちゃんがああ始めたよ。お前さんの惚ッぽいのにも呆れッ了ふよ。』
三之助の背後には前の大塚が來合せた。市之丞は斯くと見るより、『大塚さん、入らっしゃいよ。其
方も御一處に……吉ちゃん迎に行ッておいでよ。』

吉香は駈けて行く。千代松は市之丞の背中をぽんと打って、

『お前さん何かしやしなくッて、驚いッ了ふは。ほほほ……』
彼方には吉香がもう三之助の袖に搭付て居た。

(三十八)

吉香は三之助と大塚との袖を兩手に押へて、強いて牀几へ掛けさせて、

『市之丞姉さん、お連れ申してよ。』

市之丞は素人らしく頬を染めて、『能くお連れ申してね。千代ちゃん、お前さんもお出でな。』

『いやな事ッだ。』と、千代松は笑ひながら、『厚顔しく能く其機事が云へてね……自分一人て何でも
お爲なさいッて事だ。』

『能くお云ひだ。誰が頼むものか。』と、市之丞は吉香に下物を持せ、自分は麥酒を持ちて、牀几へ近き

ながら、『大塚さん、先刻は失禮してね。』

『それは私の方で云ふ事だ。度々お前さんの店を荒しちや氣の毒だね。』

『幾度入らしたッて可いんですは。度々入らしたッて下さる方が、私達は難有いんですよ……吉ちゃん、
其方へ御酌を爲てお上げよ。』

『は。』と、吉香は三之助へ麥酒を進めるのである。

『おほほ……』と、店から千代松が高く笑つた。

市之丞は見返つて、『膽斗笑つてお呉れ。千代松の情無やア。』

大塚は市之丞を見上げて、『大分揉める様だね。』

市之丞が答へるよりも前に、千代松が大塚へ聲を掛けて、『大塚さん、市ちゃんが其方へ岡惚れして
るんですからね、何卒取持て遣つて頂戴よ。』

『へへへ……』と、成程、左様云ふ次第で。』と、大塚は市之丞を見上げて、『お前が八杉さんに。』

『八杉さんと仰有るんですか。』と、市之丞は三之助を見ながら、『千代ちゃんが餘計な事を云ふんだ
よ。おほ……』

吉香に強い注がれた水壺に、三之助は僅かに口を付けたばかりで、盆に置いて了ッて、浮ぬ顔をし
ながら溜息を吐いた。

『八杉さん。』と、大塚は呼掛けて、市之丞を指しながら、『此婦人が。』

『あらッ、大塚さん。』と、市之丞は打消しながら、『千代ちゃんが好加減な事を事ッたんですは。ねえ

貴方。』と、三之助の方を見て、『私なんぞが其様失禮な事などを、ねえ。』

『おほほ、』と、千代松が又笑ふのである。

『満更虚構でもなさうだ。へへへ、』と、大塚も調戲ふ様に笑ふのである。

『あらッ、大塚さんまで……止して頂戴よ、極が悪いは。』

『もし、姉さん。』

三之助は何と思つたか、市之丞を呼掛けて、疑乎と其顔を見た。市之丞は全く顔を赤くした。

『あのう、今實は。』と、三之助は彼方の大樹の松を見返り、『實は彼處で聞いて居たんですが……お前さんと彼姉さんと面白そうに、』

『えッ。』と、市之丞は何かはしらぬが、胸に徹へる様な気がした。

『いえ、なアに、鳥渡聞さへすりや可いんですが、土岐さんと、其から御新造とか……何だか其様事が耳に入つたんですが。』

市之丞の顔色は變つた。

『姉さん、私は何も咎立をするんぢやないんだから、安心して話して下さいな。』

市之丞は何とも云得ぬ。

『もし姉さん、私の云つた事を、六かしく聞いて呉れぢや困るんですよ。』と、三之助は態と笑顔を

作つて、『土岐さんと御新造……御新造と云ひのは、あれは土岐さんの御新造の事ですか。』

市之丞は三之助が胸間に接待員の紀章のリボンを附けて居るので、八十島の身内の人と思つたので、

飛んでも無い事になつたと、體が顫ふのである。

『もし姉さん。』

三之助が又もや市之丞に問掛け様とした時、大塚は早くも遮つた——三之助が聞きたがる意事を察し得たからし。

『八杉さん、其事なら私が話して上げやせうよ。其の御新造と云ふのは、多分お前さんの叔母さん——八十島さんの御新造の事てせうよ。』

『えッ、私の叔母の事。』と、三之助は覺悟して居ながらも、今更の如く驚き呆れて、聽て恥しさに垂頭して了つた。

市之丞は三之助が八十島の甥であるの聞くと共に、其處に居堪れなくなつて、店へ逃返つて、千代松へ叫びながら眼を睜つて、三之助の方を見て居た。

(三十九)

大塚は三之助が羞しげに垂頭さ、而も心中堪へ難き苦悶に、顔の色蒼白め、噛まれた唇頭の顫へて居るのを見て、痛くも氣の毒に思ひて、近く三之助の隣に席を移した。

『八杉さん、私も他の噂に聞いたんだから、屹度左様だ、ア云へやせんがね、お前さんが其様に心配して居なさるのを見ちやア、知らねえ顔を爲ても居られねえから、話す事は話しやすが……手證を押へたと云ふんでねえから、其積で御聞きなせえよ。』

「へい、それはもう、お前さんへ御迷惑を掛ける様な事は致しませんから、何卒御話しなすつて下さい。」と、三之助は耳を大塚が方へ寄せながら、其顔を疑平と視た。

大塚は首肯しながら、「考へると、八十島さんが實に御氣の毒でならねえ。私や相場師だ、稼業が稼業だから、眞面目な商賣を爲てえる人達と同じには、どうも世間で見て呉れねえ。だがね八杉さん、お前さんも知つて居なざる通、八十島さんには随分お世話になつて居ますア。随分御損を掛けた事もありやしたが、大腹中の大將だから、何時しか一度可厭顔をなすつた事はねえ、私は實に大將にばかりは威服しつた。用せへありやア私を使つて、以前に異らず大塚くつて云つて下さるのが、私や嬉しくつてならねえんだ。大將の爲になら、火水の中へも飛込む氣で居やすから、大將の顔の潰れる様な噂を聞いちやア、とても黙つちや居られねえ。だがね八杉さん、他の噂ばかりで、確とした手證も見ねえて、眞逆大將には云へねえ。何したものと、實は氣を揉抜いて居た處でさア。」

三之助は我知らず措寄つて、「そつ其、其叔父へ云へないと云ひなさるのは、其は何様事ですか。手證を押へないからとは、其は誰の事をお云ひなさるのか、何卒其を私へ。」

「無論話してお聞かせ申す積でさア。」と、大塚は四邊へ氣を配りながら一入小聲になり、「他の噂だから、必らず間違が無えたらア云へねえが……八杉さん、八十島さんの御新造と土岐さんと道ならねえ……。」

「全くの事てせうか。」と、三之助は覺えず意氣込んだ。

「さア其處が人の噂だから、手證を見ねえぢや判明とは云へねえが……左様さね、私ばかりの思惑で

は、七分迄は……左様さ。」と、大塚は語を斷つた。

「左様でせうかねえ。」と、三之助は太息を吐いて、「あ、飛んでも無い事が出来たものだ。」

大塚は首肯さ、「全くでさ。土岐の野郎は論外だが、私にや御新造の氣が知れねえ。何一つ不足があらうと云ふんぢやなし、好自由に爲て居ながら、旦那の顔を潰す様な事を爲なざるア、私や實に解らねえ。」

「何卒間違であつて呉れ、ば能う御在ますが。」

「私も左様は思つて居やすが……八杉さん、九分九厘迄は世間の噂に、團扇を上げなきやなりやすまひせ。」

「實に困つた事になりましたな。」と、三之助は唯もう當惑しきつて居る。

「八杉さん、そればかりぢやねえ、土岐の野郎には、餘程氣をお付けなせえよ。大將が寄付けねえと可いんだが。」と、大塚は鐵舌をしながら、「私も氣を付けやすが、お前さんも油断をしねえて、好機がありやしたら、大將へ土岐の野郎は寄付けねえが能うがすと、お前さんから云つた方が可かアねえか知ら。」

「左様ですな、好機があつたら申しませうよ。」

「ヤッ、誰か来た様だ。」

「左様ですか。」

三之助が牀几を離れた時、今日の來客が四五人、此洋酒店をさして來たのであつた。

(四十)

午後の五時頃には、園遊會の來客も多くは辭し去つて、残つたのは松矢大臣に高畑局長、片桐代議士土岐頼夫の四人となつて了つた。接待の爲に聘ばれて居た藝妓等も、大方は暇を與へて、市之丞等の三四人を留められたに過ぎぬ。それも密談の後の、夜櫻の宴に侍せしむる善て、待合の一間に押居められたのである。

日は既に暮れなるとして、八日ばかりの月は谷中の釋迦杉の梢頭に上り掛り、櫻の花の散る色も見えて、何時か地上に幾片かの瓣を印して、晝間の騒がしかりとは變つて、如何にも物寂しげな景色である。

高畑 山林局長はお友に案内されて、庭内を此處彼處打廻りながら、彼洋酒店の跡へ出て來た。座布團こそ除かれたが、牀几は尙ほ其儘に置かれたので、高畑はやをら其に腰を卸した。

『お敷物を。』

お友が彼方へ行かうとしたのを、高畑は早くも呼留めて、

『いや、其には及ばないです。鳥渡足を休めるばかりですから、敷物などの必要はありません。それよりも、貴女も此處に掛けては何です。』

『はい。難有御在ます。ですけども、お敷物も無い處へ餘り失禮で御在ますから。』

『いや、全く御心配は御無用に願ひたいので。さ、此處に御掛けなす。』

『それでは……』と、御免下さいましも口の中、お友は牀几の端に腰を掛けたが、如何にも極悪げに見受けられた。

高畑善也は年季三十五六、色白く眉濃く、きりりと外眦に威があつて、鼻も高く鬚も美しく、人を見る時に唇を噛む癖があるけれども、五ツ紋の黒の鹽瀬の羽織に仙臺平の袴を穿いた處は、兎に角も美丈夫である。林學博士の肩書を得る爲に、獨逸に留學すること五年間、流石に交際術には得た處があるらしく、お友へ對しても、充分意を用ゐて居る事は其語調にも知らるのである。

お友は髪を出し前を膨らした束髪に、水淺黄のリボン、黒地に襷模様のある紋付の二枚襷、緋の帯を立矢の字に結んで、袖を長く折柄の風に弄ばせた風情は、云ひ知らず氣高く見受けられた。色の白い上に鉛粉を塗り、眉にも口紅にも心を用ゐただけに、平生にも勝して顔がくつきりして居る。些し嬌羞を含んで、つゝましげに牀几に掛けて居る容姿は、尠からず高畑の意を惹いたらし。

『貴方は確か、お友さんと仰有るのですな。』

『はい』と、お友は口の中。

『お姉さんのお名は、何とか仰有つたてすな。』

『姉で御在ますか。綾と申します。』

『お綾さん……お綾さんと仰有るのですな。』

高畑が姉の名を二度まで繰返したのが、お友には自分よりも姉の方を重く見て居るのではあるまじか、何だかいやな心持がした。

27の37

「お幾歳に御成りですか。」

「姉の歳で御在ますか。」

お友の語調が何となく流れて居たので、高畑は早くも其意中を覺つたのか、微笑を含みながら、

「いや、貴女の御歳を伺いたいです。」

「私」と、お友は鼻白んで、「私もう十七になりましたの。」

「御十七……左様ですか。姉さんとは四ツ位もお違ひなさうかと思つたですが。」

「姉の歳を御存じて居らして。」と、お友は顔色を變へて居る。

「いや、思も掛けぬ事で、私が御姉さんの御歳を知つて居らう筈が無いです。唯御見受申した處で、

御二人の間に其位な御違ひがありはせぬかと、不圖思つたのですが……違ひましたか。違つた處で、三

歳は必らずお違てせうな。」

「はい、二歳違て、姉は十九で御在ます。」

「十九に……左様ですか。それでは、お友さんの方が御損だ。いや、御損と申すよりは、寧ろ御徳

と申す方かも知れませんか。はい、はい。」と、高畑は高く笑つた。

お友は何だか嬉しい様な氣がして、覺へず高畑の顔を見ると、高畑も凝乎と自分の方を見て居たの

で、急に一入羞しくなつて、垂頭して了つた。

花明で尙だ明るかつたのかも知れぬのに、月はお友の顔に其清い光を浴せかけて、色は愈よ白く、

風情は一入其艶さを加へた。

(四十一)

高畑は月の清き光を浴びて、一入風情を勝したお友の姿に、少時見惚れて居た様であつたが、應て袂から紙巻袋入を取り出しながら、

「お友さん、今でも學校へ行つて居てはいますか。」

「はい、梅花女學校へ通つて居ります。」

「梅花女學校と申すと……駿河臺の、成程。お綾さんも御一處ですか。」

「いえ、姉は學校へは参りません。」

「左様ですか。もう左様でせうな。十九にお成りでは、既に卒業なさつた時分てせうな。」

「いえ、姉は學校は可厭だと申しまして。」

高畑は眉を擡めて、「學校はお嫌ひ、それでは何か藝事でも。」

「いえ、琴も三味線も……音楽などは出來ないからと申しましてね、何にもお爲ではありませ

ん。」

「音楽もお嫌。併し、何か御得意な物があるてせうか……何を最もお好みますか。」

「姉で御在ますか。」

「左様」と、高畑は既に火を點けた紙巻袋の灰を指頭でぼんと弾き落して、「何か御好きな物があるて

せう。人は樂なしには、生きて居る甲斐が無いてすな。」

お友は高畑が何故此様に姉の事を聞きたがるのか、何も聞くには及ぶまいのに思ふと、常よりも一入姉の名を繰返さるゝのが可厭で、もう止して呉れ、ば可いにと、嫉ましい様な、腹の立つ様な、胸の中はもや／＼して居るのである。

『母なんでもお綾さんは偏人だからと申すんですもの。』

『偏人、それは可愛相だ。』と、高畑は小首を傾けながら、『偏人などと、其様御様子には見受けられませんが、如何にも温和しやかで、沈着して居て、氣品の高きうな……私は斯う思つて居たのです。』

『でも、母は左様申して居ります。』と、お友が樂からぬ心の中は、語の調子と、顔を赤めて、眼に光がさうたのとて、高畑は早くも讀得て、

『御合母さんが左様仰有るかも知れないが、私は貴女もお綾さんも能も揃ひに揃つて居てなると、大に感服して居るのです。お友さん、私には女の同胞が無いものだから、貴女やお綾さんに御目に掛つて、實に羨しいと思ふのですな。貴女ならば尙更だが、お綾さんの様な姉なり妹なりが……まづ妹にですが、一人で可いからあつたならば、平生何程家庭の樂が深からうかと思ふのです。御存じの通り、いや貴女は未だ御存じてないかも知れないが、私は今日尙ほ獨身で、家族と申す者は、母に弟の國に居るのが一人、唯此だけです。』と云つて、お友にも聞える程の太息を吐いた。

『左様、如何にも淋しうござります。』

『早く奥さまを御迎へ遊ばしたら、宜敷く居らッしやいませうのに。』と云つて了つてから、お友は酷く極が悪くなつて、赧めた顔を俯向けた。

高畑は莞爾して、『大きに難有う。在様云つて下さるのは貴女ばかりではないですな。友人などにも往々勸めて呉れる者があるですが、私は事情があつて、生涯妻を迎へまひ、獨身で通さう、いや通さねばならぬ事情があるのです。』

『まあ。』と、お友は不思議さうな顔をして居る。

高畑はお友の顔を凝平と見て、『お友さん、貴女が不思議に思はれるも無理はないです……お話を致しませうかな。私が生涯妻を迎へまひ、獨身で押通さうと決心した事情を……貴女やお綾さんに御目に掛つたので、私は其當時を想起して、實に情に勝へない……お友さん、貴女は私の懐舊談を聞いて下さるですか。』

『はい。』とお友は高畑を見ると、全く何事か思出して居る様で、愁然たる面を背向けて居た。

(四十二)

『貴女やお綾さんに御自由に掛つたのが、實は私の不幸で、漸く忘れて居た昔を又思出して、何とも云へん心地が爲て居るです。』

高畑は一入お友の同情を得たいと思ふらしく斯う繰返して、再び深く嘆息した。話を繼いで、『お友さん、私が獨逸の都に留學して居た頃の事です——左様さ、今からもう十二三年

前の事ですが、私が下宿して居た家に、二人の娘があつたですな。下宿屋と云ふのではない、素人家の瑞穂さんの家でしたが、姉妹の娘があつたですが、……其間の事を委細くお話しする必要はありませぬから、唯私共其内の一人と、互に相愛して居たと云ふだけに止めて置きます。而して、私共今日尙ほ妻を迎へないで、いや生涯無妻で獨身で通さうと決心して居ると申したら、その間の消息は大概御推測下さるだらうと思ふのです。此だけ御話致せば、私が貴女方御姉妹に御目に掛つた爲に、其當時の事を思浮めて、傷心に勝へないと申すのも、無理で無いと思ひ下さるでせうな。」

お友は其様子に多少同情して居るらしくも見えたが、其よりかも高畑と其姉妹の内一人との情事を聞きたい様な氣がするのだ。けれども、其を御話し下さいとは云へぬから、高畑が重ねて如何に其話頭を進めるかを待受けて居た。

高畑は懐愛げな眼をなし、凝乎とお友を見ながら、「お友さん、失禮ですがな、貴女が其姉妹の妹に如何にも能く似てお出でだ。宛然其人に對して居る様な氣がするですな。」

お友は自分が其妹に似て居ると云はれて、深く顔色を染めたが、此時は既に全く暮れて了つて何時しか月が朧になつて、瞳子と瞳子と見合せられる様な明るさで無いから、羞しさも多少は忘れられ、低い聲の淀みながら、

「私なんぞが何して其方に……彼地の人は、色が白くツツて肌理が細かだと申しますから、私の様に色が黒くツツて……。」

「いや、左様でありませぬな。お友さんは日本人としては珍らしい程、お色が白いですな。お綾さんと

雖も、色の白い點は一步貴女へ譲らんければなりません。貴女は其通色が白い上に、お歳は十七だから、彼妹に比べると二三段は確かに勝つて居る。尤も其少女は其時漸と十四歳、いや十三でしたかな、矢張十四でした、唯仇氣くて愛らしかつたと云ふだけの事で、お友さんの今の御様子には到底及ばないです。お友さんなどが彼地に居られ様ものなら、それこそ美人の中の美人、交際場裏の女王たるは譯もないですな。」

「ほ、ほ、ほ」と、お友は極が悪くて態と笑出して、「御戯言ばかり仰有るはね。」

「いや、全くの事。」

「お友さん。」

お友は高畑の語を御世辭だとは思ふけれども、勿論悪い心地はせぬ。けれども、其自分へ似て居ると云ふのは其妹の方、而も歳が十四であつたと聞くと、高畑をして生涯無妻で暮らさうと迄思はしめた其相手は、其姉の方である事は知れ切つて居る。何も自分に關した事ではなく——自分が其姉の方へ似て居なければならぬ事は無いけれども、何だか物足の様な氣がして居る。

「其様御戯言なんぞ仰有らないで……其姉さんの方は何かなすつたんですか。」

「左様、其を御聞き下さると、私は實に斷腸に勝へんのです。……高畑はお友へ聞かせる様に溜息を吐いて、其婦人は私が歸朝する少し前に、病死したのです。其病の原因と云ふのが……私が歸朝せんければならぬ事になつて、左様と話した時から、終に空しく不歸の人となつて了つたのです。お友さん貴女は何と聞いて下さつたか知れんが、私に取つては實に何です……生涯無妻で通さうと決心せ

しめたのは、無理ではありますまいな。

『全くですはな。其様に情の深い方ですから、貴方が左様思召すのも、御無理ではありませんは。』
『お友さん、貴方も左様思召して下さるですね。併し、』と、高知は聲に艶を含んで、『併し、私の決心を翻へさねばならぬ様になりはせまいかと、私は今日始めて私の意の動いたのを覚えてすな。お友さん、私の心は確かに動き初めて、お綾さんと貴女に御目に掛つた時から、私は左様感じて居るのですが……併し、此は貴女だけへの御話ですから、御他言は御免を被りたいですな。妙な事を云ふ男だと、貴女は定めし可笑しく思つてお居てせうな。は、は、は、は、。氣に掛けて下さらん様に。』

お友は何と思つたか知らぬが、返辭をしなかつた。
折から簾を焚し始めたのか、植込の彼方にはッと火が焚上つた。

(四十三)

高知は簾の方を見返りながら、『お友さん、彼簾を焚いて居られる處は、先刻の座敷の庭前らしいですな。』

『は、貴方も彼方へ御出て遊ばしませんか。先刻から大分長い間、此處に居らっしゃつたんですから、皆さんが待つてお居て下さるでせうよ。』
『大きに左様です。そろ／＼参りますかな。』

と、高知は牀几を離れ様としたが、又腰を落して、『夜櫻を拜見するのも結構ですが、もう少し貴女とお話を致して居る方が、私には却つて愉快です。何ですか、今少時御話し下さらんか。』

『はい、私は何方でも可う御座んですが、大臣さんや土岐さんなんぞが。』
高知は早くもお友の話を押へて、『いや、誰か迎に見えてせうから、其迄靜かに御談話を願はうてはありませんか。』

お友も否では無いらしく、何とも云はなかつたが、牀几を放れさうにはしなかつた。
高知は其顔がお友に見えたら、恐らく微笑を含んで居るらしい様子で、『お友さん、お綾さんと貴方と御同胞はお二人きりでしたな、確か。』

『はい、姉と私と二人ツきり御座います。』
『それである……』と云ひ掛けて、高知は話を切つた。何と云ふ積であつたか、お友は聞きたいと思つて、話を繼ぐのを待つて居た。

『お友さん。』

『は、』
『貴女は定めし、私の今夜の談話を、無遠慮だと思つたでせうな……初めて逢つただけで、今夜の様な話を致したのは、而も御婦人へ對して差向で、今更汗顔の至です。』

『さ、え、其様事はありません。私は決して悪くは思ひません。其御死去なすつた方が御氣の毒でなりません。貴方が其程に思召して……實に御氣の毒でしてね、生意氣だと思召すか知れませんけ』

れども……。」

『いや、何を仰有つても生意氣なぞとは思ひません。』

けれども、お友は黙つて了つた。

高畑は促す様な調子で、『今の御語では、貴方も大いに同情して下さつた様ですが。』

『はい、生意氣な事を申します様ですが……其程思召すんですから、其方も嘸ぞお嬉しい事だらうと、お察し申すんですよ。』

『難有う。ですが、死んで了つたですから……』と、高畑は態と聲を曇らし、『いや、今更繰返すのも恐に近いですな。兎に角、私は今夜程満足を感じた事は無いですな。お友さんが私へ同情して下さつただけで、非常に満足しました。お綾さんも恐らく……お友さん同様に同情して下さらうと私は私かに信じて居る。何卒御序の節に——お話のお序に、お綾さんへ話して下さつても差支はないですよ。』

『は。』とは云たが、お友の語調は淀んで居た。

『お綾さんの御歳は、十九とか申す事でしたな。お友さんが十七で……確か左様でした。』

『私などはもうあかんですな。三十を越しては……三十五歳に成つたです。』

『左様で居らっしゃいますか。』

『はい。お綾さんとは十六違ひますな。お友さんとは十八……まづ親子ほど違つて居るすな。いや、老たる哉です。は。は。』と、高畑は高く笑つたが、其聲が如何にも淋しげであつた。

お友は高畑の意中を早くも推したけれども、お綾へであるか、自分へであるか……お綾へなら嫉ましいが、自分へであつたにしても、何と云ふ感は尙だ起つて居るのではなかつた。

高畑が尙ほ語を繼がうとした時、植込の蔭から咳拂をした者がある。

お友は覺えず、『阿母さんですよ。』

『なに、御令母が……さア彼方へ参りませう。』

高畑は先づ牀几を放れた。お友も植込の方へ急いで二三間歩寄つたが、咳拂も先の一聲の外聞こえず、人らしい影も認められなかつた。

(四十四)

夜櫻の宴は既に開かれ、來客の席に列なりたるは松矢農商務大臣に代議士の片桐房元、亭主役としては八十島大助、土岐頼夫は萬事八十島を扶けて、主客の間の周旋役を以て自ら任じて居るのであつた。

庭には八杉三之助が箒を焚初めて、火光の梢に映じた様は、櫻花の艶なる色に一入の色を添へて、

云ふ可からざる風情がある。

松矢大臣も至極の興を覺えて、御機嫌斜めならざる様に、主人の大助も私に満足して、尙ほ此上の興をも添へ、一入大臣の歡心を得ようと意を用ゐて居る。

松矢は土岐へ對ひ、『先刻から高畑が見えん様ぢやが、何時か歸りよつたらうか。』

「いや、其様な事は御座りませうまい。庭内を二巡見て来ようと申されて……其に致しましても、餘り御遅い様で御座ります。私がお探し申して参りませう。」
土岐が坐を離れ様とするのを、松矢は呼止めて、「いや、もう戻りよるぢやらうから、態々探されんても可か。」

「左様で御在りますか。併し」と、頼夫はお綾と共に給仕の爲に、其處に侍して居たお龍へ對ひ、「何か鳥渡お迎に上げて下さる様に。」

お綾が立たうとするのを、お龍は目顔で押へて、「私が参るから、お前さんはお傍にお居てなさい。」
大助も「綾、松矢さまへ御酌を致して上げぬか。」

「はい。」と、お綾が松矢の膳の前に進寄る中に、お龍は徐かに次室へ滑り出た。

松矢大臣はお綾の顔を熟と見て、「酌を頼むかな。」と、三鞭の杯を舉げ、酌をさせて一口飲み、「土岐さん、此何は八十島氏の愛嬢の様に承知してあつたが、左様ぢやろな。」

「はい。御意の通で御座ります。」

「ふーむ、中々美しい御生ぢやね。」と、松矢が又お綾の顔を凝視めたので、お綾は可怖い様で下を向いた。

「今一人。」と、大臣は土岐を見て、「先刻今一人見えた様ぢやが、彼も八十島氏の御秘藏ぢやろの。」

「は50」

「八十島さん、佳い御子持ぢやな。」

「いや、恐入ります。何れも女子ばかりで、何の役にも立ちませいで。」と、大助は手を揉みながら會釋をした。

「いや、二人とも御容色が佳えから、御樂みぢやな。どりや、もう一杯お酌を頼むかな。」と、松矢は又杯を重ねた。

松矢大臣は五十歳を五つ六つは越えて居るらしく、赭黒い顔を、半白の頬鬚に半埋めて、圓に太く鋭い眼に、勉めて優しき笑を浮めて居るらしい。けれども、身材高く而も肥満つて、フロツクコート

を豊かに穿ち胡坐を組んで居る様子が、お綾には大山が轉び出したかとも見えるので、父の大助を此上なき大男と思つて居たのに、上には上があるものと、唯可怖しい氣が爲て居るのである。

片桐は庭前の篝火の梢の花に映つた面白き風情を、頻りに眺めて居たが、此方を見返ると共に、思出したと云ふ風で、
「高畑局長は未だ見えないう様ですな。何されたのでせうか。」
片桐が語の終るか終らぬに、「いや、どうも失禮しましたな。」と、斯う云ひながら入つて来たのは、高畑善也である。

「サア、何卒彼席へ。」と、土岐は立つて迎へて、松矢の次に設けて置いた席へ高畑を請じた。
「餘り高上りの様ですが、失禮します。」と、高畑は一座へ會釋して、其席に着いた。

松矢大臣は今高畑が入つて来た時、其後に従いて来たお友を早くも認めて、其が退き去らうとするのを見るより、

『あ、これ。』と、早くも呼止め、『お前さんも此方へ御座るが可か。土岐さん、此處へ呼うて呉れんかの。いや遠慮せんでも可か……ははは。』と、劣らず美しいお生ぢやな。お前にも一ツ酌爲て貰はうかの。』

お友も松矢の様子には畏怖を懐いて居るから、三鞭の瓶持つた手が頷へて居た。

高畑は傍から、『遠慮なさる事は無いですよ。後で私へも願ひますかな。』

土岐は早くも、『お綾さん、局長さんへ御酌を。』

『は。』

お綾が高畑の前へ膝を進めた時、お友は松矢の酌を了つて、直ぐに高畑へ向つて瓶の口を向けた。

お綾には何の心もあらう筈は無いが、お友は早くも競争の念を發して居たらしい。

『これは憚でした。』と、高畑は杯を口へ持行きながら、其眼を凝平とお綾へ注いで居た。

お友は嫉ましげにお綾を見返ると、此は伏目になつて、身動きもせぬ。

松矢は二女へ目を細らし、『高畑、可憐ぢやないかのう。ははは。』

『左様で御在ます。何れも月花の美しさを御在ます。』

『大きに左様ぢやのう。』

片桐も傍から、『私も御酌を頼みますかな。』

お友は手近でありながら、見返る氣勢もなかつたが、お綾は直ぐに片桐の前へ進んで、

『はい、御酌を致しませう。』

『これは難有い。』と、片桐は望んで麥酒を注いで貰つて、一氣に飲干して愉快さうに、『もう一杯願ひますかな。』

『はい。』と、お綾は又酌を爲て、其儘其處に落居りて了つた。可怖い大臣さんの前を漸と脱れたと、内心嬉しく思つて居るかも知れぬ。

お友は又高畑の眼がお綾に附いて廻る様に思はれてならぬ。彼様に姉さんばかしを見て居らるゝ處を見ると、獨逸の都とやらの、高畑さんの相愛つた娘さんと云ふのは、姉さんに似て居たのに違ひない。でなくつて、彼様に姉さんばかしを見らるゝ事は無い筈。姉さんは成程美しいけれども、私だつても其様に劣る積ではない。阿母さんは姉さんよりお前さんの方が、愛嬌は深いし、顔がさへさへして居るしつて、お云なさるんだのに……などをとまで思つたりして、やきもきして居るのである。

松矢大臣始め高畑片桐等も、大分酌酌の氣味で、如何にも愉快らしく見受けらるゝので、八十島大助も大いに満足したらしく、臨席の土岐に對ひ聲を私めて、

『今日は非常の御配慮で、萬事都合に参りさうで、大いに安心しました。就いては、例の御相談は何したものでせうか。大臣さん御始大分御酌酌の御様子ですが……成る事ならば餘り亂れぬ中にと、斯う思ひますが、如何でせうか。』

『はい。成程、大きに其邊もあるてがすな。能うがアす、片桐さんへ内々話します事に。』

土岐は杯を持つて片桐の前へ行き、献酬の間に其意を通じると、片桐は心得て隣席の高畑へ耳語した。

『いや、其は御心配には及ばぬ。土岐さん、鳥渡此へ。』と、高畑は土岐を呼んで耳語した。

『は、は、成程。』

土岐が高畑から聞得た處は、大臣にも疾に含んで居られるから、萬事は自分から相談する様にとの命である事、同席では却つて細密に渉る相談の出来兼ねるから、大臣をば別席へお移し申した上の事にと云ふのである。て、其意を片桐へも八十島へも通じて、大臣を別席へ移す準備に取掛らせた。其準備も自分が御新造と相談してと、土岐は早くも次へ退いた。

(四十六)

三之助は世間は何の用とては無く、來客の間を彼方此方周旋顔に歩いて居たばかりで、寧ろ退屈した程であつた。唯ち友の酒店で土岐と叔母お龍との上に就いて、大塚から聞得て以來、兎角其事が氣に掛つて、大塚の云ふ如き事が果して二人の間にあるとすれば、眞に容易ならぬ事で、叔父の顔は消れる、八十島の家名は汚されるのだ。土岐と云奴は、平生から氣に喰はぬ奴、何か悪い企を爲さうな面だと思つて居たが、果して此様事を仕出來した。叔母は——叔母と呼ぶのさへ屑くない——出身が賤しい上に、平生の氣質が氣質だから、今更あり得可からざる事とは思はぬ。斯る男女が相會ふ上は、何事か仕出來さずには居まい。或いは大塚が云つた様な事であるかも知れぬ。けれども、大塚とても

確と見定めた事があると云ふのではなく、世間の評判が劇しいから、注意する様にと致して呉れた。けの事、果して左様とは決し難い。何か左様でなくて呉れば可いけれども、萬一世間の噂に違がなかつたら、其時は何して呉れよう。直ぐに叔父さんへ御話して……叔父さんの事だから、直ぐに追出してお了ひなさるに違ひない。追出して下されば、其に勝した事は無い。在つて害になる女だもの、追出して下へば八十島家の萬歳——お須賀叔母さんも歸つてお居てなさる。お綾さんが背賣らるゝ事もなく、自分とても心を廣う御世話になつて居られる。此處を思ふと、何か不都合を爲て居て呉れば可い。其方が雨降つて地固まるの盛。全く八十島家の萬歳を唱ふる時節が到來するのだけれども……いや、左様ばかりも云へぬ。今叔父さんには非常な御心配事がある。銀行も會社も其他にも御困難の御事情があらなさるのに、其様事からお龍を放逐なさる様な事になると、叔父さんの顔は潰れる、御信用にも關係しよう。二人の奴等も——彼様奴に限つて廉耻と云ふ事を知らぬから、自分の恥辱は棚に上げて、叔父さんの害になる様な事を、世間へ觸れて歩くに違ひない。必らず左様に違ひない。左様なつたら、叔父さんの御爲には實に容易ならぬ一大事——八十島家の破滅、と迄はなくとも、何様な事にならうも知れぬ。其様事になつて何なるものか。何卒大塚の云つた様な事——世間の悪い評判が虚構であつて呉れば可い。縦しお須賀叔母さんが御歸りなさらなくとも、お綾さんが背賣められようとも、叔父さんの信用、八十島の家には代へられぬ。一つが善ければ一つが悪く、あゝ何したものであらうかと、私かに胸を痛めるのみであつた。

櫻花の下に簾を焚きながら、藤圍の蔭から私かに差覗くと、松矢大臣高畑局長、片桐に土岐、叔

父の大助等が、座敷で酒宴の様が能く見える。お綾お友等が給仕せる様も能く見える。人々の一舉一動が手に取る如く能く見える。大助が始終手を膝にして謹慎めるさま、松矢が大臣の威を恣まにして傍若無人なる、高畑片桐等が得意らしき、土岐が輕薄なる笑聲に座を賑はせるなど、其人々に依つて三之助に與ふる感動は同じからねども、兎角は面白からぬ方へののみ傾いて居た。

「叔父さんは今夜の此宴會で、差當つた困難を切抜け様と思つて御居ての様だが……何卒其甲斐があつて呉れると可いなア。」

三之助が斯う呟いた時、簾の火光の通かぬ、遙か後の方より、人の呼ぶ聲が爲る様である。

「誰か呼んだ様だつたが、」

三之助が疑乎と暗き方を視詰めた時、又其名を呼んだ。今度は確と其聲を聞き得て、其お大なる事が知れたから、彼方の人々の目障にならぬ様、意を用ゐて暗き方へと歩み寄つた。

「三さま、鳥渡く。」

「お大かい。何だね。」

「鳥渡此處まで入らッしやいまし。」

「お前一人かい。」

「はッ。」

三之助は何かは知らぬけれども、お大に呼ばるゝ儘其傍へと歩み寄つた。

(四十七)

三之助はお大の立つて居る木陰に辿着いて、

「何か用でも出来たのかね。」

「いゝえ、左様ではありませんけれども、お腹が御飢さ遊ばしはしませんか。」

「飢かない事もないが、我慢の出来ない程でもないよ。」

「無どお飢さなすつたてせうと思ひましてね、」とお大は何やら手に持つて居る物を見せて、「御口取のそっくり手の着かないのがありましたから、其に御博飯を添へて持て参りましたよ。ほんの一時の御凌ですけれどもね、此でも食上つて居らッしやいまし。」

「左様かね、それは難有う。」と、三之助は手探に其物を受けると、小さいながらも重みのある折詰め

である。

「それに、お寒くは無いかと存じましてね、小さな燗ですけれども、お酒も持つて参りましたよ。」

「左様かね。何も濟まない。火焚を爲て居るんだから、些とも寒い事はないがね、何だか斯う淋しい

様で、」と、三之助は覺えず身振をして、「それがあれば大いに助かるよ。」

「本統に御氣の毒さまですねえ。入杉さまの若旦那様が席間の中にも入んなすつて、火なんぞを焚い

て居らッしやるッて事が、」とお大は鼻を詰らして、「私は此處から伺ひましてね、覺えず涙が溢れま

したよ。」

三之助は少時黙つて居たが、『なアに、叔父さんの爲だもの、火焚を爲る位何でもないので。お前の親切は、決して忘れなさいよ。』

『あらッ、其様に仰有つて下さいますと、私は御挨拶に困つちまひますよ。それでもね、難有い事には、今日は綾さまが平生の様でも無く、さへくとして居らッしやいますのに、何一つ御籠相も遊ばさないで、鶴の目鷹の目の中を、何か斯か今迄お濟遊ばしましたから、此様難有い事は無いと、私は實に嬉しう御座います。』

『お前の云ふ通だ。今朝の事があるから、彼繼母どのが何様陥穽を作らへるかと思つて、私も實に心配したが、まア何事も無く結掃だつた。此と云ふのも、お前が傍から注意が届くからだ。』

『あら、勿躰ない、私なんぞは何の役にも立ちませんけれども……』と、お大は斯う云掛けたが、遙かの座敷に目を放さなかつたのか、『土岐さんがお座敷をお出なさる様で御在いますよ。私も參つて居りませんと……』と、正宗の小堀二本を三之助へ渡して、『私は彼方へ參りますよ。』

『それが可い。尙ほ充分注意して呉れる様にね——土岐さんが行ッたら尙更だ……少し譯があるのだから、此迄よりも別して注意してお呉れよ。』

『はッ。』

『お前のお蔭で助かつたよ。』

『あれ、彼様事を。ほッほ。』

お大は木の間を潜つて行つて了つた。

三之助は又もや藤圍の中へ入つて、薪へ薪を加へながら、

『全くお大の云ふ通だ。叔父さんの爲だと思ふから厭はない様なもの、八杉の伴が櫻花の下で火焚を爲て、酒宴の興を助け様とは……まア此でも温める事にするか。』

酒壇に火の氣を受ける様に、兎角工夫せし後、折を開いてお大の好意に指を染めながらも、尙ほ吐かるゝものは感慨の太息であつた。

三之助が二本の小堀を倒した頃まで、座敷に土岐の影が見えぬので、不圖疑念が發つた。大塚に開いた事が若も形のある事ならば……今まで何を爲し居るのか。餘處ながら様子を窺つて見るのも……斯う思立つと平生は小心なるにも似ず、多少の酒氣さへ帯て居るから、そろく藤圍を脱出し木の間を幾度か潜つて、此別荘の茶の間の方へ行かうとすると、數寄屋の中に人の聲が——ひそひそと談らう人聲が聞こえたので、覺えず歩を止めて、眼に力を入れながら耳を澄して、私かに様子を窺つた。

(四十八)

三之助が端なくも數寄屋の内に聞き得た話聲は、土岐とお龍とであつた。此處に席を設けて、大臣松矢を請じ入れ様と、二人で其準備を參て居るのである。お大お辨等に命じて、指圖さへすれば濟むのであるが、大臣さんへの馳走を召使などの手には掛けさせられぬと、彼等に運ばす物だけは運ばせて置いて、後には二人で其準備をして居るのであつた。

お龍は小聲で、『例の御相談とかは、何様鹽梅式ですかね。』

『それは尙だ分らんのですかよ。此から其協議を致すので、結果は何なるてせうか……先づ七分迄は成就致す見込てがすが。』

『旨く参ると、貴方は御都合が可い様に云つて居らっしゃったから、何卒好い御相談に成れば可いと、私も蔭ながら心配してゐるんですよ。』

『いや、大概好都合に運ぶ事を信じますよ。今日の響應は、大臣も大分満足して居られる様ですから、まあ安心して御居てが能うがす。此處の準備は充分ですから、直ぐに大臣をお連れ申しませう。此からの御取持は、貴女が別して腕を揮つて下さらんければなりません。それに、お友さんとお綾さんと……大臣がお二人を大分思召に合つて居る様でがすからな。其處は貴女が何とかな、御一處にさへ御居てなされば、間違などのありさうな事はありません。市之丞や千代松なども此處へお呼びなすつて、出来るだけ大臣の御機嫌をとるが可いてがす。貴女が例の御口前でさへ御出なさりや、松矢さんなど何でもないてがすよ。はははは。』

『あほ。私の口前ですつて。戯言をお云ひなさいよ。私よりも貴方の口前に逢ちや、誰だつてもころりとしなない者は無いんですよ。左様く、先刻市之丞と千代松に大層いぢめられて居らっしゃったつて云ふぢやありませんか……いゝえ、お友からちやんと聞いて知つて居るんですよ。御隠しなすつたつて駄目よ。昨夜も何處とかへ行らっしゃったつて……在様く、彌生へ——待合なんてせう。私なんぞへも旨い事を云つてお置きなすつて、其様事なんぞなさるんだもの。貴方は本統に何て憎らしい方だらうね。』

『これは悪入つた。いや、手荒いですな。昨夜は片桐が悪いんで。』

『片桐さんが悪いんだか、誰が悪いんだか……誰も居ないんだから、何とでも云へませうね。私こそ實に詰らないは。随分危ない橋を渡つてゐるのに、貴方に其様氣で居られちやア、餘り埋らな過ぎますは。』

『いや、左様云はれるてえと、何も……併し、私に浮いた氣などあつて能いものですか。其點だけは決して、御疑念御無用に願たいものでがすよ。』

『ぢやア、其他は悉皆怪しいつて居るすね。』

『いや、何も左様切込まれちやア、何ともはや手も足も出ねえ次第で。以來は注意致しますからと、謝罪するより外ないてがすな。』

『何とでもなさいよ。』

『はははは。以來注意致すとして、餘り時間が掛つた様でがすから、彼方でもお待兼ねてがせうて。さア参りますすかな。』

『てな事を云つて、逃出すんでせう。たまにだつて、碌々お話も出来ないんだから、其様に急がないだつて可いぢやありませんか。貴方は本統に憎らしいんだよ。』

『いや、どうも左様度々憎らしがられては、』

『まあ黙つて居らっしゃいよ。』

此問答を滞れ聞いて居た三之助は、覺えず拳を握り切齒をなし、彼等の奸悪を憎み、其大膽に驚き

如何になし呉れんかと、胸を戦かして、叔父の不幸を歎き、悲憤の涙に咽んで居た。彼方の椽側に足音が聞こえたので、三之助は我に復つて屹度彼方を見ると、土岐とお龍とが敷寄屋を出て椽側へかゝつたのであつた。

「うゝ、畜生等が。」

三之助は口の中で斯う云う積であつたが、覺えず聲が逸んだので、我ながら失敗たと膽を冷した。「庭に誰か。」

お龍は歩を止めて、土岐と共に置子を凝らして、木の間を透して見る。

三之助は暗き方へ身を退き、植込に紛込んで了つた。

お龍は土岐に眼を見合せて、流石に顔色を變へたのであつた。

(四十九)

三之助はお龍等に認められた處で、何構ふものかと思つて居るけれども、彼處では目付けられなかつた方が、却つて僥倖であつた。それにしても實に憎む可き奴等だ。今夜は何する事も出来ぬが、明日になつたら今夜見聞した事を、委細叔父さんへ御話しせぬばならぬ。彼様女が家内に居て、何して治つて行くものか。場所もあらうに、時もあるらうに、今夜の様な場合に彼敷寄屋で彼様は何だ。大膽なもの程がある。叔父さんを馬鹿にして居るにも程がある。おのれ見ろ、明日は面の皮を引剥いて、お綾さんを苛責めたり、乃公に辛く當つた罰をも、合せて思知らせて遣るから、左様思へ。まだしも

徹聴したのが自分であつたから可いが、他の人へ他から叔父さんの御耳に入つたら、叔父さんの迷惑不名譽は何程であるか知れぬ。いや、もう世間では知つて居るのだ。其側から叔父さんの耳へ入つたなら、例の御氣性だから、何様事に成行か知れぬ。それよりも自分から耳へ入れた方が可い。明日は是非此事を話して、殆んど斯う決心し掛けた。が是非話してと思ふと、不圖思ひ及んだのは、其に就いて何等の證據も無い事である。あゝ失敗した事をした、彼時に聲を掛けるか、顔を出すか、何れにしても彼等を驚かして置くのであつたものを、あゝ、惜しい事をした。残念な事をした。叔父さんの前で、黒白虚實の迫合になつた時、證據がなければ徒らに水掛論に了らねばならぬ。其結果は自分が非分に落ねばならぬのだ。これは迂濶に云出す處でない。是非明日でなくとも、彼等か姦通の證據を捕へて——退引させぬ程の證據を押へて置いての上だ。残念だけれども、暫時見合わせるより外はない。なアに、一度でも斯と見聞した上は、注意さへ怠らなければ、其證據を上げるに難い事もあるまい。なアに、兎角明日直に大助へ訴ふる事だけは思止つた。

氣が付くと鐸の火は消掛つて居た。

「あゝ忘れて居た。」

薪を加へながら座敷の方を差覗くと、松矢の姿はもう見えず、お友も彼が給仕の爲に従つたのか見えなかつた。

「お綾さんとお友さんと松矢さんの傍へ置く機に、土岐めが云つて居たが、お綾さんが彼處に居る處を見ると、お友さんばかり従いて行つたのかも知ぬ。まだお綾さんが行かぬだけ可かつた。」

三之助は我と我へ語りながら、頻りに燵る薪を團扇で煽立て、ぱつと火が焚上がったので覺えず身を退いた時、背後に人の立つて居るのに氣付いて、吃驚して見上げた。

「三さん、何を其様に吃驚お爲なの。」

「叔母さんでしたか。い、い、何時此處へ御入でなすつたんです。」

「何時来たッて可いぢやないか。」と、お龍は冷笑ひながら、「お前さんこそ何時歸つてお居た。」

「えッ、何ですッて。」

「何ですッても無いもんだ。此處を離れないで居たのなら、今の様に火を消して了ふ事はあるまひよ。」

「あッ、火の消掛つたんですか。こ、此、此は何です。」

「云譯する事は無いよ。何處かへ行つたなら行つたと、明瞭ぢ云ひが可いではないか。」

三之助はお龍が知らぬ間に背後に來て居たに、不覺す狼狽したけれども、「二三問答をなす中には沈着も出て來た。」

「私は何處へ參らうとも、貴女へ隠す事は無いのです。」

「だから、何處へ行つて居たのか、云ツ了ふが可いよ。」

三之助は流石に數寄屋の此方へとも云かねて黙つて居る。

お龍は折詰と彼正宗の堀とを早くも見出して、「あ、何だね、お前さんは其酒やお下物を盗りに行つたんだね。」

「かせぎとは何の事です。」

「無斷つて持つて來る事。」

「では何ですか、私が此酒と折詰を、盗んで、も來たのかと。」と、三之助の聲は顫へた。

「お盗みだとは云はないよ。だけれども、私はお前さん處へ、此様物を持つてお行くと、誰にも命けはしなかつた積。」と、お前さんだつても左様ぢやないか、欲しいなら欲しいと、何も遠慮するには及ばないから、私へ貰ひに來るが可いのだ。何も無斷で、狐鼠く運ばないだつて可いだらう。三さんも見掛に依らない、随分卑劣の事を爲ぢやないかね。」

「何ですッて。私の心が卑劣いと云ふんですか。ふむ、人の事は何でも云へや。」

「おやッ、可笑な事を云ひだね。」

「云ツたか何したんです。」

三之助はもう破れ被れた、何なるものかと云ふ氣になつたらしい。

(五十)

お龍は松矢大臣の傍に侍して、手落なく取持ねばならぬ忙しい中を脱けて、此に三之助を見に來たのは、數寄屋にての土岐との密話を、若や三之助に聞かれたのではなからうかとの恐を懷て居るからである。生憎の臘月夜に、確と其姿を認め得なかつたけれども、木間へ紛込んだ人影が、何やら三之助に似て居た様にも思ふ。今頃庭内を徘徊するのは——他から入つたら知らぬ事——家内の者とすれ

ば、鑓番の三之助より外にあるまじ。彼人影が果して三之助で、土岐との密話の聞かれたとすると、
 お須賀の縁類ではあり、殊に平生から自分を敵視して居るのだから、或は大助へ告げるかも知れぬ。
 まだ、此家を去る時節ではなく、種々思惑も付けて居るのに、其様事になつて何なるものか。三之
 助ならば三之助と確かめて置いて、其上での手段を考へねばならぬと今此處に来て、態と頭から三之
 助を毒突いて見ると、三之助の様子に何處か強味が見えて、其調語にさへ平生とは違つた處がある様
 だ。

『三さん、お前さん怒りですか。』と、お龍の語調は和らげて居た。

『いえ、強ひて怒る事も怒りたい事もありやしません。ですけれども、叔母さんが今の様な事を云
 ひなると、私だつて黙つては居られませんや。』

『ぢやア、私が悪かつたんだはねえ。悪かつたら、勘忍して下さうよ。』

三之助はお龍の斯う折れて出たのが意外でならぬ。のみならず、何の悪計があるも知れぬと氣味が
 悪くなつたので、何とも返辭をせぬ。

素より忍音であるけれども、お龍は笑掛けてまで見て、『ほ、ほ、ほ。私は何かして居た様だ。先刻戴
 いた御酒に、まだ酔つてるのかも知れないよ。三さん、腹をお立ちだつたらね、何卒勘忍して呉ん
 なさうよ。』と、擬乎と三之助を見て居る。

三之助も斯う詫びられて見ると、強ひて事を好むのでないから、破れ被れだとの擬勢も失せて、『左
 様事が分れば、私は何でも可いのです。』

『ぢやア、勘忍して呉れなのね。ほ、ほ、ほ。私が悪かつたんだから、本統に後悔して下つてよ。
 三さんが正宗の塚を五本や十本持つてお出でだつて、些とも構ふ事は無いんだのに、全く私の居
 處が悪かつたんだと見えるよ。今お辨がお定に何か持たせて上げるからね、今の事は水に流して下さ
 うよ。』

『私何にも欲しい事はありませんから、御心配には及びませむ。』

『三さんは何して其様に剛情なんだらう。奇麗に水に流して呉れたらね、何にも云はないで受
 けて下さうよ。今持たせて上げてよ。』

三之助は垂頭して居た顔に、冷かな笑を浮めた。

お龍は二三歩去り掛けたが、又戻つて来て

『三さん、何卒ね、此迄の様に隔心を為して下さらなう、何でも遠慮をしながら下さうよ。お前
 さんの事なら、何様都合でもして上げてよ。』

『は、返辭こそしたが、さや／＼であつた事は語調にも知れて居る。』

『憎らして程剛情ね。ほ、ほ。』

お龍は愛嬌を持つた聲で斯う云つて、緩々と彼方へと去つて了つた。

三之助はお龍の姿が全く見えなくなる迄見送り果て、

『古狸めッ、化かさうとしたつて、誰が化かされるものか。』

夜は大分更けたらしく、折からの上野の鐘聲も中途から數へてさへもう九時……十二時を過ぎたか

も知れぬと、三之助が空を仰いで居ると、彼の數寄屋の方に女の騒ぐ聲が聞える。
 『お友さんの聲も混つてる様だ。何か面白いのか知らむ。大臣さんだなんて云つたッて、彼様處を見ちやア、から詰らない人の様だ。は。』
 冷笑ひながら座敷を見返ると、残れる四人の人は尚ほ密議を凝して居るらしく、お綾が所在なげに此方を見て居るのが見えた。

(五十一)

八十島大助が大いに期する處があつて催した宴遊會は、兎に角無事に閉會した。
 松矢大臣高畑局長及び片桐代議士土岐頼夫等が辭し去つたのは、其夜の一時過ぎ二時近い頃であつた。

大助が豫て期して居た程の効果は收め得なかつたかも知れぬが、兎に角幾分の望は繋ぎ得られぬでもないから、園遊會を催したけの甲斐はあつたと、翌日は前に比べて多少色を直した様であつた。それと共に、八十島の家庭の有様に、著るしい變化が發つた。第一にはお龍のお綾や三之助へ對する舉動が一變した事である。次にはお友が是迄の御轉婆に似ず、動もすれば物思に沈んで、他に怪しまるゝ程溜息を吐いて居る事で、三之助の様子にも——お龍へ對する様子にも、餘程變つた處が見える。松田老人などは此有様に眼を睜つて、天變地異でも起つた程の驚を吃して居た。

お綾はお龍の様子が變つたのに、氣味悪くは思ひながらも、悪く變られたのよりも、流石に心嬉しく思ふので、私にお大へ對ひ、

『お母さんが何お爲なすつたのか知らないけども、何かにつけて大變に優しくして下さつてよ。』

『だから、御氣をお付け遊ばなさいや不可ませんと申すんで御在ますよ。何の譯もなくつて、此様に急に變んなさると云ふのが、私には何しても解りませぬもの。』

『だけでもね、優しくして下さるんだから、私は嬉しくつてならないよ。』

『ですけどもね、御油斷遊ばしては不可ませんよ。御新造さまが何か御話がありましたらね、鳥渡した事でも、直ぐにお大へ御話し遊ばすが能う御在ますよ。』

お綾は首肯して、吃度話すからね、お前が考へて見て、私へ智恵を借して呉れよ。』

『私に智恵なんぞありは致しませんけども、三さまへ御相談を願つて、お悪い様には致しませんよ。』

『何卒左様しても呉れよ。』と、お綾は我と我頬を撫で、見て、氣の所爲か、些し肥つた様だは。』

『左様仰有れば、』と、お大はお綾の顔を右見左見て、『御肥り遊ばしたかも知れませぬね。』

『お友さんは何お爲なんだか、鬱込んでばかり居て、顔の色も何だか悪い様ね。』と、お綾は眉を顰めて居る。

『ほ、ほ、』と、お大は笑出した。

『何か可笑い事があつて。』と、お綾は我事かと前後を見返つた。

『だッて、可笑う御在ますは。お友さまは戀病をして居らッしやるんだッて云ひますもの。』

『まア、お大は、』と、お綾は人の上ながらも顔を赧めて、『其様事を云ふものではなくッてよ。』

『ですけども、お辨やお定が左様申して居るんで御在ますよ。』
 『お辨やお定の云ふ事なら、何だか知れなくつてよ。』
 『ですけども、お友さまがお辨へ御話遊ばしたつて云ひますもの。』
 お綾は黙つて居る。

お大は語を繼いで、『先日の園遊會の時に、ほら……彼何とかの局長さんの高畑様ツて方ね——彼前の晩に御新造さまが、お綾さまと御見合をなさる方だつて、好加減な事を仰有つたてせう。』

お綾は顔を紅の様に染めて、『私は何様に可厭だつたか知れなかつたは。阿母さんのお云ひなすつた事は、虚構だと思つて居てもね、彼方がにや／＼笑ひながら私の顔ばかり……何様に可厭だつたか、終には頭痛が爲て来たは。』

『ですけども、中々立派な方でしたね。』

『何だか知らないけども、私は可厭だつたは。』とお綾は今でも頭痛のする様に、両方の額を押へた。

『お綾さまは其様に御嫌ひ遊ばしても、お友さまは御好きだと見えますはね。おほほ／＼。』

お大の笑聲が止まるか止まらぬのに、此お綾の居室の唐紙に手を掛けたものがある。

二女は吃驚して振り返ると、

『姉さん、入つても可くつて。』

お友が外から聲を掛けた。

(五十二)

『お友さんなの。能う御座んすとも。開けて入つて下さいよ。』

『左様。』とお友は紙門を細目に開けて差覗き、『あや、お大が居てね。』と、思切つては開けかねて居る。

『私は今階下へ参るんですから。』とお大は立つて行つて紙門をさらりと開けて、『さアお入り遊ばせ。』と、入替つて階下へ下りて行つて了つた。

お友は前にお綾が評した様に、顔の色も悪く寝れて、眼の色も何となく鈍つて見える。

『姉さん、御邪魔にはならなくつて。』と、力なげに坐つて、私に溜息を吐いた。

『些しも邪魔な事は無くつてよ。』と、お綾はお友の顔を凝平と見て、『今日も顔の色が悪くつてよ。』

『左様でせう。』と、お友はお綾の顔を凝平と見て涙含んだ。

お綾は早くもお友の涙を認めて、『何處が酷く悪くはなくつて。』

『いゝえ。』と、又溜息を吐いて、『何だか直さに悲しくなつてよ。』

『佐藤さん(出入の醫師)に又見て貰う方が可いは。』

『いや／＼。』とお友は冠を振つて、『私お薬なんぞ可厭な事よ。今朝貰つたお薬はね、飲まないで捨て了つてよ。』と、淋しい笑を含んだ。

『さア、酷い事を。ほ／＼。』とお綾も笑ひ出したが、氣の毒さうにお友の顔を見て居る。

お友は何か云ひたげに幾度か唇頭を動したが、能く云難い事でもあるのか、兎角云ひそしてくれて垂頭くのであつた。

此様事は平生のお友にないのだから、お綾は不思議に思ひながら、『お友さん、貴妹は何か談話があるんだはね。』

お友は促されて、『姉さんへ傳言を聞て居てよ。』

お友は思惑ひながら、『え、私へ、傳言ッて、誰からなの。』

『高畑さんからよ。』

『えッ。』と、お綾は吃驚して覺えず聲を上げて、『可厭だはねえ、お友さんは。』

お友の眼は怪しく光つて、『だッて、頼まれたんだもの。』

『私、其様傳言なんぞ聞かなくッても可くッてよ。』と、お綾は全く顔色が變つて居る。

『だッて、私頼まれたんだもの、云はなくッては悪いは。』

お友は高畑が獨逸にて相愛の婦人を失つたと云ふ其事を語り了つて、

『此話を姉さんに爲て下さッて、高畑さんが一生懸命に、』と、語に力を入れて、『お頼みなすつてよ。』

お綾も今聞いた事だけでは、何も自分へ關つて居ないから、まア可かつたと多少顔色を直した。

『それね、姉さん。』

『はッ。』

『其死去つたッて云ふ姉さんの方がね、お綾姉さんに能く似てるんですとさ。おほ。』

『お友さんが好加減な事を……私は可厭よ、其様話なんぞ。』と、お綾は腹も立てかねない味だ。

『私は其妹の方に似てるんだッて。』と、何故か悄乎として居る。

お綾はお友の此様子に、お大等が噂する處も全く虚構ではなかつたと覺つた。

お友は悄乎としながらも、怪しく光つた眼にお綾の腹の中をも讀みたげな様子で、『姉さんは虚だッて云ひなされるけどもね、證據があるんだもの。』

『えッ、證據ッて何の證據なの。』と、お綾は眼を睜つた。

『其證據ッてね、高畑さんから姉さんをお嫁さんに怨しいッて、土岐さんに頼んで、今朝阿父さんへ相談があつたんだもの。』と、お友は微笑を含みながら、お綾の顔をつくく〜と見て居る。

『虚構、虚構、お友さんが好加減な事を……本統に止して頂戴。』

『だッて……本統だッたら、姉さんは何して。』

『本統だッて、私は可厭だから、謝罪つて貰ふばかりよ。』

『姉さん、屹度——屹度ですか。』

『屹度ですとさ。』

『屹度ですとさ。』と、お友は確と念を押して置いて、『本當は虚構なのよ。ほ、おほ、おほ。』と、はれば

れと高く笑ふのであつた。

お綾は呆れて、唯苦笑するのみであつた。

(五十三)

お友がお綾が高畑に意があるや否を試みる爲めに、高畑がお綾を貰ひ受けたいと云つた結婚談は、意外にも——お友には別して意外にも、事實談として見はれた。お綾の吃驚、お友の失望は、共に一方ならなかつた。

お友はお龍から斯くと聞いた時には——高畑が土岐を介してお綾を貰ひ受けたいと、父大助へ申込んだと聞いた時には、覺えず涙を溢して、少時は顔も上げ得なかつた。

お龍は過ぎし園遊會の夜、高畑とお友とが人なき廊の月の下に、相携へての談話を、高畑を迎に行つた植込の蔭から、殆んど其始終を聞き得たので、其時から既に疑懼の念を懐いて居た。高畑の話の調子が、お友如き少女の意を動かすのに、充分の働をなしまひか。其様事があるとして、又手其結果が何ならうか。此がお綾ならば結句僥倖、此家を遠ざける手段ともなるのだが、お友は成る可く手許に置いて、相續人に仕果せると、豫ねて思計つて居るだけに、去る心を發せたくなかつたけれども、お友は果して高畑の蜜の如き語に陥められて、其時から人が違つたかとも見ゆる様子に、お龍は早くも其意中を察して居た。

で、今お友が涙を溢したのを見るより、眉を蹙めながら小聲になり、「お友さん、お前さんが今涙を御溢した意中は、私は能く知つて居ますよ。』
『エッ。』と、お友は覺えず涙の顔を上げた。

お龍は其顔を見て莞爾して、「私だもの、其位な事が分らないで何するものかね。園遊會の晩聞いた事もあるし、其以後のお前さんの様子で、私は疾に察して居たんだよ。だから、お前さんが何んの病氣ともつかないで、ぶら／＼して居てだからと云つて、強てお薬を勧め様ともしなかつたのさ。時が経つ中には自然と忘れて了ひだらうと、實は其を待つて居たんだよ。お友さん、お前さんの様に伶俐な人にも似合はないぢやないか。高畑さんは口が巧いんだから、お前さんは自分の事だと思つたんだけども、先方ではお綾さんに思召があつたんだよ。』

『だから、私餘り口惜くツて……。』と泣く。

『だけでも、能く考へて御覽が可いよ。先方は多寡が局長さんだよ。お役を爲て居ての中こそ、他人がちやほやすするけれどもね、何かして免職にても……其様事が無いとは限らないんだよ。それよりも、此家の相續人になつて御覽な家附のお神さんで、威張つて居られる人にお成りなんだよ。お嫁に行りよりか幾許好いか知れやしないんだのに、何も其様に御泣きの事があるものかね。お友さん、お解りだつたかね。』

『え、解つてます。』と、依然泣いて居る。

『色の戀のと云ふのはね、面白いと云つたツて鳥渡の間だよ。其よりかもね、未始終の事を考へるのが、實を云や伶俐なんだよ。』

『姉さんは嫁くツても云ひでしたか。』

『まだお綾さんへは話も爲やしないんだよ。』

『姉さんが嫁くと云ひだしたら、私承知しないから可い。』と、お友は染々と斯う云ひながら、何しやうとも云ひなす。お龍は笑ひながらお友の顔を見た。

『だって、姉さんは屹度嫁かない——屹度ですって、私へ約束お爲だつたんですもの。』

『まアお前さん達は、二人で其様相談などを、前から爲てお居てなの。』

お友は流石に羞かしかつたのか、顔を背向けながら垂頭して了つた。

『ほほほ、本當に油断も隙も……』

お龍でもへも少時は呆れて居た。

(五十四)

お綾も高畑から縁談の申込があつたと聞いた時は、お友と同じ様に涙に暮れた。同じ涙でも可厭さからの涙で、お大へ對つてさへ愚痴を云ふのであつた。

『お前が彼様に受合つたつても、とうと此様事に成つて了つてよ。お前が受合つて呉れたんだから、お前が此談の纏らない様にして呉れてなきや、私死んで了つてよ。』と、怨めしい顔をしてお大を睨むのである。

『それはお綾さま、御無理で居らっしゃいますよ。私が御受合申したと云ふ譯ではなかつたんですもの。お大へ。』

『さ、え、お前が左様云ひだつたぢやないか——大丈夫ですから園遊會へ入らっしゃって、彼時お前が云ひだつたのよ。だから、私安心して行つたんだに……だから、此様事に成つたんぢやないか。私何してもお大の所爲だと思つてよ。』

『其様御無理を仰有つたつて。』

『さ、え、些とも無理な事はないは。私が彼時園遊會に行かなさやア、彼人に逢ひはしないんだは。

逢つたから、此様事になつたんぢやないか。逢ひさへ致さねば……』

『ですけども、前からお綾さまを御存じだつたのかも知れませんが。』

『さ、え、其様事は無くつてよ。私彼様顔の人は、一度だつて見た事は無いんだもの。』

『お綾さまは御覽遊ばさなくつても、彼方様では。』

『さ、え、お前が其様事を云つて誤魔化しはうと思つたつて、私や何しても承知しなくつてよ。』

まるで驕兒が駄々を云ふに等しいお綾の様子に、お大は當惑しながら、

『まだ其様に仰有る事はありませんよ、此が御決定遊ばしたのではありませんし。』

『決定つたら生きては居なくつてよ。』と、お綾は手巾に顔を押し、

『三さんに聞かれても面目なくつてよ。』

『えッ、三さまに。』と、お大は疑乎とお綾を見て私に覺る處があつたらし。

お綾もお大に問返されて、はッと思つた体で、少時は何とも云はなかつたが、だつて、左様ぢやないか。三さんが私の事では、種々心配して下さるんだに……お前だつて知つてお居てぢやないか。』

「はい、其は存じて居ります。」
「其なら何も、其様事を御聞きの事はないは。お大は本當に意地が悪くなつてね。」と、お綾は涙の顔の何處やらを、ぼと紅く染めて居た。

「おほ、私が意地が悪う御在ますつて。」と、お大は笑ひながら斯う云つたが、急に眞面目になつて、「お綾さまが其様に仰有るのなら、私はもう何にも申し上げません……いゝえ、もう決して何にも申し上げません。」

「あらッ。」と、お綾は吃驚した顔をなし、「お大、お前は怒りなの。」

「いゝえ、どう致しまして、御主人様へ奉公人の身分で、お怒り申しますなんて、其様事は出来ません。」

「いゝえ、怒つてるんだよ。さうでなから、其様事を云ひの筈は無いは。」

「私は意地が悪いんで御在ますもの。」

「あらッ。」

「三さまが居らッしやるんですから、私なんぞは何にも申し上げないたつて、能う御在ますは、ねえお綾は黙つて了つた。

お綾は黙つて了つた。

「ねえお綾さま、左様で御在ませう。お大は意地が悪いんですし、三さまは御親切で居らッしやるんですから。」

「いひは、何とでも云ひが可いは。」

「だつて、左様仰有つたんですもの。」

「左様云つたと云ひなら、それで可くつてよ。」と、お綾は眼を潤ませた。

お綾が眼を潤ませたのを見るより、お大は調戲つて居るのが氣の毒になつて、

「おほ、本氣に遊ばしたんですか。」

「もう可くつてよ。」と、お綾ははらくと涙を溢して、「人が困つてるのを知て、今の様な事を……もう可くつてよ。」

「本統にお怒り遊ばして。」

「知らなくつてよ。」

「何を喧嘩して居るんです。」

突然に入つて来たのは、三之助であつた。

「おや、三さま、入らッしやいますし。」と、お大は笑顔で迎へて、「お綾さまの御機嫌を悉皆損してしまつた。おほ。」

「はいはい、お綾さん、何なごつたです。」

三之助の前にひたと坐られたので、お綾は何とも云へないで顔を眞紅にした。

お大は此處ぞと膝を進めて、態と笑もせず、「お綾さま、三さまか入らっしゃいましたから、御氣がなかり遊ばしたてせう。ですから、今仰有つた事を、三さまの前で今一度仰有つて御覽遊ばせ、さア今一度仰有つて御覽遊ばせ。」

「お大は尙だ調戲ッてるんだよ。」と、お綾は微かに笑を含んで、斯う云つたのも殆んど口の中。

「あやッ、私がお調戲ひ申したんですッて。おほ。お綾さまは巧い事を仰有つて居らっしゃるよ。」

三さま、斯うて御在ますよ、お聞遊ばせ。」

お大か三之助の方へ向直つたのを見るより、お綾は一入顔を赧めて、

「お大、お止しよ、先刻のは戯言だと云ッてるのに。」

「えッ、御戲言で御在ますッて。まア。」と、お大は態と呆れた顔をなし。「三さま、斯うなんて御在ますよ。お大は意地悪だから顔を見るのも可厭だ。三さまが御親切で、何でも御話相手になつて下さるから、お大なんぞに用は無いつて仰有つたんで御在ますよ……三さまか入らっしゃたら、急に御戲言だなんて仰有るんですけれども、全く左様仰有つたに、はい、違ひがないんで御在ますよ。ですから……三さま何卒、貴方が此からは別して、御親切に遊ばして、御世話を遊ばして……おほ、お綾さま、斯うて御在ますはね。」

「あらッ、お大。」は、と云掛けて、覺えず三之助に顔を見合せると、思ふ様には云へなくなつて、「お大の勝手に、何とでもお云ひか可いは。」

「また御怒り遊ばしたんですか。」と、お大は態とお綾の顔を差覗いた。

「お大はもう、知らなくッてよ。」と、お綾は態とふりふりとして横を向いて了つた。

「は、は、は、。何かと思つたら、其様事だつたのか。お綾さん、其様事を氣に懸けて何するのです。それよりか他に……お大、お前も知つて居るだらう。」と、三之助はお大を見返つて、「定めてお綾さんか心配して居てだらうと思ふがね。」

「御縁談の事で御在ませう。」

三之助は首肯して見せた。

「實は其事で、お綾さまと光刻からお話を致して居たんで御在ますよ。左様致しますとね、お大は意地が悪い、何でも三さまでなければ……おほ、それは戯言で御在ますけれども……實はお綾さまも大層御心配して居らっしゃいますね、此縁談か纏る様なら、死んで了ふなぞと仰有るんで御在ますよ。」

三之助はお綾を凝平と見て、「死んで了ふなんて、其様馬鹿な事が……併し、其様に厭ひなさる事もないのだが、」

「三さまへ面目ないッて仰有るんで御在ますよ。」

「ありッ、また、お大は。」と、お綾は真紅な顔をして、お大を睨めた。

「だッて、此ばッかしは本當で御在ますよ。おほ。」

三之助はお綾に顔を見合せて、流石に多少常ならぬ心が動いたらしかつたが、直ぐに笑出して、「は、は、は、。お大、お前も何時迄戯言を云つて居るのか。それよりも何だ、お綾さんが此縁談に不承

ないのだが、」

「三さまへ面目ないッて仰有るんで御在ますよ。」

「ありッ、また、お大は。」と、お綾は真紅な顔をして、お大を睨めた。

「だッて、此ばッかしは本當で御在ますよ。おほ。」

三之助はお綾に顔を見合せて、流石に多少常ならぬ心が動いたらしかつたが、直ぐに笑出して、「は、は、は、。お大、お前も何時迄戯言を云つて居るのか。それよりも何だ、お綾さんが此縁談に不承

知を云ひだと、叔父さんが實に御困りなさるだらう。」
お大は吃驚しながら、「ぢやア、もう旦那様は御承知遊ばしたんで御在ますか——もう御返辭を遊ばしたんで御在ますか。」

お綾は顔の色が蒼白めて、眼を睨り、唇頭を顔はして居る。

「いや、左様では無いんだ。お綾さん、貴方が其様に吃驚する事は無いんです。ですかね。」と、三之助は溜息を吐いて、「媒灼人が松矢大臣と云ふ事ですから、叔父さんが無を謝絶り難くッて、困ッてお居てなさるだらうと思ふのです。」

「何してせうね。大臣さんだから謝絶れないッて事も、」

「それがです。」と、三之助はお綾の語を遮つて、「其處には叔父さんに苦しい事情があるのです……お綾さんとお大にだから話したッても、他へ漏れる事もあるまひから……お大、誰も聞いている人はあるまひが、お前鳥渡、其處を氣を付けてお呉れ。」

「はッ。」

お大は室の外を見に見く。お綾は氣が氣でなく、覺えず膝を進めて三之助の顔を見上げた。

(五十六)

三之助はお大が聞く人なきを見定めて、座に復つた時、「お大、念を押す迄も無いがね、決して他言して呉れては困るよ。」

「お疑ひ遊ばすなら、私は伺はなくつても能う御在ます。」

「いや、直ぐに怒つて呉れては困るな。」と、三之助は莞爾笑を含んで、「お前を大丈夫だと思はなければ、最初から氣振にも見せやしないよ。唯念を押したからと云ッて……いや、他言してさへ呉れなければ可いのだ。お綾さんも、もう少し此方へ寄つて下さい。」

「はッ。」と、お綾は膝を進めて、お大と共に三之助を見上げた。

三之助は室の外の見ゆる限に眼を配りながら小聲になつて、「叔父さんの御困りなさる事情と云ふのはね。」と、一入聲を潜めた。

お綾の父の大助が過日園遊會を催ほし、特に松矢大臣高畑局長等を招待したのには、大いに事情があつたので——大助が二人に頼つて商業上の失敗、仕儀によつては銀行も會社も閉店せねばならぬ程の失敗を恢復しようと思つて居る事。此外には差當つて回復の手段がないので、今の處二人の機嫌を損ぜんは、大助にあつて爲し難い場合に臨んで居るのだから、阿綾が是非に關せず縁談を承知せぬ時には、大助の計畫も水の泡と消えて了ふのであると、三之助は委細に話して聞かせて、

「ね、斯う云ふ事情があるのですから、謝絶するとなつたら、阿父さんが實に御困りなさるだらうと思ふのです。」

お綾もお大も三之助の談話を聞いて居る中から、其様事情があらうとは知らなかつたが、左様であるとする、此縁談の大切な事は、八十島の浮沈に關つて居る——お綾の一身が八十島の家浮沈に關つて居る……二女は顔を見合せて、お綾はもう涙含んで、とても脱る可からざるものと思ひ、悲しさを

が胸に突掛けるのであつた。

お大は太息を吐いて、『其様事情が御在り遊ばさうとは存じませんかッたから……』と、後は何とも語が出ぬ。

三之助はお綾の様子に、何とも云へぬ心持がする。此縁談を謝絶する事が出来なかつた時には、お綾さんは高畑の奥さんに……何と云つて自分にも云ひ様はないのであらうが、口惜しい様な情ない様な、そして自分も詰らない様な、まア何と云はうか、どうも云様の無い様な心持がするのである。

三之助は辛うじて、『ですがねお綾さん、其様に心配なさる事もないでせう。貴女は此家の相續人ですから、謝絶する事になれば、口實が無い事もないのですよ。叔父さんは彼通の方ですから、相續人のお綾さんを嫁に遣る様な事は……ねえお大、左様ぢやないかね。』

『左様で御在ますとも。』とお大は謝絶するのに立派な口實があると聞いて、ほッと息を吐いた。

『それで先方で承知して呉れるてせうか。』とお綾はそつと涙を拭いた。

『さア、其處は不明ないんです。けれども、正しい道理があつて見ると、大臣さんであらうが、何であらうが、其を強てとは云ひ難からうぢやありませんか。』

『全くで御在ますね。』とお大の語調にも勇が出た。

お綾も稍胸が開けた様で、『先方が其て承知して下さると……阿父さんのお頼も聞いて下さつて……お大、左様だと私は、此様に嬉しい事は無いんだけど。』

『なに貴女、大丈夫お聞きなさるでせうよ。』とお大は力をつける。

三之助は何故か眉を凝めて、『ですが、お綾さんには外よりも内に敵があるのだから、兎に角充分注意をしなければなりません。お大、お前が一層意を注いで居て呉れないと、場合が場合だからね。』
『はい、及ばずながら、私に出来るだけ注意を注ぎます。』とお大は呑込顔である。
『何卒頼むよ。それに就いて、私は尙だお話して置きたい事があるのです。』と、三之助は一入聲を潜めた。

五十七

三之助が尙だ話して置きたい事があると云つて、一入聲を潜めたので、お綾は尙ほ此上に何様事があるのか。また心配しなければならぬ様な事ではあるまいかと、もう胸が痛む様な気がするのである。
『お綾さん、貴女も充分承知して居る筈だから、私が今更注意する迄もないのですが、』と、三之助は語を断つて、熱と考へて居る。

お綾は三之助が云掛けて黙つて了つたので、一入聲に掛りながら、『三さん、私が承知してる筈だとお云ひなさるのは……それは私だつても全く気が付かない事もありませんけんども、三さんが改めて話して置きたいとお云ひなすつた事を、早く云つて聞かして下さいませ。それでないとね、私は氣に掛つて仕様がなくなつてよ。』

三之助は首肯しながら、『それは話しますとも……お綾さん、内の人で貴女を遣出したと思つて居る人は、私が今更申す迄も無く、誰だつて知つて居ませア。ね、左様でせう。今度の縁談の發つたの

は、貴女を左様したいと思つて居る人達には、實に好都合なんだ。それが外にも同類があるのだから、内外相應して、非常に運動するだらうと思ふのです。内からは叔父さんを説進める、外からは此縁談が調はねば、今日迄の計畫も書籍に属すると云ふ様な事を云つて、半ば脅迫がましい手段に出るかも知れないのです。其外の同類と云ふのは誰の事か、是も私が明々地に云はないでも、貴女も大も大も概察して居ての筈だ。』

『はい、存じて居りますとも。』と、お大は語を挿さむだ。

『それに、私は尙だ聞いた事があるのです。他からも聞けば、自分でも傍聴した事が——丁度園遊會の夜の事でしたかね。』と、三之助の目には涙が差含んで、『ですが、私は今は云はない。貴女とお大になら、何様事でも話す積ですが、此ばかりは未だ明々地に云ふ可き時ではないと信ずるから、今は云はない、云ひますまい。決して貴女に留意を持つて居るのではないが、今は勘忍して下さい。併してすね、叔母さんが此頃私へ對して、何様舉止をして居るか、』と、お綾とお大の顔を凝乎と見て、『貴女達も不思議にお思ひなさるでせう、思つて居ての筈だ。』

お大はお綾を見返つて、『全く不思議で御在りますもの。氣味が悪い様で御在ります。』
三之助は首肯して、『全く氣味が悪いのさ——何様奸計があるか知れないから、私は非常に注意して居るのさ。お綾さん、私が氣味が悪く思ふ程、叔母さんが私へ優しくして下さるのには、何か事情が無ければなりません。全く事情があるのですよ。けれども、叔父さんの御名譽に關する事だから、時節が来る迄は、私は話さない。優しい裏には事情があり、氣味が悪いと云ふは、何様奸計があるかと』

懸念するからなので、私は却つて私の身が危ふくやつて居るだらうと思ふのですよ。』

『三さん、何か其様に深い事が、』と、お綾は驚と怖を有つた眼を睜つて居た。

『三之助も何時か一度は、お綾さんよりか前にも、追出されるかも知れないのです。』

『オア其様事が。』と、お綾は其事が眼前に迫つても居るかの様に悲しみながら、『其様事にでもなつたら、私は何したら……お大、三さんが其様事にでも成りてしたら、私はもう頼に思ふ方は無いのだし……。』と、袖を顔に蔽うて了つた。

お大も其事が有得可からざる事とは思得ないので、何と云ひ様も無いのである。

『いや、此は相愛——取越苦勞かも知れないから、其様に心配なざる事はありませんが、萬一、其様事があつた時は、お大が一層注意して呉れる様にと、實は其を頼みたかつたのです。併し、これは取越苦勞さね。は、は、は、』と、

三之助はお綾に心配させまいと、高く笑つて見せたが、其實自分も酷く心を勞して居るのであつた。

(五十八)

今度の縁談について最も屈託して居るのは、お綾よりもお友よりも、二女が父の大助である。

最初から出来ない相談を掛けられて、それが出来なければ、お前の頼もまア御免を蒙らう。しかし、其處は魚心あれば水心、と云つた様な縁談の申込を受けたのであるから、大助は一時非常に激して、

直にも謝絶して下はうとしたのであつた。けれども、徐かに三思へて見ると、一概に怒つた處で、何の甲斐があるでは無い。御娘御を高畑へ嫁はされまいか、不肖ながら拙者が御媒酌に立たうと云ふので、其口上に何も腹を立つ可き廉はない。元來他へ嫁す可き娘ならば、其厚意を謝し可き可きであるのを、相續人を望まれたので、それも此方の弱味に付入つてと、弱味があるから左様も思成すので、先方は全くの好意からであるかも知れぬのに、一概に怒らうとしたのは、自分の思慮が足らぬのであつた。彼時怒つて了つて居たら、折角の計畫も總て水泡に歸し去つたものを、さても危ふかつたと、流石に思直しては見たものの、矢張當惑するのは、如何に謝絶す可きかの口實である。相續人でありますからと云へば、口實も何もあつたものではないが、矢張氣遣はるゝのは、彼方の思惑であるのだ。一旦望掛けて謝絶されると云のは、自分が彼方の身になつて考へても、嗚ぞ不快らぬ事であらう。家の浮沈にも關する一大事を前に控へて、頼にす可き人々に不快の念を抱かせては、成る可き事も成るまじく、手を束ねて身の破滅を待つより外に詮議がないのである。それも餘りに口惜しい。何とか外に手段はないものか。それとも思切つてお綾を高畑へ遣はさうか。いや、それは何しても出来ぬ。如何に苦しめばとて、八十島ともあらう者が、相續人たる娘を廢嫡して、いはゞ何として人へ嫁はしたとあつては、人としての信用が地に墮ちて了ふ道理である。それは何あつても成し難い。あゝ、何したものであらうかと、唯此事にのみ心を苦しめて居た。

今日も亦土岐が其返辭を促しに來て、今しも辭し去つたばかりである。

大助が思案に暮れた傍より、お龍は茶など進めて、「所天、何方にか早く御極めなすつたら可いてせうのに。」

「何を極めるのか。」

「何と云つて、お綾さんの事をですはねえ。高畑さんへ御遣げなさるとか、謝絶つて了ひさるとか、何方にか早くも極なすつた方が可いぢやありませんか。」

「それは無論さ。併し、お綾は家の相續人だ。相續人を他へ嫁はすと云ふ事は……さう容易に決せらる可き者でないからな。」

「左様ですか知ら。」と、お龍は態としてはあらうが、解し得ない様な振をなし、「お綾さんがお嫁に御出ても、後にはお友さんも居るんですから、此方の相續は、お友さんに養子をなすつたつても能さうに、私は思ふんですけども。左様は行かないもんですか知ら。」

大助は何を云ふかと云はぬばかりに、お龍を見返つたが、直ぐに他を向いて深く考へて居る。

「所天、お友さんにお婿さんを迎ると云ふ譯には、行かないんですかねえ。」

「其様事は出来ん。お綾は相續人で動かす事は出来ん。お友は妻腹ではあり、お綾の代に家を繼がせると云ふ譯には行かないのだ。」

「左様ですか。それでは、お友さんが可哀相ぢやありませんか。」

「お前は没分曉んから困る。お綾とお友は同一には成らないのだ。」

「だつて、二女とも所天の兒ぢやありませんか。」

「知れ切つた事を……お前にも其位な辨別はありさうなものだ。」

お龍は大助の顔を屹度見て、「あ、解りましたよ、解りましたとも。お綾さんはお須賀さんの兒です
から……。」

「何を云ふのか。」と、大助は叱するが如くお龍を見返つた。

五十九

「龍。」と、大助は嵩高になつて、屹度お龍を見据ゑて、「お前は何かにつけてお須賀の事を云出すが、平生何と云聞かせてある。其様な卑陋い事を云ふてはならぬと、幾度となく戒めて置いたではないか。成程、お綾はお須賀の腹に出来た子だ。併し、其だからお友よりも可愛いと云ふのではない。可愛い事に於ては、お綾とお友と何れを何れとも、些も區別があるのでは無い。が、お綾は相續人だ。他に男子でもあれば——お前が男子でも生んで呉れば、お綾は何處へても——相當な縁さへあれば何處へでも遣られるのだが……。」

「おほい。」と、お龍は嘲けるが如く笑つて、「私に子の出来ない事を御存知だから、其様巧い事を云ひなさるんでせう。所天がお綾さんばかりを——詰りお須賀さんが可愛からだけでも——お綾さんばかりを大切に大事だつてお云ひなさるから、私は又お友さんが可愛くつて仕様が無いんですよ。ね、左様ぢやありませんか。同一兒で居ながら、一人は可愛がられて、一人は憎がられるんぢや、餘り可愛さうですからね。」

「お前はもう彼方へ行くが可い。お前の様な没分曉ぬ女と話をした處で……。」と、大助は口を嚙んで

了つた。

「何せ私は没分曉いんですのさ。私が物を知らない事は、所天だつて最初ッから御存じてせう。何も今更物が解るの解らないのッて……最初ッから知れ切つてる事ぢやありませんか。」と、お龍は鼻掛けて、「私は何せ没分曉兒ですよ。え、没分曉兒ですとも。私の没分曉兒が昨日今日始まつたんぢやあるまいし、何も改めて云つて下さるにも及ばないでせう。没分曉兒だから、何しようとお云ふんです。え、何なさらうと仰有るんですか。」

大助はお龍が此様調子を出す毎に、何時とても後悔せぬ事は無い——一時の色香に迷うてお龍を妻として我家へ入れたのを後悔せぬ事は無い。お須賀は斯うではなかつたと、前妻を懐愛しくさへ思ふのである。此様で益す嵩じて行つたなら悪くなる一方で、逆も素直になる望は無いのだから、二人の娘の爲にも、早くお龍を離別した方がと、幾度思つたか知れぬ。けれども、癢き處へ手の届く様な彼女が取廻しは、我家に無くてならぬ様な氣もするので、屹度思切らうと思ひながらも思切りかねて、今尚ほ斯して居るのである。

けれども、お龍が今の語調——自分を何しようとお云ふのかと迫るに及んでは、大助も腹に据ゑ兼ねて、「龍。」と、語調は流石に沈着きながら、「お前は何か、お前を何とか處分をしる、何でもして呉れると私へ迫るのだな。」

「だつて、私を没分曉兒とお云ひなさるから、除り御氣の毒だしね、何でもして下さいッて云つてるんですよ。」

『では、なにか、お前は自分が没分曉兒だと云ふ事を、自分も知つて居ると斯う云ふのだな。』
お龍は屹度大助の顔を見上げたが、冷笑を含みながら横を向いた。
大助は憐れむが如く凝乎と見て、私かに歎聲を漏しながら、『其様思な事を云はんでな、能く考へて見るが可い。』

『能く考へて見るんですって。此上何考へて見るんだらう。おほい、何せ没分曉兒ぢやないか。』

『依然其様事を云つて居るのか。』

『だつて、左様ぢやありませんか。』

『好し、お前が其考へてあるなら、』と、大助は全く見相を變へた。

お龍もぎよつとして、大助を見上げた眼の中には、充分の畏怖をもつた。

『阿父さん、勘忍して上げて頂戴。』

斯う云ながら入つた来たのは、お友である。

お龍はお友を見るより、『お友さん、私は實に口惜いんだよ。』と、ほろ／＼涙を溢して、大助の顔を屹度睨んだ。

(六十)

大助はお友が入つて来たのを見るより、お龍へ目配をなして、親の争ふさまを子供に見するは好もしからねば、今は何事も云はぬ様にとの意を示したけれども、お龍は左様とは感じなかつたのか、或

ひは其意を覺りながら、子供の前では大助が困らうから、其に乗ずる積でもあるのか、益す甲高な語調で争ひ掛るのである。

『いゝえ、私は誰が来たつて、誰の前だつても、云ふだけの事を云はなさやア、』

『え、黙らんのか。』と、大助はお龍を叱りながら、突と立上つて、『お友、煙草盆を持って来てお呉れ。』

大助は早くも椽から庭へ下立たうとして、沓脱の上の庭下駄を穿いた。

『いや、今は何を云はふとも、私は耳へ入れないのだ。お友、離家へ煙草盆を持って来てお呉れ。』

大助は飛石傳に、本家と十間とは離れぬ、或時は居室ともなし、或時は密談の場にも用ゆる四疊半と六疊二室の離家へ入り掛けて、お友を見返りながら、『早く持つて来ないのか。』と、半手眞似を加へながら呼ぶのであつた。

お友はお龍の思惑を考へて、もぢ／＼して居たが、幾度となき父の命に、煙草盆を提げて庭へ下立つた。

『誰が此儘で済ますものか。お友さん、後刻話す事があるからね、茶の間に御入てなさいよ。』

お龍はお友の返辭を聞いて、椽側を踏む足音も女らしくなく、茶の間の方へ行つて了つた。

大助はお友が煙草盆を持って来たのを其處に置かせて、『湯呑も持つて来てお呉れ。なに、注替へて来ないでもよろしい、丁度飲加減になつて居様。』

『ですけども、餘り微温いかも。』

『いや、微温い方が却つて可ろしい。それに、今茶の間へは行かない方が可い。』
お友が持つて来た湯呑の茶を、大助は徐かに飲んで、凝乎とお友の顔を見て、其眼を庭へ移したのが、如何にも物思はしげに見受けられた。

お友は父の物思はしげな顔を、横から凝乎と見上げて居て、何か云たげに幾度か唇頭を動かし掛けたが、能々云難い事でももあるらしく、云ひそゝくしては微かに溜息を吐くのであつた。

大助も何と思つたのか、お友を見返りさま、『どうも思ふ通には行かないものなの。』

『何がですか。』

『いや、何と云ふ事もないが……まあ總ての事がだね。』

お友は何にも云はないで、少時してから、『阿父さん、姉さんは愈よお嫁さんに……。』と云掛けて顔を赧めながら、『高畑さんへ御嫁の事に決つたんですか。』

『いや、未だ決めないのだが。』

『姉さんは大變可厭がつて居て居てすは。』

『お綾は可厭つて居るのか。』と云うあらうと云はぬばかりに首肯して、『お綾が其ては、何しても謝絶らなければならぬが……どうも思ふ様には行かないものだな。』

『何がですか。』と、お友は又問ふのであつた。

大助は松矢大臣高畑局長と自分との間に、深い関係のある事、謝絶するのに苦しんで居る事を、極手短に話して聞かせて、

『今も其事でも龍と争つて居たのだが、お綾は相續人ではあり、どうも他家へ出す事は出来ないのだな。』

お友は首肯した。

大助は此時不圖心に浮んだ儘、『これがお前を所望されたのだと、随分相談にならぬ事もないのだが。』

お友は眞紅になつて垂頭したので、大助は詰らぬ事を云出して、可厭な心持を發させたのではあるまじかと、ひどく氣の毒になつて、

『お友、お前氣に掛けては不可よ。お前ならば遣らうと云ふ考が、阿父さんにあると云ふ譯ではないのだから。よいかな、了見違をしては困るよ。』

『いゝえ……私で済むのなら。』と、お友は能は聞取れぬ程の聲で、『阿父さんが御困んなさるのなら、私で可きやア嫁つたつても……。』と、後は聞取れなかつた。

大助は斯と聞いて凝乎とお友を見詰めた。

(六十一)

大助は凝乎とお友を見て、『先方でお前を望むのなら、お前は嫁つても可いと云ふのか。』

『だつて、阿父さんが御困んなさるのなら、私は何様可厭な人の處へだつても……。』と、お友の聲は又聞取れぬ程低くなつた。

「左様か。お前は阿父さんの事を、能く其だけ思つて居て呉れるな。いや、大きに嬉しい心掛だ。」と、大助は機嫌克げにお友を見て居たが、其も些時の間で、「併し、先方の所望はお前ではなくてお綾だから。」

『それは其筈ですは。』

「えッ、それは其筈だ。」と、大助は眉を皺めた眼に、お友を屹度見て、「それは其筈だと云ふのは、何云ふ譯なのかな。それには何か事情があつて、お前が其事情を知つて居る様に聞こえるが。」

「え、私は知つて居てよ。」

お友は園遊會の夜、高畑から開得た事を話して、

『其女の人に姉さんが似て居て居たので云ふんですもの、私なんぞは駄目よ。』

お友の眼には涙が見えたが、大助は気が付かなかつたらしく、

『左様云ふ事情があつたのか。ふうむ。』と、じつと考へ込んで居た。

お友は父が自分の意中を察して呉れないのを、もどかしく思ふけれども、察して呉れる様に話されるものでなく、何したら自分が求める様に聞えないで、それで父が察して呉れて、姉さんの代に自分を嫁りたいと云ふ事になるだらうか。何様風に云つたなら、何云ふ工合に云廻したなら、父が其氣になつて、お綾は遣はされないが、お友ならばと云つて呉れ様か。どうしたならと、自烈體く思ふけれども、流石に其處までの云廻は出来ないのであつた。

『ふうむ、左様云ふ事情があつたのか。』と、大助は斯う繰返して、「其處を考へると、高畑氏の心中も

大いに氣の毒の様だが……いや、お綾を遣はすと云ふ事は、到底出来ないよ。』

『姉さんも可厭だつて——何しても可厭だつて、私へ約束を爲だつたんですよ。』

『なに、お前へ約束を爲た。』

父が屹度自分の顔を見たので、お友は自分が云過ぎたのに氣が付いて、はッと思つて顔を眞紅にした。けれども、大助はお友の意中に、何等の秘密があらうとも思はぬので、お友の様子を疑ふ念とては、發らう筈もないのである。お友は疑つて欲しい程に思ふけれども、其甲斐がなかつた。

『お前を所望されたのならば私も。』

お友は覺えず膝を進めた。

『お前を所望されたのなら、私も考へて見るのだが……高畑さんの方へ此方から云出されるものでもなし、まア兎に角謝絶する事に、私は決心して居るのだ。今夜も土岐が参る筈だから、其時斷然謝絶する積だ。お友、世の中の事は、多く意の如くならぬものだ。』

『左様ね。』と、お友は悄然とした語調で、「私が似て居ないから——姉さんばかしが似て居て居たから、阿父さんが其様に心配してお居てなされるのに。』

『は、は、は、。』お前は面白い事を云ふ兒だな。お前が似て居ないのが、何も些も悪いと云ふ事はない。似て居たにした處で、此方から望む縁ではないのだから、些も心配して呉れるには及ばぬのだよ。なに、何とか切脱けて行かれぬ事もあるまじから、些も心配して呉れるには及ばぬのだよ。』

大助が何してもお友の意中を察して呉れないので、お友はもどかしくて仕様がなけれども、此上

何とも云ひ様がなくなつて了つた。

『今夜ですか、謝絶つて了つひなさるの。』

『左様だ。』

『土岐さんが今夜入らつしやるんですつて。』

『左様だ。』

お友は今土岐の方を何とかして、自分の望を達するより外に手段が無いと思つた。それには母へも打合して置いた方が可いと思つたので、聽て父の前を辭して茶の間へ行つて見た。

(六十二)

お友が茶の間へ行つて見ると、お龍は尙ほ顔に怒氣を帯びて居た。傍には氣に入りのお辨さへ見えぬのに、お龍の怒氣が如何に劇しかつたか察せらるゝ。

お龍はお友を見返つて、『阿父さんのお話が、大變に長かつたのね。』

『其様に長くつて。』と、お友は甘たれた語調で斯う云つて、お龍の前にべつたり坐つた。

『今まで何を話して居てなの。』

『え、今まで。』と、お友は少し顔を背向けて、『姉さんの。』

『お綾さんの縁談の事で、彼時から今まで、随分長かつたはねえ。それで何なの、阿父さんは依然謝絶ると云ひなさるの。』

『え、左様なものよ。今夜土岐さんが御入來だから、其時謝絶つて了ふんですつて。』

『其様に可愛いのかね、お綾さんばかしを。』と、お龍は態と語調に力を入れて、お友に聞けがしに云つた。

お友は其様事は耳に入らぬ。

『阿母さん、阿父さんが姉さんの事を御断んなさるとね、御困んなさる事があるんですつてね。』

お龍は首肯した。

『だからね、私で可いのなら、私が嫁つても可けれどもつて、』

『お前さんは其様事を云ひなの。あの阿父さんへ。マア。』と、お龍は眞實呆れて了つた。

『だけでも、阿父さんは何でも謝絶つて了うつて、左様云つても居てなさるの。』と、お友は悄然となつた。

『お友さん。』と、お龍は平生になく屹度した語調で呼掛けて、『お前さんは其様に高畑さんに……何しても嫁きたいと思ひなの。』

お友は垂頭して了つて黙つて居る。父の前を辭する時は、お龍へ打合をして置く積であつたが、斯うなつては動かさうと思つても舌が動かぬ。

お龍はお友が斯程まで高畑に思入つて居るかと思ふと、可哀相でならなくなつて來た。娘氣に斯う思詰めると云ふのは、能々の事である。誰しも若い時には有勝の事で、自分とても覺がないのではないと、其身の若き時の事など思比へて、そゝろにお友の男を思ふ心根が可哀さうでならなくなつて來

た。けれども、お綾こそ邪魔物とは思ふが、お友には此家を相續させて、自分が此に係る積であるから、其心根が可哀相ではあるけれども、どうも高畑へは嫁りともなく、今とても左様思つて居るのであるが、さればとて此程に思詰めて居るのだから、何かして其望を遂げさせて遣りたいと思ふのである。何したものであらうと、種々に考詰めた上で、不圖斯う思ひ付いたのである。大助も今度の目論見が外れると、恐らく破産して了はなければならぬ。もし破産すると、お友に此家を相續させたに於て、此に係らうなどとは思ふも寄らぬ事である。それは目論見が外れた時の事ではあるけれども……いえ、兎角外れ勝なのは、今度の様な目論見だ。土岐さんも其處を心配して、何卒甘く行つて呉れれば可いが、七分迄は安心がならぬのだから、昨日であつたか云はれた。して見ると、先づ七分は外れると見込まねばならぬ。況てお綾の縁談を断つて了ふとなると、九分九厘までは成就せぬものと思はなければならぬ。成就せぬものと見ると、お綾よりはお友を高畑へ嫁はす事にして、充分恩を掛けて置いて、真逆の時の……これは土岐さんと一相談した上で、未の未までは充分に考へなかつたが、先づ斯うもして置いたらばと思付いた。

『お友さん、お前さんの心持が餘り可哀相だから、私が一つ骨を折つて見る事にしやうかね。』

『えッ。』と、お友は吃驚して顔を上げた。

お龍は莞爾して、『其様に心配を爲でない方が可いは、私が土岐さんと相談して見て上げ様から。』

お友は何卒とも云兼ねたが、意中の滿悦はありありと顔の色に見はれた。

『おほ、其様に嬉しいものかね。だけれども、無理もないはねえ。』

お友は顔の置場を失つて、袖を當て了つた。

(六十三)

お龍はお友が嬉し差かして、顔へ袖を當たのを左もこそと笑ひながら、

『お前さんは其様に嬉しいのかね。おほ、だがね、お友さん、私が受合つて上げる譯には行かないが、出来るだけは骨を折る積だから、まア安心して居て可いよ。』

お友は尙だ顔から袖を放し得ずに居た。

『私がお前さんの爲に骨を折る代には、お前さんも亦私の事を忘れなからうね。』

お友は驚いた顔を上げて、『私阿母さんを忘れるなんて、何様事があつたつても其様……。』と、お龍を凝視めた。

『なアにね、忘れても呉れてさへなきやア可いんだが……お前さんが高畑さんの奥さんに御成りだつたら、毎日の様に遊に行く積だが、其時邪魔物にお爲だと……其様事をお爲ぢやなからうね。』

『幾日來て居て下すつたつて、邪魔になんかしやしないは。私御恩報だと思つて、何様御馳走でもしてよ。』

『お前さんは本統に可愛らしい事を云つて呉れた。』と、お龍は満足げにお友を見て、『一年行つて居たつても、二年行つて居たつても、一生厄介に成りに行つたつても、決して邪魔にお爲てはなからうね。』

「一生ッ。」と、お友は頭を傾けて、「一生なんて、何故其様事を云ひなされること。」

「左様じゃないけども、阿母さんが一生だなんて、可笑な事を云ひなされるからだは。」

お龍は首肯して、「だッて、お前さん考へて御覽なさい。私はお前さんばかりを樂みにして居たんだのに、お前さんが高畑さんへ嫁つて了ひだと、私は實に落膽して了ふんだよ。後はお綾さんと、共に三さんだらう。二人とも私と氣が合はない事は、お前さんが知つて居てぢやないか。何様事でお綾さんと喧嘩しないとも限らないし……一同て私を背めるに違ひないから、背められる様だッたら、私は此家に居ない積さ。其時に頼にするのはお友さんばかりだから、萬一其様事になつたら、私を置いてお呉れだらうね。」

お友もお綾とお龍との間に、今後一入の不折合が發らうとは、豫め思設けられる事である。お龍が背められる事はないとしても、心に面白くない事が頻りに發るだらうとも思設けられる。成程、此迄全く自分を可愛がつて呉れた。自分を唯一つの樂みとも頼とも思つて居たと云ふのは、些の虚情も無いらしい。今日まで自分が姉より上に立ち得て居たのも、全く今の母の庇蔭であつたのだから、萬一今聞く様な場合の發る事があつたら、自分は充分報恩の道を講ぜねばならぬ。況て、今度の自分の希望をも、盡力して遂げさせ様と云つて呉れられるのも、一年二年は愚か、生涯忘れられる義理でない。愈々希望が遂げられたら、何程の迷惑をしようとも、決して厭ふ所でない、今は深く考ふる暇もなく、唯斯う思ひ詰めて居るのである。

お友はいと心地よげな面色をなし、「阿母さんさへ可きやア、私何時までだつても可いのよ。」

「屹度ですかえ。」

「此様事に虚言は云はれないは。」

「ぢやア、明日ッからでも、御邪魔さすでも。」

「あらッ、まだ何とも極りもしないんだのに。おほい。」

「おほい。だけでも、もう極つた様な氣がするんだよ。」

お友は心から嬉しげに莞爾して、羞かしさに應て又垂頭して了つた。

(六十四)

高畑善也が赤阪新町の住家、洋風の應接所に相對して居るのは、主人の善也と片桐代藏士である。卓子の上には、火酒の壺に下物はデセールにチョコレート、主客ともに其類に酔を上せて居た。片桐はデセールの一箇を口へ投込みながら、

「では、何かね、八十島の方も着々歩を進めて居て呉れるのだな。」

「それは無論さ。」と、高畑は葉巻の灰を指頭にて彈落しながら、「君の方でも新聞紙の所謂輿論の攻撃と云ふ奴と、黨人の強請とは、充分に防禦して呉れんと困るよ。此前の拂下一件の時も、既に地位まで危ふくする處であつたが、漸と切抜けて、僅かに今の椅子を去らんで濟んだ位だ——君が知つて居られる通だ。て、八十島の件も、實は謝絶したかつたのだが、君とは同窓ではあり、年來事を共に

して居るで、此度までは盡力する積で、大臣へも充分協議を遂げてはあがるが、何卒ねえ、秘密を保つて呉れる様に頼みたいのだ。

片桐は首肯しながら、『其は注意を受けるまでもないさ。』

『いや、君のは大いに當にならんのだから。』と、苦笑をしながら、『一年の木曾の山林一條では、大いに苦しめられたからな。彼筆法を用られては閉口だ。彼時などは、些し意に満ん事があると、國權黨の後援を當に着て、脅嚇がましい言動に出たのだから、いや大いに驚いたのだ。如彼なつて來ると、君の眼中には唯利あるのみで、同僚の友誼も何も無いのだからな。』

片桐は頭を掻きながら、『は、は、は、。』と、彼は仲間の奴等に嗅付けられたものだから、事情止むを得んかつたのだ。最初のコンミッションだけでは、何もならん事になつたて、實に汗顔の至さ。あは、い。』

『今度も亦事情止むを得ん事になるのだらう。』

『いや、何して。仲間の奴等に嗅付けられた日には、僕もまた先度の様な目に合ふのだから、今度と云ふ今度は、決して漏す様な事は、それは充分安心して居て貰ひたい。』

『其點だけは確と云つて置くよ。此前の様な事になつて、我輩一人の進退で濟めば可いが、大臣に迄累を及ぼす様では、如何にも相濟ん譯だからね。』

『いや、其はもう決して、君を煩はす様な事は無いから、何卒安心して呉れ玉へ。』と、片桐は麥酒の壺を取上げて、自分の水盞に満した。

高畑は尙不安心げに見受けられたが、『君は或ひは大丈夫かも知れんが、彼土岐と云ふ男も實は信用が出来ないのでね。彼男とは君よりもずつと前から交際して居るのだが、秘密を守るなどと云ふ事は、到底望まれんので、實に困るのだ。自分の利害に關せん事だと、如何にも淡泊らしく見えるのだが、内實大違で、全くの喰せものだからね。』

『いや、其程の事もあらず。僕も年來親く交際して居るのだが、此頃は大いに信用するに足る様だね。』

『いや、何も不安心だ。』

高畑の顔を凝乎と見て居た片桐は何を思出したのか、俄かに微笑を含みながら、

『君は土岐を其程信用して居らんのかね。』

高畑が首肯いたのを見るより、片桐は笑出しながら、『は、は、は、。左様ではあるまひ。其程信用せん男に、終生の一大事を依頼すると云ふ事は無い筈だがね。』

『なに、終生の大事。』と、高畑は態とかも知れぬが、思得ない様子である。

『あゝ、遠愧けては不可よし。君は八十島の娘を、』

『うゝむ、其事か。』と、高畑も覺えず笑出した。

(六十五)

片桐は嘲るが如き笑を含みながら、『高畑さんの話も、往々當にならん事があるので、實は驚いて居

るのだ。君が些も信用するに足らんと云ふ土岐に、八十島の娘への縁談を依頼したのは、土岐が八十島と親密に交際して居る點から、彼を撰んだのだと云へば、其はまア可いとして置いて、彼園遊會の夜、君が八十島の妹娘に、外交的詭辯を揮つた手際などは、僕等木強漢の到底企及し能はざる處だ。いや、恐入つたものだ。あははははは。

「君が其を知て居る——如何にも不思議だ。」と、高畑は小首を傾けながら、「外交的詭辯などと、何か我輩がお友と云ふ娘を……うむ、何だ。我輩が彼娘に庭内を案内させて、夜の宴の席に着くのが遅かつたから、君が何か邪推をしたと見える。はははははは。」

「邪推。はははははは。其様事を云ても不可よ。君は誰も聞いて居なかつたと思つて居るのだね。」

「えッ、君が聞いて居たのか。」と、高畑も流石に顔を紅めて、「はははははは。此は恐入つたね。」

「はははははは。土岐も君が詭辯の巧妙なものには恐入つて居る様だ。」

「えッ、土岐も知つて居るのかい。」

「知つて居る處か、我輩は土岐から聞いたのだ。」

「愈よ恐入つたね。あははははは。」

「いや、まだ恐入る事がある。」

「えッ、まだ何か他に。」と、高畑は笑を含んで居る片桐の眼を凝乎と見た。

「土岐は誰から聞いたと思ふかね。」

「土岐が誰から……左様さ。」と、高畑は頻りに小首を捻つて居たが、覺えず葉巻筒を取落して、「あ、

分つた、母親だ——お友の母親だらう。」

「左様だ。併し、驚いたね。」と、片桐は眼を睨りながら、「君は何か、母親が偷聽して居るのを承知しながら、彼娘に其様事を云つたのか。實に大膽な事をやつたな。」

「真逆に、我輩といへども其程無耻な人間ではないさ。お友と話して居た時、植込の蔭で咳拂をした者があつたが、お友があらッ阿母さんと云つて、急いで其方へ行つたのだ。併し、其時は誰も居なかつたのだが……して見ると、矢張母親だつたのだね。いや、其は大失敗だつた。」と、高畑は稍失望の色を見はした。

「處が、其が失敗にあらざるさ。」と、片桐は又麥酒の一杯を傾け、椅子を進めながら、「母親が酷く感心して居ると云ふのだ、君が其時の云廻が巧いと云つて。」

「馬鹿な事を。」と、冷笑つた。

「いや、全くだと土岐は云つて居る。高畑さんの様に旨い事を仰有つた日には、若い娘などは堪りはしません、彼では私だつて迷ひますは、と云つたさうだ。」

「母親がね。あはは。處が、誰も迷はないから不思議だらう。」

「處が、一人迷つて了つたから、母親が大いに困つてると云ふ事だ。」

高畑は唯笑つて居る。

「君の手段も酷だつたてはないか。最初からお綾さんを欲いのなら、何もお友の心を奪ふ必要もなかつたらうのにな。」

「なに、お友の心を奪つた。」
「左様さ、お友は彼時から非常に君を慕つて、」
「詰らん事を云ふものでない。」

「いや、全くだと云ふぞ。それに、君が結婚を申込んだのは、却つてお綾さんの方だから、困るではないか。お友さんは其爲に失望と嫉妬の爲に病氣になつて了つたと。」

「止さんかね。其様詰らん事を云つて何する積だ。は、は、は、は。」

高畑は片桐の云ふ處を、一時の座興と思つたらしく、一笑の價だもなしと云つた風に受け付けないのであつた。

「高畑さん、實際片桐さんが御話の通です。」

意外にも斯う云つた其聲は土岐頼夫で、何時扉が開いて居たのか、二人が見返つた時には、莞爾笑を含んで入口に立つて居た。

(六十六)

「えッ、土岐君でしたか。さア何卒これへ。」

高畑は土岐を迎へて椅子に倚らせ、呼鈴を鳴して侍女を呼寄せ、麥酒の外葡萄酒を加へ、下物さへ他の二三種を添へしめた。

片桐は高く笑ひながら、「平のお客と御媒酌人とは、其待遇の冷熱如此かね。あは、は、は、は。」

高畑は苦笑をしながら、「君も麥酒には飽いたらうと思ふから、態と葡萄酒を加へた迄の事。」

「は、は。成程、其口氣で、ころりと参らすのだな。」

「全くてがすよ。」と、土岐は合槌を打つて、「高畑さん、實に當惑したてがすな。」

高畑は早合點の體で、「結局不調といふ次第かね。」

「いや、左様ではないが。」と、土岐は擬乎と高畑を見て笑つて居る。

片桐が傍から、「お友さんの一條だらう。」

「いかにも其てがす。」と、土岐は當惑の眉を擧めて、「高畑さん、貴方が悪いんだね。貴方の奥さんに——姉さんが高畑さんの奥さんになれば私は死んで了ふと云ふのでね。」と、からりと笑ふのであつた。

「不可ねえ、君迄が。」

「いや、全く、正真正正銘擬も嘘もない處が、全く今御話致した様な次第でがして、當惑して居るの

は、私と八十島の妻君、有卦に入つてお居るのが高畑さんお一人だ。」

「君、實際かね。」と、高畑も稍眞面目になつた。

「實際か實際でないか、御差支がなければ貴方が、お友さんに逢つて戴きたい位のもてがす。」と、土岐はにやりと笑ひながら、「就いては、八十島の妻君と私の心持で、貴方に御相談を願ひたいてがす

が。」
「よろしい、何はう。だが、全く君と八十島の妻君の心事として聞いて、差支は無いのかね。」と、高

知は至極眞面目になつた。

『勿論でがす。』

『然らば伺はう。』

『僕は遠慮した方が可からう。』

片桐が椅子を離れ様とするのを、高畑は早くも押へて、『いや、君が居て呉れる方が、却つて好都合だ。』土岐君、君の方にも差支はないだらう。此が人に秘す可き相談と云ふのではなし、況て片桐君だ、土岐君差支はありますまいな。』

『はい、貴方にさへ御差支がなければ。』

『それでは傍聴の榮を得やうかね。』と、片桐は土岐と自分との水壺に葡萄酒を注いだ。

『それで。』と、高畑は土岐の發語を促した。

土岐は少時語を發さなかつたが、聽て沈着拂つた語調で、『貴方か今殺さうとして御居ての婦人を何てがせうか、一つ助けて戴きたいと云ふのが、私と八十島の家内との願望でがすがな。』

『うむ。成程。』と、片桐は腕組をして耳を傾けながら、『左様ありさうな事だ、うむ。』

高畑は片桐を見返つて、『何が左様ありさうな事かね。』

『何がと云つて、君を慕つて戀病をして居るお友さんを、何か助けて遣つて呉れまひか——お綾さんの代に貰つて遣つて呉れまひかと、斯う云ふのだ。』土岐君、君と八十島の妻君との希望は先づ左様だらう。』

土岐は頻りに首肯いて、『全く片桐さんの御推察通り、高畑さん、如何なものてせうか。』
高畑は稍不快の色を見はし、『それでは、お綾さんは遣れないが、お友さんならばと斯う云ふのだね。』
『いや、左様誤解をして下さつては。』と、土岐は制する様に手を舉げて、『何あつてもお綾でなければと云ひなされば、両親に異存は無いてがすが、肝腎の當人が平に御免を被りたいと云つて居りますてな。』

『なに、お綾さんが我輩を嫌ふ——高畑の妻に成るのは可厭と云ふのか。』

高畑は非常に激した体で、顔色は變り、聲は怒に頓へて居た。

(六十七)

土岐は高畑が激怒したのを見ながら、葡萄酒に口を潤ほし、『高畑さん、貴方にも似合せてがすな。お綾が貴方を嫌ふなどは、以ての外で、當人は妹にも勝して、貴方の奥さんに成りたいかも知れんてがす、いや成りたい事は無論で、私が保證しても宜し。』

『艶福眞に羨む可しだ。徒らに傍聴して居るのも氣が利かん。飲むべし、く。』

片桐は麥酒を滿々と盈して、仰ぐばかりに水壺を傾けた時、覺えず噎返つて、上着の胸から袴の膝へ掛け、見るも氣の毒な程汚したのである。

『大失敬をしたね。』

卓子掛の汚れたのを、手巾で拭ひ取らうとする片桐が滑稽な様に、早くも椅子を離れて居た高畑も

覺えず失笑しながら、

『いや、よろしい、其儘にして置き玉へ。』

『あは、失敗く。』

『いや、失敗は我輩の事だ。』

高畑が又苦切らうとした時、土岐は隙さず、『左様でないがす。貴方の今の場合を失敗と云へば、成効と云ふのは何様な場合を申したら可いてせうかな。いや、まア御聞き下さい。申さば姉と妹の間に競争が開かれたとも云ふ可くてがす。其處で感心す可きは、お綾の意氣だらうと思ふてがすな。自分を捨て妹に譲らう——義理のある妹の望を遂げさせて、自分の戀を捨様と云ふのは、普通の婦人には出来ない事であらうと、私は非常に感服したてがすな。』

『君は感服したかも知れんが、我輩は些も感服せんね。我輩が望んだ婦人を得る事が出来んで、』

『いや、お語ですがな、私に云はせると、二人の娘ともに貴方は得て御居てなされるのがすよ。』

『何してね。』

『まだ御解りにならんてすか。』と、土岐は愛嬌ある笑を含ながら、『二人とも貴方を慕つて居つて、姉は義理故に妹に譲つたのでがすが、其心は既に貴方に屬して居ると申さんければならんてがす。妹の方は其心に合せて、其人も貴方に屬するものとすると、申さば二人とも貴方が得られたに等しからうと思ふてがすな。それに、貴方が唯婦人の容色ばかりを望まれたものとは、私には信ぜられんてがすから、姉の志を遂げさせてお遣りなされるのは、所謂人の美を成すものがして……なア片桐さん、』

貴方は何思はるゝてがすな。』

『いや、僕はもう何れにも賛成するね。』と、片桐は高畑に對ひ、『何だね、お友さんで満足したら可いだらう。容色にしても僕は寧妹君を採るね。舉動が快活で、廿世紀的だ。皮膚の色は佳し、愛嬌はあるし、交際社會に出したら、お綾さんよりか遙かに可いだらう。』

『全くてがす。それに、八十島氏が最も愛して居られるのは、寧お友さんでがす。今の妻君は無論の事で、お綾さんの方は、斯申すのも異なるのですが、前妻の子でがして、其前妻が今日でも近所に住んで居つて、其關係が何も面倒らしいてがすな。お友さんには其様事は無いので、少しも面倒な事がありませぬ。高畑さんと八十島氏の今後の御關係から申しても、妹さんの方が佳からうと思ふてがす。』

高畑は尙ほ返辭をしなかつた。

片桐は迂かしげに、『何するの、君は。元來君が悪い——君が藥の用ひ方が強かつたから悪いのだ。眼眩する程藥を投じて置いて、今更責任が無いと云へるか。汝に出るものは汝に還るだ。お友さんに決めて了ふさ。』

土岐が又口を開かうとするのを、高畑は遮つて、『宜しい、諸君の意見に従ふ事に決心した。』

土岐は覺えず額を押へて、『深く謝します。此で漸と安心しました。片桐さん、貴方へも厚く御禮を申します。』

此より話頭は幾箇にも分れたが、片桐の發議で、其夜は木挽町の或待合に三人ともに妓を擁して、

一夜を明したと云ふ事である。

(六十八)

お綾は三之助から父と高畑との關係は、縁談を謝絶するに付いて、一方ならぬ困難の事情ある事を聞き得た上に、父と繼母との間に、自分を高畑へ遣はす遣はさぬの争から、一場の口論を起し、其結果は繼母が非常に立腹なし居る事をも、お大から聞いたので、一入心を痛めて、今後何なり行くものかと、唯々思に惱むのみで、寝食も安からねば、自然と人の目に付くほど面瘦て来た。

其とは反對つて、つい此頃まで、いや昨日までも詰らないから死んで了ふなどと、口癖に云つて居たお友は、面色もささくくと愛嬌が出て、お辨なぞを相手に以前にまして、はしやいて居るのであつた。のみならず、お綾へ對する様子も、先日から哀れでも請ふかの如き眼付をなし、媚るが如き色さへ見えて居たのに、通すがりに後毗に掛けて、嘲けりの笑さへ見せる様になつて来た。

大助はお綾の縁談は斷然謝絶する様に決心して、既に一應は土岐へ其意を通じたのであつたが、又手當惑するのは、例の官有林拂下の許否如何で、高畑が縁談の謝絶を怒つて、不幸なる不認可の結果を見る事になりはせぬか。それなれば其でも可い。自分の地位を利用して、他の娘を犠牲にさせ様と云ふ陋劣な心掛の男であるなら、尙々娘の夫と捧かす可き人物でない。のみならず、今後如何なる難題を云掛け様も知れぬ。難題の都度、彼の意を通させる様では、後來如何なる結果を見様も知れぬ。不如意の事があればこそ、彼等如きに依頼の心を起したれども、なアに、此難場を切抜ける手段が、

他にないとも限るまひ。高畑の意向は、今日にも土岐の返辭を聞けば直ぐに分る。其上で又手段もあらうからと、屈託の餘り此迄の計畫を抛擲たうとの意さへ決して居た。

けれども、思も掛けぬ商業上の失敗から、年來の苦心に漸く仕上げた八十島銀行大東商會を閉店するに到つたなら、今日の信用は地に墮ち、其結果は實に怖る可き逆境に立たなければなるまひ。八十島大助の名は、自惚を云ふのではないが、經濟界に重をなし、實業社會の實權を此雙手に握つて居た事もあつた。それが一朝逆境に立つたら何か。獨身の昔ではない、お須賀と差向の時とは違ふ、お綾にお友と云ふ娘もある。世の憂き事は知らず、我家は何時も斯うある可きもの、様に思つて居る二人の娘に、人に面も合されぬ程の思をさせる……あ、何して其が忍ばれ様。一朝墮ちた信用は、容易に恢復されるものでなく、其時の相談相手となる可きものは、彼三之助一人と思はねばならぬ。此とも尙だ少年に齊しいのであるから、左程の心配をさせるのは如何にも心苦しい。彼を思ひ此を思ふと、彼山林拂下の計畫の不結果に了つた時には……他に手段としては、差當つて思得ぬ。あ、何したものであらうかと、四六時思惱んで居た。

大助は二人の娘の何れを深く愛して居ると云ふのではないか、お綾がお龍に愛せられず、何時も遠慮勝に——父の自分へ對つてさへ、自然の聲では話をなし得ず、動もすれば口を噤んで、溜息でも吐いて居るかの様子が、如何にも可哀相でならぬ。今度の事に付いても、其衝動に當り、而も厭がり切つて居ると云ふのだから、嘸も其結果を氣遣つて居様。今朝見た時にも勝れぬ顔を爲て居たが、何も其程心配するに及ばぬのに……いや、此處に呼んで慰めて遣らうと、掌を叩いて侍女を呼んだ。

恰好聞付けたのはお大で、大助が居室の敷居の外に手を支いて、『お呼び遊ばしましたか。』
『お大か、お綾は何して居るかね、鳥渡来る様に云つてお呉れ。』
お大は何だか胸騒がしながら、急いでお綾を呼びに行つた。

(六十九)

お大がお綾の處へ来て見ると、お綾は例の通り物思はしげな顔をして居た。

『お綾さま、旦那さまが御呼びなすつて居らっしゃいます。』

『え、私をなの。』と、眉を寄せた。

『左様で御在ます。』

『何の御用があるんだらう。』と、お綾は立上つて小聲になり、『彼事が決つたのではないか知ら。』

『御縁談ですか。』

『あゝ。』と、落胆した体だ。

『其様事はありませんまひよ。旦那さまが御謝絶遊ばしたつて云ひますもの。』

『だけでも、三さんから聞いている事もあるんだから……何しても断り切れなかつたのではないかね。』

『何とも知れませんが、其様事はありませんまひよ。』

『阿父さんは何して居てなすつて。』

『何だか考事を爲て居らっしゃつた様で御在ました。』

『考事を……ちやア屹度左様なんだは。何したら可いだらう。お大、何したら可いだらうね。』と、もう泣出しさうな顔をして居る。

お大は態と笑出して、『ほ、ほ、ほ。』何遊ばしたんですよ。何方とも分りもしない中から、其様に御心配遊ばす事がありますものか。萬一御縁談が御決り遊ばした様な事を仰有つたら、其時お断り遊ばせば御宜しいではありませんか。私は何しても嫁さたくありませんと、其時こそ剛情をお張り遊ばすが能う御在ます。』

『だけでも、三さんに聞いた事はあるしね、私には剛情は張れなくつてよ、阿父さんへ御氣の毒で。』
『ですけれども、左様遊ばすより外に詮方がありませんもの。』

『だけでも……まア行つて見やう。そしたら分るはね。』と、お綾は父の前へ出るのが可怖しい様な気がして、悄然と歩を移した。

お大も氣に掛るから、お綾の後に尾いて主人の居室まで送つて行つた。

『入らっしゃいました。』

『お、お綾、此處へも入で。』と、大助はにこ／＼笑を含みながら、『些も遠慮する事はない。さア、サツと此處へ來な。』

『は。』と、お綾は父の傍近く坐つて垂頭いた。

大助は垂頭いて居るお綾を凝乎と見ながら、

『何かしたかな——頭痛でもするのではないかな。何も顔の色も勝れない様だな。お大、お綾は鹽梅

でも悪いのかな。

『いえ、御病氣では居らッしやいませんけども……』と、お大は云淀んだ。

『病氣ではない。其は何よりだ。』

『ですけども……』と、お大は又云淀んだ。

大助は屹度お大を見て、『病氣ではないが、何かして居ると云ふのか。』

『何も遊ばしませんけども、御心配遊ばして居らッしやいます事が、』

『なに、心配して居る事がある。』と、お綾を見返つて、『何を其様に心配して居てかな。心配な事があれば遠慮する事は無いから、阿父さんへ話して見るが可いではないか。』

お綾は一入深く垂頭いて了つた。

大助はお綾が心配して居ると云ふのは、高畑の縁談であらうとは察して居る。其を察して居るからこそ、今しも此處に呼んだ程であるから、お綾の口から其事を聞取るには及ばぬのだ。けれども、其は斯であらうとは云かねたのか、お大へ對ひ、

『お大、お綾の心配して居る事を、何もお前が知つて居さうだ。何様事か私へ話して呉れなひか。』

『はい、あの高畑さまの、』

『うむ、彼事か。左様か。はははは。其事ならば些も心配する事は無い。土岐へ断然断つて遣つた。はははは。詰らん事を心配したものだ。』

お綾は吃驚して顔を上げた。而も父の語調が如何にも事も無げであつたので、果して詰らん事であ

つたかと疑はれもして、覺えずお大と顔を見合した。

大助はお綾の顔に尙ほ不安心な色は浮びながら、此室に來た時とは違つて、悄然とした様子が多少除れたのを見て、

『お綾、まだ不安心かな。はははは。まあ考へて見るが可い。乃公がお前を他家へ遣はす心が、些でもあつたとすると、高畑の縁談にしても、些もお前へ話をしない筈が無いではないか。自分の子だとは云ひながら、一生の大事を決めるのに、無断で計らう事は、親としても出来るものではない。お前にしてもお友にしても、決して他家へは遣らぬ。お前は家の相續人、お友は別家をさせて、八十島の家を二つに分けて、姉妹仲能く兩家を立て、行くのが、お前達が私へ對する孝行と云ふものだ。乃公は其より他に望は無いのでな、何卒お友とも話合つて、二人とも考違などをして呉れない様に、これは乃公から二人へ御頼だ。はははは。此ならば、もう安心して呉れたらうな。』

お綾は親の心は此程難有いものか、斯う思つて居て下すつたのに、無用の取越苦勞をして、阿父さんが萬一高畑さんの縁談を承知なさる様な事はあるまいかと、多少は疑ひもし、又左様でもあつたらと恨めしくも思ひ、今此室に呼ばれた時にも、尙ほ疑つて居て、此慈愛深い阿父さんのお傍に來るのを、辛い様にも可怖様にも思つたのは、實に勿体ない事を思つて居た。濟まない考を有つて居たと、嬉しいが第一、勿体ないやら恥かしいやらで、胸が斯う切ない様で、少時は禮を云ふ語さへ出なかつ

(七十)

つたかと疑はれもして、覺えずお大と顔を見合した。

大助はお綾の顔に尙ほ不安心な色は浮びながら、此室に來た時とは違つて、悄然とした様子が多少除れたのを見て、

『お綾、まだ不安心かな。はははは。まあ考へて見るが可い。乃公がお前を他家へ遣はす心が、些でもあつたとすると、高畑の縁談にしても、些もお前へ話をしない筈が無いではないか。自分の子だとは云ひながら、一生の大事を決めるのに、無断で計らう事は、親としても出来るものではない。お前にしてもお友にしても、決して他家へは遣らぬ。お前は家の相續人、お友は別家をさせて、八十島の家を二つに分けて、姉妹仲能く兩家を立て、行くのが、お前達が私へ對する孝行と云ふものだ。乃公は其より他に望は無いのでな、何卒お友とも話合つて、二人とも考違などをして呉れない様に、これは乃公から二人へ御頼だ。はははは。此ならば、もう安心して呉れたらうな。』

お綾は親の心は此程難有いものか、斯う思つて居て下すつたのに、無用の取越苦勞をして、阿父さんが萬一高畑さんの縁談を承知なさる様な事はあるまいかと、多少は疑ひもし、又左様でもあつたらと恨めしくも思ひ、今此室に呼ばれた時にも、尙ほ疑つて居て、此慈愛深い阿父さんのお傍に來るのを、辛い様にも可怖様にも思つたのは、實に勿体ない事を思つて居た。濟まない考を有つて居たと、嬉しいが第一、勿体ないやら恥かしいやらで、胸が斯う切ない様で、少時は禮を云ふ語さへ出なかつ

た。

お大はさも勇んだ語調で、『お綾さま、ですから御心配遊ばす事はありません、私が彼様に申上げたてはありませんか。今と云ふ今、全く御安心遊ばしたてせう。』

『本統に。』とばかりで、お綾は自分にも尙ほ少時語が出さうに思へなかつた。

大助は莞爾しながら、『お綾、お前は極素直な資性だから、お前へ注意する必要も無いのだがね、お友と仲能して、未々まで力になりあつて呉れる様にな。彼女はお前とは違つて、沈着の無い性分だが、併し悪いと云ふ程でも無い様だな。』

お大が傍から、『左様で御在ますとも、お綾さまとは全然御気分が御違ひなさいます。』

大助は首肯しながら、『併し、彼でも可愛い事を云つたぞ、お綾の縁談を餘所ながら心配して居たものと見え、昨日であつたか、私で済みますなら、姉さんの代に嫁ても可いと云つてな、姉さんは可厭つてお居てだからと、繰返し云つて居たぞ。』

お大は覺えず笑出さうとしたが、大助が凝平と見て居たので、漸と耐へて垂頭して了つた。

お綾は態とならぬ笑を浮べて、『左様でしたか、お友さんが。私の事を其様に思つてお呉れですと、私も心強う御在んすわ。』

『お前が左様云つて呉れると、乃公も大いに安心だ。お大、お前もお綾同様に、お友を世話して遣つて呉れる様にな。』

『はい。ですけども、お友さまには、御新遣様も御居てなさいますし、お辨どんやお定どんが御附き申

して居ますから。』

『これ、其様事を云つて呉れるな。お前が云はないでも、乃公は悉皆知つて居る。他の者へ頼んで置いて済む様なら、改めてお前に依頼はしない。何も云はないで、乃公の依頼を含んで居て呉れ。』

『はい。』と、お大は黙つて了つた。

室の彼方に足音が聞こえて、敷居の外に手を突いたのは松田老人である。

大助は松田を見返つて、『何か用かい。』

『土岐さんが御入來になりました。』

『土岐が來た。左様か。』と、お綾に退く様に命じて、『直ぐに此室へ通して呉れ。』

『はい。』と、松田老人は退いた。

お綾は土岐が來たのは高畑の返辭を齎らしたのであらう、父の心は決して居るけれども、尙ほ氣に掛りながら、お大を殘して退いた。

(七十一)

土岐は身を反し頭を掻きながら、大助を見た眼に笑を湛へて、『いや、實に弱つたてがすよ。先生非常な熱度で、是非お綾さんを貰ひ受けねばと、最初は何と云つても受付けなかつたてがす。』

大助は稍氣勢を損じて、『お綾を遣はさんければ、何だと申すのですかい。』

『貴方が又激して下さつては困るてがすな。』と、土岐は態と愛嬌を有つた語調で、『高畑さんを漸と和

めて参ると、又貴方の御機嫌を損じるとあつては、頼夫殆んど途方に暮れる次第でがして。はい、高畑さんと交渉の始終を、兎に角御聞取を願ひたいものでがす。

「いや、御尤、此は大きに乃公が軽卒だつた。然らば伺ひますかな。」

「はい、何卒御聞取を願ひますので。」と、土岐は態と語を途断らして、喫烟一二服の後、「先づ貴方から御依頼の通、お綾さんは他家へ出されぬ相續人にて御居ての事を話しましてな、折角の御所望ではあるが、平に御謝絶を申しますと、斯様申しますとな、先生もう顔色を變へて了つたてがす。」

「直ぐに激して了はれたのですか。」

「如何にも左様で、相續人だから下さらんと云ふのは分つた。併し、八十島さんに御娘御は御一人てはあるまひ、お友さんと申してお綾さんに妹御が御居ての事も存じて居る。お綾さんには是非相續させんども、其處は何とか御工夫がありさうなものだと、まア斯う云つた様な事を申されたてがすから、實は私も。」

大助は耐らなくなつて、「随分立入つた御指圖と云ふものだ。お綾に相續させ様と、お友にさせ様と、其邊の指圖まで為様と云ふのは……いや、官吏なぞと申すものは……我儘を云ふにしても程がありますわ。」

「全く貴方の仰有る通だ。私も餘程癪に障りましたで、思ふ様云つて遣らうと、既に口まで出掛つたてがすが、其處に高畑さんが又申した事がありますてな、はう。」

「何か又他に。」と、八十島は額に縦に通つた疝癪筋を小指の太さ程に見はし、「その他に何様な事を……怪しからぬ話だ。」

「いや、此は高畑さんの方にも、大きに道理のある申分てかして。」と、土岐は又額を撫てながら、「此には私も返す語がアせんてな、酷く弱つたてがすよ。は、は。」

大助は眉を擧せて、「はア、何様な事を。」

「いや、私も大きに弱つたてがすな。土岐さんお前も考へて見るが可い、八十島氏の今度の内願の筋は、果して何云ふ筋のものであるか、其を考へて呉れたら何だ。此事が世間に曝露して、新聞紙の攻撃となり、政黨屋の問題になつたら何だ。私の地位は何ならうと思ふのだ。山林局長は敢て誇る可さでない、惜しむ可き官職では無いから、其を捨てるのは宜しいが、輿論の攻撃から今の地位を打落さるれば、私の信用は其時限で、公生涯は此に終局を告ぐるものと思はんければならぬのだ。八十島氏は何と思つて居らるゝか知らぬが、私は如此き危険を侵しても、其依頼を容れて、八十島の今日の希望を達しさせたいと、斯う考へて居たのだ。併し、其は致し方ないとして、八十島氏が其程冷淡に私を遇し様と云ふのなら、其て宜しい、私も亦願する所が無ければならぬ。とな……いや、私も此には鳥渡返辭が出せんでな、大きに當惑したのでがす。」

大助も高畑の云ふ處を、一應道理があると思つたのか、片腕を組んで、小首を捻りながら煙草を喫むのであつた。

土岐は大助が當惑したらしい様に、又語を繼いで、「非常な見脈でがしたて。」

大助は屹度した語調で、土岐の語を遮へて、「それでは愈よ手切と云ふ事に。」

『いや、其處には又な、今お話致すがすが。』と、温茶に喉を潤すのであつた。大助は掌を敷してお大を呼んで、麥酒を持來たる様に命じた。

《七十二》

土岐が麥酒を二杯飲んで、水壺を下に置いた時、大助は用があれは呼ぶからと、お大を退けて了つた。

『土岐さん、今の御話の後を伺ひたいですが。』と、大助も流石に胸安からず覺えながら、『御話の様子では、まだ手切になつたと云ふ譯でも無い様ですな。』

『はい。此て手切に致しては、貴方も定めし御迷惑であらうし、私も……いや、私ばかりではありませんぢや、片桐も失望するでがすよ。彼男は短氣でがすて、腹立紛に世間に吹聴する、騒が大きなだけで、御氣の毒でがすが、貴方の秘密も曝露する懸念なきにしもあらずて、些も益する處が無いでがすな、何方から考へましても。』

『左様さ。』

『其に就いて、私の一存で……無論貴方へ御相談を致した上で、と思はんでもなかつたでがす、先方の火の手が劇しいので、些時も早く和めて置かないと、思ひましたで、つい御協議も致さんでがして、今になつて考へると、些と僭越の所爲であつたかも知れんでがすよ。』

何が僭越な所爲であつたのか、土岐の云廻が、如何にも曖昧なので、大助は些も要領を得ないので

ある。要領を得ないだけに、土岐が何等の提案をしたのであるか、一入氣掛てならぬ。

『土岐さん、今だけの御話では、些も要領を得ない様に思はれますが、君が何云ふ所置をされたのか、唯僭越とばかりでは……乃公に遠慮されるには及ばないです。何云ふ提案をされたのか、承はつた上で、乃公の意に合はんければ、取消してお貰ひ申す迄の事です。』

『いや、もう到底取消す譯には參らんでがす。私が受合つて歸つて來ましたでな。』と、能々の專斷に出たものらしく、左も恐縮さうに頭を掻いて居た。

大助はもどかしくなつて、『君が受合つて來て、到底取消す譯に行かないと云はるゝからは、随分大切な事らしく考へます。』

『全く大切な事で。』と、又語を切つたが、今は仕方が無いと云ふ風で、『八十島さん、此義は私から折入つてお願ひ申すがすが、何卒御立腹なく、事を圓滑にお運ばせの御合で御考を願ひたいものでがすな。高畑さんが先刻も御話し申した様な見脈でがすから、事を破りたくない、三方四方圓滑に治めたいと存じましてな、實は其の……お綾さんの代に其……お友さんをお遣はしになつてはと、斯存じ付たので、僭越とも專斷とも何とも申し様のない次第でがしてな……まア左様云ふ事に受合つて歸つて來た様な譯でがして。』

大助は覺えず煙管を握つて居た手を額はせた。

『お綾の代にお友を……高畑氏へ遣はす事に……お前さんが受合つて歸つて來た——取消の出來ない程堅く約束をして……あのお前さんの一存で。』と、大助は餘りの腹立しさに、語調は亂れて、聲も

顔へた居た。

『左様御立腹では、頼夫非常に當惑致すがすよ。ですから、僭越とも專断とも實に申譯がありませんと、先刻から御詫をして居る様な次第がして。』

『土岐さん、專断をされるも事に依るのです。お綾の代にお友を……娘であらうとも、一生の大罪ですぞ。親としても專断す可き事ではありますまひ。私の一存でもう約束をして下つた、今更取消は出来ないなぞと……お前さんは私を何と思つてお居てなさるかひ。娘が厭つて居る男を、強ひて夫に持たせて、其陰に立つて事を成す大助だと思つてお居てなさるかひ。怪しからん事を。直ぐに取消して貰ひませう。怪しからん事を。』

土岐は何と返す可き語が無かつたか、一言の答さへしないのであつた。

(七十三)

お龍は室に入つて来るより、土岐へ鳥渡顔を見合せ、大助の傍近く坐りながら、

『土岐さん、入ッしや。何時入らッしやツたか存じませんで、失禮を致しました。』

『いや、何致しまして。此通始終上るのでがずから、其御會釋では痛入るてがすよ。』

お龍は大助の尙ほ怒氣鎮まらざる顔を凝乎と見て、『其様に大きな聲をなさる事はありませんよ。誰が聞いても外聞ないぢやありませんか。土岐さんだつて、此方の爲をお思ひなさればこそ。』

『お前などの知つた事ではないのだ。彼方へ行つて居なさい。』と大助は語調鋭く、『女が直さに口を

出すには及ばんのだ。』

『あゝ左様ですか。女だから口を出すなツてお云ひなさるんですね。はい、私は女で御在ます。女は女ですが、お綾さんやお友さんの母親ですよ。』と、お龍は片頬に笑を含みながら、『娘の縁談だから、母親の私が口を利くのに、何も不思議は無からうかと思ふんですよ。ねえ土岐さん、左様ではありますまひかね。』

『それは御尤で。』とばかりで、土岐はにこ／＼笑つて居る。

『強ちに悪いとは云はないが、今は土岐さんと私と二人の間の相談だ。能く前後の筋道を知りもせんて。』

お龍は早くも大助の語を遮つて、『いゝえ、能く知つて居りますよ。今だつて聞いて居たんですもの。それには、所天、土岐さんがお友さんをお綾さんの代にツて御話も、實を云ひますとね、私から土岐さんへお頼み申したんですよ。』

『な、な、何だと。』と、大助も餘りの意外さに、睨つた眼にお龍を睨付けて居るばかりで、語を出し得なかつた。

『だから、土岐さんへ怒付けなさるのには、實に御氣の毒なんです。おほい。御自分こそ筋道を御知んなさらない癖に。土岐さん、何卒悪く思つて下さらない様に願ひますよ。』と、お龍は如何にも得意らしく、勝誇つた眸を示した。

『いや、何と申しても私が悪かつたのがす。』と、土岐は態と面目なげな眸を粗ひ、御新造の御依頼

があつたと致しても、主人公の御意向を確めないで、私に事を計はうと致したのは、私の不行届てがした。而も、私の存意に出た様に申したのは、其間に何か目論見でもあるかの様に聞こえるがすから、別して主人公の御疑念を招いたかも知れんてがす。如何にも恐縮で、唯々御詫を致すより外ないてがす。八十島さん、頼夫の大失策でがしてな、何卒御勘辨を願ひたいもので。は、は、は。」

大助も今は土岐へ對して氣の毒に思ふと共に、お龍の出過ぎた處置が、打もした程に腹が立つのである。

「土岐さん、お前さんへは後で御詫をします。併し……如何にも憎む可きは、こ、此女の——お龍の處置です。」

大助が斯う云ひながら、お龍の方へ膝を向替へた時、お龍は早くも口を開いた。

「はい、私は此女ですのさ。家内を呼ぶのなら、何とか呼方がありさうなもんですね。此女ツて事が。」

「御新造さん、貴女が左様仰有つては、穩でないてがすよ。ま、ま、左様荒立ツては御宜敷くないてすから。」

「だツて、餘り酷い事を云ふぢやありませんか。土岐さん、私だツてもね、何も酔興や面白づくて貴方に御頼申しはしませんのですよ。」と、お龍は權を有つた眼で、大助を睨付けぬばかりに見据ゑて、

「お友さんが可哀相ですから、何卒出来るものなら、お友さんの望を遂げさせて遣りたいと思つて。」

「なに、お友の望」と、大助は覺えず語調を失ひながら、「お友に、な、な何の望が。」

(七十四)

「だから、所天は何にも知らないんだと云ふんでさ。」

お龍は憎い語調で斯う云つて、横を向いて冷笑つて居た。

大助とお龍と睨合つて居るので、土岐は傍から和め顔に、

「御新造さん、貴女が其ては、何も事が圓滑に參り兼ね様かと思ふてがす。お友さんの事に付いて、貴女が御心配なされた事を、委して御話を致しても可いてがすが。」

「土岐さん、お友の望とかを、君が聞いてお居てと云ふ譯なら。」と、大助は土岐の方へ膝を向直して、

「此女なんぞの申す事は。」

「今度は此女になつたんだよ。」と、お龍はつんとして居る。

此が平生であるなら、大助がお龍に此様事を云はせて置くのではあるまひが、事が總て意外に出て、別にお友の望などと、思も付かぬ事の其が、果して實情であるか虚構であるかを確かめたい意が前に立つて居るから、龍と耳に入らぬかの様を粧ひ、

「土岐さん、其事を伺ひたいものでがすが。」

「土岐さんよりか、お友さんに御聞きなされるが可いのさ。」

「御新造さん、それは不可せん。お友さんが阿父さんの前で、真逆に其様事のお話しも出来なされる